

松平文庫本「光源氏一部謡」翻刻（下）（梅枝：夢 浮橋）

今井，源衛

<https://doi.org/10.15017/2332779>

出版情報：文學研究. 67, pp.1-115, 1970-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻（下）

（梅枝―夢浮橋）

今井源衛

光源氏一部譚 第七（外題）

（表紙）

十八 梅 之 枝

十九 藤 之 裏 葉

二十 若 菜 上 下（扉裏）

1ウ

十八 梅 か 枝

一 御もぎの事おほしいそく、御心よういまうけよのつねならずと

ハ けんしの御ひとりむすめあかしの上の御はらのひめ君
裳着したまふ事也 くれなるのはかまは男女ともに三歳に

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻（下）（今井）

てき給ふ このからもおとなに成ておとこのかたへのよ

ういにちやくし給ふ物也 みやつかへする女房もさるへき

人の御前へはこれをきずしてはいてぬ事とみえたり

一 春宮今上も同きささきに御かうぶりの事あるへければやかて

御まいりも あかしの姫君 春宮へまいる也 うちつゝへきにてむ月十日あま

りのほとにたきものあはせたまふけんし六条の院にてあはせ給ふ事也

2オ

一 大式のたてまつりしかうともこのたひのあやうすものな
んとをいにしへのこれほもろこし舟のわたるたひにつくしにゐたる太
る事也（大式とりつきてみつきはたてまつ
うすものあやに御らんしくらぶるに故院の御代のはしめつ

かたこま人のたてまつりし物ともなをふるきものこそうる
 はしくめてたかりけれとてこのたひのをは人々にたまはせ
 けり かうとも御らんしあはせて御かたへふたくさ
 つくばりてあはせさせたまつり給ふ ゑゑりとくへて
 かをこまかになす事なり かかなうすのをとみかしかましようきこゆ いつかたにも
 御まへに人あまたならすすこしおとなびてしづまり」 た
 るかきりさふらはせ給ふ むらさきのうへしんでんのなか
 とりはらふ也 おのはなちいでに御すまることにふかくしてあはせ給 お
 とはそんなふたつのほうを御すまるこぶかくしなして
 御心とどめてあはせ給 かたみににほひのふかさあさも
 かちまけのさだめあるへしとれいのおやげなき御あらそひ
 心にてのたまはせけり

一 一月のつこもり雨すこしふりて御前の梅のかほりもゑな
 らぬほとにひやうふ卿のみやわたらせ給へり けんしつれくと
 侍りつるによきおりかなとて梅のかほりをめでおほしま
 すにせんざい院よりとて「 前齋院 ちり過たる梅の枝に付たる御
 文もてまいれり これはあさかほのさいめんより也 前齋院へもこのた
ままつり給へるなる へし御文には

3オ

2ツ

前齋院 花のかはちりにしえたにとまらねどうつらん袖のあ
 さくしまめや ほのかなるを宮は御らんし付て事々しう
 じゆんしたまふ うやまはぬ株也けんしなめける事きこえつたりしを
 まめやかにものせさせ給へるにこそこのたまふ あつらへ
 申給したきものはせいてまいらせ給へり ぢんのはこ
 にるりのつきふたつすへて大きにまろがしつゝいれ給へり
 一 心葉こんるりには五よりの枝しろきには「梅をえりてお
 なしく引むすひたるいとのままもなよびかにしなさせ給
 心葉こゝにてはるりの たをやか也御つかひに梅がさねのしやうそくかつけ
 壺のふたとみえたり くろほう給 御文もおなし色のかみにて御返
 源氏 花のえにいと心をしむるかな人のとがめんかを
 つゝめど

一 このたきものゝまいりたるつゐてにけんし御かたへ
 人をめぐらし給てたきものをこの夕暮のしめりに心みんと
 申給へればかたへより心々にしなしてたてまつり給へ
 り 螢の宮にけんしこれ心み給へ」たれにかみせんとの給
 て御ひとりともあまためす
 引歌 君ならたれにかみせん梅のはな色をもかをもしる人

4オ

3ツ

そしる と言歌の心也 宮はしる人にもあらずやとひげし給へとにほひのふかさあさゝをいさゝかなるとがをわきて心見給へるいとめてたし

一 春のうへの御は 梅花方 三種 はいくわほう みくさましり

一 夏のうへの御は 花ちるまゝ 黒方 かようほう 荷葉方

一 あさかほのさいみんよりのはくろほう 薫衣香方

一 冬のうへあかしの上のは くゑかかうほう

一 源氏の御はしゝうほう 侍従方也

一 この侍従方をはう大うちの陣御川のちんのみかは水になぞらへて六

条の院のにしのわた殿のしたよりいづるみぎはちかふうづ

ませたまへるをこれみつのあそんの子に兵衛の尉ほりてま

いりたるをさいしやう夕きりの中將とりて御前にまいらせ給へり

やかて心見給

一 宮いとくるしきはん者にもあたりて侍るかなげぶたしや

とのたまふ いつれをもむとくならずほめたまふをけんし

は心ぎたなきはんしやかなとわらひたまふ 喜ぬれば大み

きまいり御あそひはしまりておもしろし あすのうちなら

しに楽人のかたにも」ものゝねふきたてゝきこゆうちの 5オ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

おととのきんたちもげさうばかりにてまかつるをめしとゝめて御琴まいる 夜ふけて行て御かはらけまいるに

宮 鶯の声にやいとゝあくがれん心しめつる花のあたりに

源氏 色もかもうつるはかりにこの春は花さくやとをかれす

もあらなん 頭後かしわき云の中將とはこしうとの御ちやくしの事也

うぐいすのねくらのえたもなひくまでなを吹かよへ夜半

の笛竹

夕きり 宰相中將 心ありて風よくめる花の木にとりあへぬまで吹

やよるへき」 たに 弁少將 かすみさへ月と花とをへたてすはねくらの鳥もほこ

るびなまし ヒビ

一 かくてあかつき兵部卿の官は帰り給へは御をくり物にけ

んしの御れうの御しやうそくくたりに手ふれぬたきもの

ゝつほ二ツそへて奉給ふ 御車より

宮 花のかをえならぬ袖につゝみもてことあやまりといも

やとがめん 御返

源氏 めつらしと古里人も待そみん花のにしきをきて帰る君

御車かくるゝまでをひてきこえ給へり

5ウ

一 御裳着はきさらき一日なり 御こしゆひには秋好」 中 6オ

宮まかてさせたてまつり給ふ むらさきの上も中宮の御かたへわたりたまへり いぬのときひにあかしの姫君をもにしのおとどへわたしきこえ給へり やかて御ぐしあげのな

いしなともこなたへまいる

これは大内のないしのかみ也 御もぎの時のやくにん也

一 春宮の御元服は廿日余ひのほど也 おとなしくおはしませは人々の御むすめをきをひまいらせたまふ

一 うちのおとゝはかやうに人々の御むすめかしつき給ふを

きゝ給もいとらうら山しくひめ君の 雲井の 御ありさまねび

とゝのひうつくしけにてつれゝとなかめおは」するも御 6ウ

物おもひなり 夕きり さいしやうの中将をはかたゝよりむこにと

り申さんとあるよしうちのおとゝにかたり申す人あり ひ

きかへしおとゝは御むねふたかるへし ひめ君のかたへお こしつと

はしたれはおりから御ひるねし給へり かひなをまくらに 雲井のかり

てふし給へるに御ぐしのたまれるほどあつかはしくはみえ

ずくれなぬのひとへにすきたる御はだつきあふきをもちな

からの手つきなとおかし ちゝおとゝ扇をならし給へるに

うち見あげ給へるまみもいとらうたけにおきあがり給ふ

御かほのあかめるもおやの御めにはうつくしうのみゝゆ」 おとど 7オ

うたたねはいさめきこゆる物とあるは

引歌 たらちねのおやのいさめしうたゝねは物おもふ時のわ

一 さにそありけると云歌の心也

一 まめ人を のちに よその人のむこにとりきこゆるよしを ひめ君に

かたり給てなさけなき人にもありけるかなとのたまふに姫

君ともかくもおもひわくるかたはなけれとわか身からのつ

らくておやにもかくもてあつかはれたてまつる事と思つゝ

くるになみたのこほるゝをはつかしとおほしてそむきたま

へるさまいとらうたし おとゝたち給てのなこりもやかて

ななめいたして心よはくもすゝみいでつるなみたかなとは

つかしくおもひ給ふ」おりからまめ人より御文あり さす 7ウ

かにぞとりてみたまふ いとおほくて 夕きり

つれなさばうき世のつねになり行をわすれぬ人ぞ 中将

人にことなる よそのむこになり給をもけしきはかりも

かすめぬつれなさよとおもふはうけれど

姫君 かきりとてわすれかたきをわするゝもこやせになひく

心なるらん とあるをさいしやうは心えずとうちかたふ

きつゝをきがたふ見ゐたまへりとぞ
以上十一首

十九 藤之裏葉

一 ひめ君春宮への事也
御いそぎのほとにもさいしやうの中將はなかめかちにて

はれくしきを我なからしうねぎぞかし」かはかりおもふ
事ならばせきもりのうちもねぬへきさまにおもひよりはり給
へるに とはうちのおとゝのさらた□めてゆるさはやとお
もひ給事也

引歌 人しれぬ我かかよひちのせきもりはよひくことらう
ちもねなゝんと云歌の心也

一 うちのおとゝはこのひめ君をいかにせまし春宮へまいら
せんにもまめ人のうき名もよの中女御まいりかなちまじき也にもりにたれば中々な
らん そのほかはいまの世にこのさいしやうにまさりたる
御むこなし かやうに心くらべせんほとによその人のかた
へなひきもてなされんをきかんもむねいたかるへしとおも
ひよりはり給へり おとゝのかたよりまけん
とおほすへし」

一 やよひつこもりにうちのおとゝ大宮の御き日に極楽寺に

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

8ウ

8オ

まうでたまへり 宰相タキリの中將もおさくおとらすよせをし
くてまうで給つゝうばみやの御ためとりもちてみしゆきや
うし給 夕つけ行風すゝしく花のなこりも人々帰りうくし
たまふ うちのおとゝむかしおもひ出てなまめかしううそ
ふきなかめたまふ さいしやうもあはれなる夕のけしきに
いとゝなかめいりておはするをおとゝ心どきめきに見給ふ
事やありけんとはさいしやうのなかめをおとゝは雲井の雁
の事を恋しくおもふ」にやと見給へり 心時めきといふ
は人もおもはぬ事をわれとおもひよりてうれしき心をし
り あまげありときはく心 あはたゝしきあき風にきをひ
かへり給ぬとは競あらずひ帰る心也

一 としころのおもひのつもりにやおとゝもむけにおほした
ちて事々しからぬつゝるてのさるべからんををほしまうく
卯月ついたち頃御まへの藤のさかりにてたゞに見すぐさん
はおしきゆふはえにあそひなとし給てくれゆくほととい
とゝ花の色まさるに御ちやくしのとうの中將して のちに木
きこえ給一

内大臣 我やとの藤の色こきたそかれにたつねやはこぬ春の

9ウ

9オ

なこりを けになへてならぬえたにつけ給へり かしこ
まり申給て御返

中将 中々に折やまとはん藤の花たそかれ時のたどくしく
は とてくちおしくこそをくしにけれとりなおし給へ
と申給ふ けんしのおとくにかくとこらんせさせ給へはお
もふ心ありて物せられたるにやさやうならんにこそ月こ
のうらみもとけめとのたまふ御心おごりこよなふねたげ也

わさどつかひあるにはやうとゆるし給てなをしこそあま
り」あざくてかるびたんめれ引つくるはんやとてけんしの
御れうにある色こき御なをし御ともたせてたてまつり
給ふ 我か御かたにていたふけしやうじつくるひてたそか
れもすき心やましきほとにまうて給 あるしの君たち頭の
中将をはしめて七八人むかへいらたてまつる おとくもお
まし引つくるはせ御かうふりし給て出給とて北の方わかき
女房などとのそきて見給へやいときやうさくにねびまさる
人なり ちく大臣はたくとなまめかしくみゆるにゑまれ
てよの中わするくやうにおはしましけり」それは又こと
はりそかし これはあくまでまことしくすぐよかなる事す

10ウ

10ウ

くれたりなんとほめ給て引つくるひてたいめんし給へり
物まめやかにむべくしき御ものかたりはしはしにて花の
けうにうつり給ふ 春の雨いづれとなくひらけいつる色ご
とにめおとろかぬはなき中に心みしかかくうちすてゝみな
ちりぬるがうらめしくおほゆるころほひこの花のひとりた
ちをくれて夏にさきかゝるほどあやししく心にくゝなん色も

將又の心也
はたなつかしきゆかりにしつべしとて花をみあげてうちほ
をゑみたまへるいと」にはひありてけしききらくしきお
とく也 中嶋のわたりけしきばみよこたはれる松にさきか
りたる花のさま見所あり さる心ちして大みきまいりほ
となくみだりかはしくしるゑはし給ふ おとく君はすゑの
世にはあまるまでいふそくにおはしますをとし老ぬる人を
思すて給なんうらめしき ふんしゆうにもかれいといふ事
侍らすや ながしのいさめもおほししるらんとおもふを
としふりぬる人をはなやまし給ふなんうらめしきとの給て
内大臣 むらさきにかことはかけん藤の花松よりすきてうれ
たけれとも さいしやうさかつきもち」なからすこしは
ひしたまへるさまいとよしあり

11オ

11ウ

11ウ

中将 いくかへり露けき春をすこくし来て花のひもとくおり
にあふらむ とうの中将に給へはさし給ふさかつき也

かしわ木
頭の中將

たをやめの袖にまがへる藤の花みる人からや色も

まさらん 弁少しやうれいのごゑいと花やかにてあしはら

きをいだしてうたふ おとゞけやけうもつかふまつるかな

との給てとしへぬるこのいゑのとうちぞへたまへる御こゑ

いとめてたくおとゞはほとなくそらゑいをし給ておきない

たくゑいすゝみてむらひなればまかりいりぬるといひすて

ゝいり」 給へはさいしやうはいたくゑいてまかでん空も

ほどくしくこそなりにたれとうの中将御やすみ所ゆつり

給へといふ 中将花のかけのたひねよくるしきしるへにそ

侍るやといへはさい將は松にちきれるはあだなるはなかゆ

ゝしやとせめたまふ 中将の心の中にはおとこがたよりす

ゝみ給事もなかりしにねたのわさやおもふ事あれど人か

らのめてたければかやうにもありはてなんと雲井いもうと君の

事をおもひし心なれば姫君のかたへ心やすくみちびきつ

さいしやうはゆめかとおもふ御たいめんにもいとゞ我か身

はつかしくそおほえ給や おんなはいとはつかしとおもひ

12ツ

しみておはするさまねひまさりあかぬ所なし 弁少將のす
ゝみいでしあしかきはみゝとゞめたまふや

引歌 人しれぬおもひやなにのあしかきのまぢかけれともあ

ふよしもなしと云歌の心 川ぐちのどこそさしいらへま

ほしかりつれとさい將のたまへはきゝにくしと思て

女井 あさき名をいひながしたる川口はいかがもらしゝ関の

あらかき あさましとの給ふさまこめかしうおかし

さい將 もりにけるくき田の関のを川口おさなひれたる也のあさきにのみはお

ほせきらなん なやましきとゑいに「かこちてあくるも

しらすかほなり 人々きこえわつらふをおとゞしたりかほ

なるあさいかなとがめ給 されどあかしはてゝそいて給

ふ のぞきて人々みたてまつる ねぐたれの御さまみるか

ひあり けさの御文しのひたるさまなれど月ころひきかく

しつゝかくろひありきし御使けふはおももちかほもち也なんと人々し

くふるまひなしたり れの馬の介なりけり 中将かしわ御

つかひもてはやつてかつげ物二なし 御文には

中将宰相 とかむなよしのひにしぼる手もたゆみけふあらはるゝ

袖のしつゝをなんとなれかほなり」おとゞわたりてみた

13ツ

まふぞわりなきや 夕まりの事 手ぞいみしくもかきなられたるやかな

なんとのおたまふも年比のなこりなし 御返り中々けふはみ

えきこえ給はぬをれいの物いひさかなきこたちつきしろふ ヒ

一 人をさしおどろかしてわらふ事也 六条のおとゝもこのよしきこしめしてけり さい相けさ

はつねよりひかりまさりてまいる給へるをけんしうちまほ

り給てけさはいかにふみなんとつかはしつやかきりなき人

も女のみちにてはみたるゝためしあるを人わろく心いられ 心みしかき也

せですこされ「たるなんすこし人にぬけいでたる事をとお 14オ

ほゆる うちのおとゝのみ心のひたおもむきにすくみてに ヒ

はかにくづをれ給ふを世人もしたにいひいつるやうあら

ん さりとて我かかたたけふ思ひがほに心なつかひ給ぞ

すべて人みえにくき所あるおとゝなりなんとれいのおしく

へきこえたまふ けさは卯月八日なれはくわん仏 たんしやうのほとけ也 へ ヒ

まつり御 導 たうしまいる 御かたゝよりわらはへいたして

ふせなんと大やけさまにかめしうなん くるればさいし

やうはうちけしやうしていそきいて給 あるしのおとゝも こしつと

いとゝしき「ちかまさりをうつくしき物におほしてかして 14ウ

きたまふ うらみものこらずまめやかなる御心さしのとし

ころこと心なくてすくしたまへるをありかたき事にうちの

おとゝはおほしけり おもふやうなる御中は水もらんやは

一 かもまつりになりぬ かのおとめの巻にさたありし五

節の舞姫これみつのむすめはそのまゝうち内侍のすけに

てさふらひけり このさいしやうそのころは大学の君とき

こえしほとより御おもひ人にてたえぬ御ちきりなれはくも

ゐのかりの御中のさらためてかやうにめてたきをたゞなら

すおもふへし」

一 かもまつりのおんなつかひといふ事にこのないしたち

けり いでたちの所へもさい相はとふらひ給ふ くるまな

にくれまでもこまやかなり このないしは六条の院よりも

御心よせなれはうちとうくもおほえことにいかめしき人

也 御文に

宰相のちに なにとかやけふのかざしよかつみつゝおぼめく 夕まきり

までもなりにけるかな あふひくさを恋にあふ日ともち

いたるはこの歌にてきこゆへし 御返し

藤内侍 かざしてもかつたどらるゝ草の名はかつらを折し人 桂

やしららん なをこのないしにぞはいまきれ給へき」 15ウ

のちに三条のつへ(旁記)へもめる雁(と
おなじやうにさしやうのきんたちうと)

一 この巻を藤のうら葉と名付事は卯月七日さいしやうをむ
こどり給し時大みきにうちのおとと藤のうら葉のとうちし
ゆし給しゆへ也

引歌 あさ日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはくわれ
もたのまんと云心也 この歌ゆへに巻を名付たり

一 秋のちもくに中納言になり給ぬ 御いきおいまされはか
やうの御すまひるにてはいかかとして故せつしやうの御いへ
三条殿とてのちまてうばの大宮のすみ給しをかくれ給ての
ちはたれも住み給はねはひめ君もろ友に御殿うつりあり

御おほぢせつしやうの時よりさ」
事也 三條殿 御おほぢせつしやうの時よりさ」
ふらひし人々もさうし

きなしていにしへにかはらすおとなしく住給ひけり

一 ひめ君の御めのとかのちくおとのかたへとりはなたれ
給しときものくはじめの六いしゆくせよとつぶやきたりし
事をいまにわすれ給ふ事なこんはまします いまかや

うに位たかくなり御しやうそくのいろもこくくなりぬればき

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

くのいとおもしろくうつるひたるを一えたかのめのとにた
まはせて

六位のしやうそく也
夕きり あさみとりわか葉のきくを露にてもこきむらさきの
中納言 色とかげきや からかりしおりの一こと」 葉こそさら
にわすられねとにほひやかにほをゑみての給へはひめ君の
めのと この殿にうつり給て
めのと 二葉よりなでたるそのく菊なればあさき色わく露も

なかりき いかにも御心をかせましくけるそといとなれ
てくるしがる なたてとは
しつげたり

一 やり水のみくさかきあらためられて心ちよけに一むら
すくきも所えたり

引歌 我やとの一村薄むしの音のしけき秋ともなりにけるか
なと云歌の心也 おかしき夕暮をまめ人と雲るのかり
ともろ友になかめておさなかりしときの物かたりし給て遣
水を」

中納言 なれこそは岩もあるじみし人の行ゑはしるややど
のまし水

三条の上 なきイ
みし人の影たにみえずつれなくて心をやれるいさ

らひ井の水 いさら井は六月の季と申候へとも是は九月の歌也 うちのおとゝ大内より

いて給とてもみちの色におとろかされてこの三条殿へおはしたり 中納言御かほもすこしあかみていとゝしづまりてさふらひ給ふ ありつる御歌を見つけ給ておとゝうちなき給ふ おきなはこといみしてとのたまひて

内大臣 そのかみのわか木はむべもくちぬらんうへし小松も
こけむしにけり 中納言の御めのと」 したりかほにて
御返 17ツ

めのと也
幸相の君 いつれをもかけてぞたのむ二葉よりねさしかは
せる松のすゑく

一 源氏の太政大臣はおとめの巻よりしゆん三后の御くらゐなるをいまの御門の御心にかのちそう持備の申きかされたまつりし事をおほしめしわすれず けんしは御ちゝなりと心へ給ふまゝいかにしてもみかとなしたてまつらんとおほしめせともけんしうけびき給はねはちからなくてらいねんけんしよそちにたり給はん御賀に事付てこの秋太上天皇に」
なぞらへせんしくたしたてまつり給ふ 是はおりのみかとの
そう官也太上天皇にあ

18オ

かり給へ かくても御門はいやくしさをつくしてみせたては院也 いやくしさをつくすとはい
やしき事をつくさんの心也

一 神無月に御門六条の院へ行幸あり しゆしやくぬんへもみかより御せうそこありければ院さへわたりおほします いとめつらしきたひのみゆきにてあるしの院も御よおゐることにみがかせたまふ この比は秋のまぢのみちのさかりなればへたてのへいをくづして中門をひらきて霧のまよひなくもみちを御らんさせたてまつりたまふ あらはな

るへき所にはせじやうをひきそりはしわた殿にはにしきを
しきいつかしくもてなさせ給へり 行幸はみの時にてまつ
むまばのおとゞにてくらへ馬のせらる 左右の官人御むま
とも引ならへこんゑもたちそひたるさほう大内のさ月のせ
つにあやめのわかずひつしのくたるほとにみなみのしんで
んにうつりおはしますみちのほとひんかしの池にうかいと
もおろさせたまふ 大内のうかい也 みづしところの鶺鴒のおさ朱雀院の
鶺鴒かじめしならべておろさせ給へり ちいさきふなともく
いたり わさとの御らんにはあらてすきさせたまふ」みち
のほと御ため也

19オ

一 してんに御門の御座朱雀院の御座二よそわられてあるし

の御座はくたれるをせんじにてあげさせ給ふほとめてたく

みゆ 池のいをくはひたりのすけさくげ又北野にかりつか

ふまつるきじ一えだをみきのすけさくけてしてんのにし

ひかしよりみまへにいてくみはしのもとにひざまづるてそ

うす 大きおとくおほせをうけ給ててうじておものくにま

この巻にうちのおとく太政大臣にあかり給へは大き大臣と也

一 れいの楽の舟ともこぎまひててうしともそうす 夕日の

影けざやかなるにけしきはかりうち時雨一 たる紅葉の色 19ウ

はにしきを引わたせるわた殿にことならず 舞ともはさら

にもいはずこまもろこしとつくしたる楽とも也 くれかく

るほとに御前にぶんのつかさの御琴ともめす うたのほう口伝

しのかはらぬこゑを朱雀院はあはれにきこしめすとほんに

あり 御かはらけまいるにあるしの院は菊をおらせ給てい

にしへのせい海はのおりをおほしいつ

源氏 色まさるまかきの菊もおりくくに袖うちかけし秋をこ

ふらし 大きおとくはいにしへのもみちの賀にはおなし

まいにたちならひきこえしを」 われも人もおとらぬさか

20オ

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下)(今井)

へとは申なから又けんしはことなる御ひかりかなと思しり
給

敦任大臣 むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世のほ

しかとそみる

朱雀院 秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみちのおりを

こそみね うらめしけにそおほしめしたるや

冷泉御門 世のつねの紅葉とやみるいにしへのためしにひけ

る庭のにしきをときこえしらせ給けり

一 あかしの姫君きん上春宮へまいり給事もこの春の卯月廿日余ひ

也 三日のほとはむらさきそひ申給ふ いて」 給ふとき

手くるまゆるされてひとへに女御のことし

一 三日過ていて給ふときまことのはく君あかしのうへたち

かはりまいり給てそれよりはひたすらそひ申てうちにさふ

らひ給へはおもふさま也 むらさきと明石とたちかはり給

ふとき御たいめんありけり

以上廿首

20ウ

廿若 菜 上

一 朱雀院の御門ありし御幸の、ちそのころをひよりそこは
かとなくなやみおはしますを冬になりてはいとおもくなり
給てみすの外にもいてさせ給はず いにしへより御おこな
ひに心しみて」 入道のほいふかくおはしまししを太后の
みやおはしますとはよろすには、かりきこえ給しをいま
はなをそのかたにもよほすにやあらん世にひさしかるまし
き心ちなんするとしゆつけのあるへき御よういなり に
し山なる 嵯峨なり みてらつくりはて、御くしおろしてうつ
ろひ給へき御心まうけなり

一 御子たちは春宮きんじををきたてまつりておんなみや四とこ
おはします 女一宮女二宮落葉の宮也 女三二品内親王 後に入道の宮 女四と
の中に女三のみやをとりわきかなしみおはしましていかさ
まのうしろみにも心やすく「見ゆつりをきて御ほるとげん
と心いてかしくおはしめせとも御心かなふ人も世にあり
かたきものなりけり

一 ほたるの兵部卿の宮玉かつらの君をとりはずし給て又こ
れをのぞみ申給ふ

21ウ

一 藤大納言と申すはとしころしゆしやくゐんのちよく別當
にてましませは御かへり見にあつからんと女三の宮をのそ
み給ふ

一 ちじの大との、太郎君とうの中しやうと申せしはこのこ
ろかしわ木さんぎうゑもんのかみにて人からもゆへふかく又心をも
たかふをきて、みかとの御むすめ」 ならでは北のかたに
さだめじとおもひあがりたる人也 は、かたにおほろ月よ
のないしのかみは御おばなれはそのたよりにてしきりにの
ぞみ申給ふ このゑもんのかみこそさもありぬへき人なれ
ともいまわつかになりのはれはあまり位みじかくていか、
はあるべからんとおほしわつらふ ちしのおと、もねんこ
ろに申給けり

一 としの内にまつ御もぎあるべしとて世の中ひゞきたる御
いそぎなり 秋このむ中宮よりしろきからも御しやうそく
えならぬたき物とも」 冷泉くさぐま、まいれり 御くしのはこ
はいにしへ齋宮すぎてうちへまいり給しときしゆしやく院
よりまいりたりしくしのはこ也 めてたくあらためくはへ
てさすがもとの心をはうしなはずそれとみせていみしくし
なさせ給へるをたてまつり給

22ウ

秋好中宮 さしなからむかしをいまにつたふれはつげのをぐ

しぞかみさびにける あやかり物也 けにおゑ物げしうはあらじとゆつ

りきこえ給ふほとおもためんほくしき也しくきかんさしなり 御返

朱雀院 さしつぎにみる物にもか万代をつげのをぐしのかみ

さぶるまでとそいはぬきこえさせ給ける」

23オ

一 御こしゆひにはちじの大殿まいり給ふ うちとうくうより
りもいかめしき御とふらひととなり 六条の院よりはまし
て色くまいる 尊者 そんしやの大臣の御ひきいて物はかの院
よりそまいりたる そんしやの大臣とは御こしゆいの大
臣その日はかり尊者と名付たり

一 この御いそき過て三日のほとはねんしくらし給てその
ち御くしおろし給ふ 山のざす其外御いむことのあしやり
三人さふらひて御ほうぶくなとたてまつるほといとみし
くゆずりみちてなきごよむ 女御みやす所ちりくにうつ
るひ給へきなれば」 よのつねならぬすあはれなり おほ
る月夜のなしいはつと御かたはらにそひめておほしいりた
るさまこれをぞ院も女三の宮につぎてはかへりみがちにお
ほしける

23ウ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

一 六条の院もまいり給へり かはり給へる御ありさまみた
てまつり給ふにけんしはきしかた行ききくれてかなしうお
ほさる すみそめの御すかたうらやましく見たてまつり
給ふ 御もてなしの事 けふのみあるじの事はしやうじものにて院も御はち
なとこと事にてまいるを人くなみたをしのごひつゝ御は
いせんあり

一 かの女三の宮をおやさまに六条の院にゆつりきこえ」
給へり いなひきこえ給へきやうもなくてうけびき申給つ
みなのそみ給し人くくちおしくおほしけり

一 むらさきのうへのおほさん事のいとをしければけんしも
ものおもひそひたるやうにおほしけり むらさきの御心の
中には源氏の御心よりおこりたるけしやうにもあらはこそ
うらみもゑんじもし給はめこれはそらよりふりたるやうに
てのがれかたき御事なるを中く人わらわれにおもひな
げくよしみえじとおほせはつれなくもてなし給へるをけん
しいよくあはれにありかたしとおもひまし給ふ」

一 としもかへりぬ 正月廿三日ねの日なるに左大将とのの
北のかたけんしの四十の御賀にわかなたてまつり給とは
玉かつらの君なり さるへき人は四十よりすゑ十年に一度

24ウ

24オ

つゝかたよりおやをもてなしおんをかふりたまへるかた
 〳〵その人の御いのりをしようつ物をはらひてたてまつ
 り給ふなり 老をいのる事なれば名を祝てわかかなを奉物也
 一 しんでんのはなちでいをひけるよりよろつはこびてし
 つらひかさられたり をきものゝつくゑ十二たてゝ夏冬の
 御しやうそく御ふすまをかれたり づし二よろひ御かざし
 のたいはちんしたんにて」 おなしこかねしろかねもつか
 ひなしたる心ばえめなれぬさまに玉かつらみやびふかくし
 なし給へり みやびとはけたかき事也 かゝげのはこ おとこのびん
 かき給ふ具也 御ゆるつき ゆあひ給ふときのみ也そうし
 てゆあひ給ふを御ゆるといふ也 みち
 やう 木帳也 かべ代 御ぢしよのつねのたゝみの事也のき四十御まし御しとね 御琴
 琵琶笛そうして管絃の具とも かうこ たき物入物く
 すりのはこ このかさられたるおましへはよそ〳〵のみこ
 たち大臣かんだち殿上人のこりなくつどひまいり給てまい
 楽をとゝのへ」 大みきまいりろくのからひつも四十枚な
 り みなかづきわたし給ふ物也 それへいで給ふとてけん
 しまづ玉かつらの君に御たいめんあり いつしかひける
 のわか君をふた所までまうけ給てふりわけかみなるをふた
 りくそくし給へり ぢんのおしき四してわかけしきまで也かなさまはかり

25才

25才

まいらせ給 御かはらけまいり給ふに玉かつら
 北の方 若菜さす野への小松をひきくつれしてもとの岩ねをいの
 る今日かな
 源氏の院 小松原すゑのよはひにひかれてやのへのわか此歌ゆへ巻をわかなど也かなも
 としをつむへき」 けんしの御ことはにしはは老をわ
 すれても侍るへきを人しれすかそへとり給けるけふのねの
 日こそうれたけれなんとたたまふ それよりおましにいて
 給へり これを御賀のはしめに十月祭の上十二月秋好中宮し給
 一 かくてきざらき十日余ひに女三の宮六条の院へうつろひ
 たまふ びやうふ木帳よりはしめてはこひしつらはるゝ事
 ひとへに女御まいりのことし よろつ此女三の御事をはし
 ゆしやくるんはもろこしのきさきのかざりをまなひてもて
 なし給ふとほんにあり むらさきのうへもよろつに付て物
 おもはしくて」
 御手習に めにちかくうつればかはる世の中を行すゑとを
 くだのみけるかなとあるを御らんしつけて
 源氏 いのちこそたゆともたえめきたためなきよのつねならぬ
 中のちきりを

26才

26才

一 女三の宮はたうつくしきちこのやうにはそくちいさく
あへかにみえ給ふ 三日のほとは夜かれなく 女三をは六でう
の院のしんてん
にす 女三の御かたへわたり給ふ 三日過ぬれはいつもはむ

らさきの御かたにおはしましけり としころむらさきをめ
がれすみ給しよりもいま女三の宮のわかうつくしきにみ

くらべ給ふにありかたき人と心まさりしたまひけり」 女 27オ

三より夜ふかく帰給へるあかつきはなきぬらしたる袖をさ
りげなく引かくしてなつかしくあひしらひ給とあり 四日

のあした春の雪ふれり 梅の花に付て女三の御かたへ御文
あり

源氏 中みちをへたつるほとはなけれとも心みたるゝけさの

あは雪 おりからうくひすなくに花を引かくして袖こそ
にほへとくちすさみ給ふ心は 引歌 おりつれば袖こそはへ梅の

花ありとやこゝにうくひすのなくと言歌の心也 御返事くれなめのう
すやうにて

女三 はかなくてうはの空にそきえぬへき風にたゝよふ春の

あは雪 御手もいとおさなくよろつ」 たどくしくみ 27ウ
え給ふ このとき十三四也

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

一 しゆしやくぬんはきささきのうちにながのみてらにうつ
り給とてむらさきの御かたへとりわき御文あり 女三
おさなき
人の心もなきさまにてうつるひたるをうしろみ給へたつね
給へきゆへもありやすらん とはむらさきと女三は御いと也

朱雀院 そむきにしこの世にのこる心こそいる山みちのほど

しなりけれ 御使に女房 むらさきのしてかはらげさしいでさせてほ

そながそへたる女のしやうそくかつけ給

御返無 そむく世のうしろめたくはさがりがたきほどしをしる

てかけなはなれそ 御山にうつろひ給へは」 山の御門 28オ

とそ申す

一 ねうこみやす所さまくうつろひ給 おほろ月よの君は

御ちゝ二条太政大臣の御家に人めまれなるやうにてうつり
給へり けんしれいの御心なれはいま一たびたいめんして

きこゆへき事ありとさまく心をつくしてのたまふ おほ
ろ月よはしゆしやく院のあはれなる御事をさしおきていか

なるむかしがたりをかきこえんげに人はしらぬにても心の

とはんこそはつかしけれとのたまふ 引歌なきなどと人に
はいひてありぬへし心とはいいかゝこたへんといふ歌の

心也」かやうにはの給へともその御家づかさのいつみのさ
きのかみをけんしめしよせてねんころにかたらひてやかて
かのしのだの森を道のしるへにておほろ月よへおはしたり
かるく／＼しからぬ御みじろきなればはしたなくもえかへし
給はず

源氏とし月を中にへたてゝあふさかのさもせきかたく落
るなみたか いまさらたちにしわか名とりかへし給へき
かときこえ給 引歌水鳥のたちにしわかないさまさらにて
となしぶともしるしあらめやと言歌心也 けにたれゆへに
すまのさわきもありけるそと心よはくおほしなりぬ」

29オ

おほろ 泪のみせきとめかたきし水にてゆきあふみちははや
くたえにき
一 つるにこよひはとゞまり給にけり 日のさしあがるほと
にいて給ふにいにしへ藤の花のえんありしその木もかはら
す藤のさかりなるをさもうつりかはる世かなとおほすにへ
いちうがまねならねとなみたもうになん

しづみしもわすれずなからこりずまに身をなげつへき
やとの藤なみ たちかへりいでがてにやすらひつへき

もりのかたからぬしるしにや」こまやかにかたらひをき

29ウ

給ふ 藤の花なつかしくて

おほろ 身をなげんふちもまことのふちならでかけじやさ
にこりすまの浪 ねくたれの御けしきをまちうけてむら
さきの上はさならんとみしり給ふ いまむかしとあらため
給ふほと中空なる身のためくるしうとなみたくみて

衆 身にちかく秋やきぬらんみるまゝにあを葉の山もうつ
ろひにけり

源氏 水鳥のあを葉はいろもかはらぬを萩の下葉ぞけしきこ
となる」

30オ

一 かくのたまふほとにあかしのひめ君ほとなくたゝならす
なり給へり 御つほねはけんしのはゝかうあのみ給しきりつほなり
るほとにこの女御をはしけいしやともきりつほの御かたとも申けり淑景舎
きりつほのからなしけいじや也 かんわさしげき比なれば六条の
院へまかで給へり あかしのうへいまは御身にそひていて
いり給もめてたし

一 かのあかしのあま君は月ころは冬の町にすみ給しがこの
まごの女御たゝならでそのまちへいて給へれば人しれすう

れしくてなれよりつゝあかしのにうたうのひとりかのうら
にある事などはすかたり」申たり この女御はあかし
にてむまれたる身とはしり給はさりけり くはしくきくに
物あはれにてうちなきておはするをあかしのうへ心くるし
くかたしけなくてあま君をみぐるしやとめくはずれともき
ゝ入す

あま君 おいのなみかひあるうらにたちいてゝしほたるゝ海
士をたれかとかむる

ひめきみ
きりつほ しほたるゝあまをなみぢのしるへにてたつねもみ
はやはまのとまぢを

あかしの上 世をすてゝあかしのうらにすむ人も心のやみは
はるけしもせじ」

一 むらさきのうへ女三のみやにたいめんし給 この女御殿
あかしのうへ女三のみやむらさきなんとひしめきうつくし
くよりあひ給へはけんしはうれしくおもふやうなりとおほ
してその夜は又おほろ月よのかたへおはしたり このまゝの
ちはわたり給はず

一 としかへりぬ やよひ十日ころに女御わかみやをうみ給

春宮也
松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

オ31

30ウ

へり けんしのおとゝもうれしく御心おちるたまふ むら
さきはしろきしやうそくしてあまかつも手つからつくり給
ふ わかみやをつといたきもちてうつくしみ給へはまこと
のうば君あかしの上はたゝ」御ゆ殿などの事をおりたち
給けり

一 あかしのにうたうこのよしをつたへきゝていまはこの世
にのこるおもひなしとてあかしのたからともをはたてたり
しみたうにせにうしてはりまのおくのこほりに鳥の音もた
えたるみねありけるをとしころしめをまていますこしまつ
事あるといひしはわかみやのむまれ給はん事なりけり こ
のとき京へふみをかきてのほせたり入道わかかてみたりし
ゆめあり そのゆめにたのみをかけて心をはたかくつかひ
けり」

一 ふみにかきてのはする事あかしの上むまれんとてのさき
とし
入たう
のとしのきさらきにみしゆめ身つからしゆみの山をみきの
手にさゝげたり 山のひたりみきより月日の光いてゝ世を
てらす 身つからは山のかけにかくれてそのひかりにあた
らす 山をはひろきうみにうかへをきて入道はちいさき舟

32オ

31ウ

に乗てにしのかたをさしてこきゆくともたり ゆめさめて
より数ならぬ身にたのむ所いできてなにはばかりの事にてか
さやうならんとおもふし(マ)にそのころよりはあかしの上マまれて生給
ふ 女なりともいへのためたかきさいはひ 　あらせたま32ウ
へとはこの夢ゆへのりし也 入道がおやは大臣の位を
たもち給へりき こん夏の中將まではこのにうたうもなり
しを世のひが物にていなかたみとなれり 　その後めされし
三二セなカされし也
かともみやこに帰らん事は中三二セにてはりまの国にくらゐ
を申かへてはりまの国のとくふんにてかやうにあかしのう
らにはすみみちにけり 　このむすめの人となりゆくにした
がひてくちおしきせかいにてにしきをかくしきこゆる事と
なけきしとは 引 ふつきにしてふるさとにかへらさるは
にしきをきて夜るありくかことしといふ心也 　このゆへに
いまよりのちもたのみあり 　ひめ君の母となり給へは又
なに事をかほうたがはん世をてらし給へきなりとて
入道光いでんあかつきちかくなりけりいまぞみし夜の夢
かたりする 　とて月日かきてあかしの上的のかたへつかは
す 　いのちのをはらんほとをまなしろしめしそ 　世人のや

33オ

つる、藤の衣をもなにかあらため給へき 　この身はとらお
ほかみにもせし侍らんといひのほせたり 　としわかくて也
やしろをはしめてたてをきたる願ともにつきにしてふばこ
にふうじいれてのほせたり 　あかしの上此願文の 　いり
たるはこをもたせてまうのほりて源氏にもむすめの女御に
もみせたてまつりてかのあかしの岩屋よりかうあかしの岩やといふ詞こゝはかり也申たり
いまは鳥の音たえたるみねにいりぬるよしをなくカかた
り申す 　けんしもつねには恋しくいま一たひあひみんとお
もひし人をやとてこのふはこをおがみてとり給てのちまで
ちかくをかせて御らんしてたてたる願ともはたさせ給ふと
ほんにあり
一 　いまむまれたまへるわか宮いともうつくしく日今上にも
のを引のぶるやうにおよすけ給 　およすくるはおさなき 春宮よ
人のおとなしき也
り日木事也ことにまいり給へきよし御つかひあれは 　ぐしきこ
えてまいり給ぬ
一 　春のくれに六条の院へほたるの兵部卿の宮ゑもんのかみ
な木事也にわぎしてかくらすべき 　こゆみいさせてみるへかりけ

34オ

33ウ

りけさすきものともみえつるをねたふいでやしぬらんと
たつね給 ことしのけんしの四十の御賀にまめ人の中納言
を大やけより大将になし給へり 大将こなたへとめせはま
いり給へり まりもたせたりやおほせらる さらはこ
なたへにいてまいらんとてこれかれ引つれてまいり給へり
大將

やり水の事也
水の行あひはれて」よしあるかゝりのほとをしめてたち
いづ 源氏とはたるの兵部卿の宮とはかうらんによりて
34ウ

こらんす 暮行まゝに花のちるをおしみをあへぬわかき
んたちのまりに身をなげたるををかしとみたまふ けんし
わかかりしときはみすくしかたき物なりし さるはきやう
くゝなりやこの事のさまよとのたまふ まりの事也 夕きり かし
わんのかみもたちいで給へり かずまさりゆくほとに上ら
りかし木の事を上らう也 夕きり 夕きり 夕きり
うもかうふりのひたいすこしくつるぎたり 花みだりかは
しくちるめりやさくらにはよきてこそとあり」 引歌ふく
35オ

風の心ありせはこの春の桜をよきてちらさざらなんと言歌
の心也 大将はしほれたる花のえだををし折てみはしの中
のしなほとに居給ぬ ゑもんのかみつづきてぬ給ふ 女
三のおはしますしんでんの庭なればはしに御前のかたを

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

みやるに袖口こほれいて、女房のきぬのをとなひはらゝ
とかしかましままでそよめきたり 大将はれいのおさまら
ぬけしきと心にくからすおほきるゝにみすの中よりからね
このこゝのにかはりてうつくしきに こゝのにかはりたるとせ
ケテ日本のねこなれとも 又すこし大きなねこををひつゝ
からねこのようなりし也」 けてみすのつまよりはしり出たり みすの内の人ゝおと
ろぎてさばぎでそよゝとたちさはく ねこはまだ人にな
つかぬ心にてつなたなかくつきたりけるをにけんとしこし
ろふほとにみすのはし引あげられたり とみに引なをす人
もなし 夕日のけざやかにかさしいりたるひかりにみいれら
れたるひさしのまのひかしにあたりたる二のまの中のほと
にうちぎすがたにてたちたまへる人あり こうはいにやあ
らんきぬのつまのかさなりたるほとさうし」 のつまのや
う也 御ぐしはうちぎのすそにたまりてこちたくひかれた
るほとたけに七八すんもあまりたるとみゆ ひとりみきの
御ぐしいとをよりかけたらんやうにてねこのいたくなけは
みかへりたまへるおももちかたはらめわかかうつくしの人
やとふとみえたり まきるべきくもなきうちぎすがたけた
かくみやびやかにみゆればはうたかひなき女三の宮とおもふ

35ウ

36オ

36オ

にゑもんのかみはむねもつぶくときはぐへし としころ
のぞみかなはで心やましくおもひたえぬにほのかなれと
おもひのほかは」 みたてまつる事おほろけならぬちきり
とうれしくたのもしくおほゆるに夕日なれはおくくらき心

36ウ

ちしておほつかなし 大将ももろともにみたまひていと
たはらいたければ心をえさせたまつりてうちしわぶき給
へり そのとき女三の宮はやをらはいかくれ給ぬ ゑもん ねこそ
心なぐさめにまねきよせてかきいだきたれはいとかうばし
くにほひも思よそへらるゝぞすきくしきや けんしみ給

てくぎやうのみぎかるくしやとて御ましになをりてよひ

いれ申給ふ ほたるの宮もいり給ぬ わかき人くは」

37オ

すのこにわざとならぬ日の事にてわらうためしてつばいも
ちいなしかうじやうの物さるへきからものはかりにて大み
きまいる ゑもんのかみともすれば花につけてもながめの
みしてあるを大将はみとがめ給ていまのみすのつまをおも
ひつるにやと心くるしくおほす 帰り給とても大将とゑも
んのかみはひとつ車にてこの比のくらしかたさはたゝこの
るんにまいりてなくさむへかりけりなんと物かたり申給ふ

大将はつこもりの日こゆみもたせてまいり給へ春をしみ
がてらとかたらひたまふ ゑもんのかみのことは 六条の院はいつも」 たゝむら

37ウ

さきのたいにのみおほとこのこもるなりけり女三の宮はさび
しき夜なぐもおはしますらんとせめての事にいひて

衛門督 いかなれば花に木つたふ鶯のさくらをわきてねくら

とはせぬとよみたり あなむつかしの物あつかひやされ
はよと思て

大将 太山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花の色にあ

くへき ゑもんのかみはこと事なくこのおも影のみおも

ふになぐさめがたければもとより御文とりつがする女三

のみやの御めのご」 小侍従の君といふがもとへはいま

もつねにせうそこして心の中にはけんしいつも世をそむか

んとおほしたる御心なれはもしさやうのちがひめあらは女

三の宮をみたてまつらんとおもふねがひふかければ大かた

にてはめてたしと思きこゆ 源氏の御ためなまゆがむ心あ

るべし

一 こしゝうか方へのふみに一日は風まりの事にさそはれてみかきが

原をわけ入て侍りにいとゝいかに見をとし給けん あや

38オ

しうその夕よりみだり心ちかきくらしあやなく今日はなか
めくらし侍ると書て」

衛門首 よそにみておらぬなけきはイはしけくれとしけれともなこり恋しき

花の夕影

一 しうさるへきひまなりければ宮女三にみせたてまつる つ

ねにむつかしき物みするこそとてみたまふ この見もせぬ

といひたるところを女三はかのみすのつまにおほしよせて
御おもてあかみぬ いつよりも御あひしらひなければ御返

事はかく 侍従はみすのつまの事おもひもよらねは見すも

あらぬやいかにあなヒかけしとはしりかきてなに心
もなく御返」

小侍従 いまさらに色にないでそ山桜をよばぬえたに心かけ

きと 中々なる事をとあり

以上廿四首

39オ

38ウ

一 いでやかく事なる事なきあひしらひはかりにてはいかゝ

同若 菜 下

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

21

すぐさんけちかくておもふ事をもまこゆるおりありなんや
といとゝ思まざる ありしねこをたにえてしがなおもふ事

かたらふへきつまにはあらねとせめて心のなくさみにもと

おもひて春宮と女三は御はらかなれば御心春宮のとゝまるやう

に申なしてこのねこを春宮今上へこいよせさせ申てそれ」 よ

り又ゑもんのかみあづかり申て夜るひるなかしづく

いといたふうちなかめてはしちかふよりふしたる所にこの

ねこいとなつかしうむつれてきたるをかきなてゝこれもむ

かしの契にやとかほをまほりての給へはねうゝといとゝ

なつかしうなく

督 恋わふる人のかたみと手ならさはなれよなにとてなく

ねなるらん 春宮よりめすにもまいらせずとりこめてか

たらひ給ふ 山の御門は御おこなひたゆみなくしたまふ

一 けんしの院は行すゑの事をおほすに住吉の神の」 御心40オ

くみおろかならず たいのうむちよきへも女御殿あかしの上あかし

のあま君四尼公ところを引ぐし甲。てすみよしまつであり 神無

月中の十日なれば神のいかきにはふくすも色かはりて 引

歌ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすもみち色か

39ウ

40オ

しにけりと言歌の心也 　もろこしこまとつくしたる楽とも
はりけり

所からなみ風のこゑにあひてめつらしくおもしろし 　けん
しは中比すまあかしにしつみ給し事もめのまへのやうに
おもひてられたまふ 　その夜の事かたるへき人なけれ
は「 ちじのおとゝをぞ恋しく思給 　御車はむらさきの上
と女御殿とひとつにたてまつりたり 　御ふた所のとの御
車十あり 　又あかしのあま君とあかしの上とひとつにたて
まつりてその御どもの車三あり 　以上十三にて松原のふか
みどりにたてつゞけてした風になひきたるしたすくたれも
ゆへありてみゆ 　あかしの御くるまへしのひて御せうそこ
あり

40ウ

あり

源氏 　たれか又心をしりてすみよしの神代をへたる松に事と

ふ 　御返しあかしのあま君申給へり 　あかしの入道の事

もおもひいてゝ かざしの花の色々々
あるは舞人の事也」

尼君 　むかしこそまつわすられね住吉の神のめくみをみるに

つけてもとうちなきけり 　けんしへの御返事に

尼君 　すみのえをいけるかひあるなぎさととはとしふるあまも

けふちしるらん

一 　かぐらおもてとものいたふぬいすぎておもしろき事に心

41オ

はしみてほのくくと明行にはは火もかけしめりたれとも

此時山あいにする竹の色は松のみとりにみえ
まかふとあり 　人くしのしやうそくのつゝめて也 　さかきをとりかへし

つゝなを万ざい／＼といわるきこゆる御代のすゑおもひ
やるぞいとゝしきち」 　わかき殿上人はたかき萩のしろく

かれたるをかさしてみしかき物をほのかに舞てかへりいる

いとおもしろし かくてみやしるに
よとまり給へり 　ほのく／＼とあけゆく空

霜はいとしろふをきたり

祭の上 　すみのえの松に夜ふかくをく霜は神のかけたる夕か

つらかも

しけい舎 　神人の手にとりもたるさかき葉にゆふかけそふる

ふかき夜の霜 　けんしの御思入

中務の君 　はうりこがゆふうちまかひをく霜はけにいちしる げんどう也

き神のちかひか」 　是はのちの住吉まうで神無月也 　みそ

きのきたははしめみをつくしの巻九月の住吉まうてにあり

一 　うちの御門御位につかせ給て十八年にならせたまふを心

やすくおりゐてけんしなどの御かたへもつねに御たいめん

あらまほしくおほしめしたちてにわかか御位ゆつりありけ

り 今上 春宮もおとなしくおほしませは世のまつりことにこ

42オ

なるかはりめなし 春宮には六条の院の御はらの

あかし
女御きり

つは わかみや二さいにてとうくうに居給ぬ さるへきは

おこの

とくひなからさしあたりてはめてたかりけり けんしの

院はおなし 事とおもひなからおりぬたまふれい泉院

42ウ

の御つぎの御子をはしまさぬをくちおしきさうくしくお

こしうと

ほしけり おり居の御門にはたたくしのおとゞの御むすめ

こうきてんの御はらに女一の宮一ところおはしますはかり

にてさしつきおはせぬを心ほそくおはさる 御心をやりて

よろつ御あそひともけんしにもおほすさまにつねに御たい

めんありけり 秋このむ中宮いと御さいわひ也

一 山の御門は今上の位につき給ぬるをも御心にかけすよろ

こひ給ふ事なくてのとやかにおこなひ 給ふ ひめみや

女三

けんしのき給て

をぞ恋しくいかてたいめんあらんと給はするをなに事な

くてはいわたり給はんもすさまじければあけんとし山のみ

かと五十にたり給へきその御賀にわかなくてうじて女三の宮

を御山へまいらせたてまつらんとけんしの院はのたまふ

一 今上 いまの御門の御ためは女三は御いもうとそかし とり

わきたる御心よせのしるしに二品にあげたてまつり給へ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

り みぶそひていつかしき御もてなしとあるいは 御いきを
いまきり

御りやう官人 むらさきのうへはいとくかやうにいつかしくい

もぞふ事也

まのみかどさへ御心よせこと なればやうく我身はさ

女三に

まをもかへてのちの世心やすくと心の中におほせともさか

しけにさのみのたまふへきならねは心やましくおほしけり

一 あさかほの齋院このまきにさまをかへておこなひ給ふ

いとうらやましくむらさきはおほしけり

一 きりつほの御かたはいと御おほえならひなくみやたち

こくらかさなり給へはたちましらひ給へきあらそひもなか

りけり 春宮の御さしつきにむまれたまへるおんなみやを

はむらさきとりわきやしないきこえ給てつれくなる御夜

かれの」 ほとをほこの女一の宮にぞなくさめ給ふ のちに

むむさき

のちに

一品のみやと申せし人也 このみやにほみやなとり御あね也 けんしも

むらさきもかくれ給ひし後は六条の院の春の町に住給し御事也 けんしの夜

かれといふは女三の宮へおはします事也

一 ありし御たいめんのくちは二品の宮と紫はうとからすき

こえかはし給てめやすし けんし御もてなしもむらさきと

ひとしくなり給へり むらさきの御ねがひにさまかへて心

44オ

43ウ

しつかにおこなひをせまほしくたひく申給へともけんしもちる給はずさけんしてそむき給はん世にひとりとまりてなにのさかへかあるへきとともけんし世をすて給へき事」ち44ウかしまち給へとのみさまたげきこえ給をうらめしとおほす

一 ちじのおとゝはかしこきみかとの君たに御位をさり給ふ致仕表この身のかうぶりをかけん事なにのおしげかあらんとてちじのへうかへしたてまつりてこもり給へり

一 世のまつりごと御門の御おぢにてひけくろの左大臣つかふまつり給ふ 玉かつらは御きんたちかすそひていよくめてたし かのひとりのはいかけ給し御はらの君たちもへたてなくもてなし給へは心よくみえ給ふまきはしらはなれかたになり給へり宮の北のかた」

一 ゑもんのかみは中納言になり給へり いまの御代には時の人なり 身のほとまさるに付ても女三の宮あつかり申さぬ事のみうらめしくて女三の御あね女二の宮を山のみかたより北のかたにゆるし給へり 御はゝみやす所そひて一てうの宮といふにおはします ちしおやたちはいとかたしけなき

45オ

事にもてなし給へともゑもんのかみの心には御いもうとの女三をそくちおしくおもふ ほのかにみし御かたちのちはいとゝあちきなくて女二をほうへはかりかざりたる心也

一 二ほんの宮は女三の御事也おさなくよりきんの御琴をす」こ45ウし引給けり けんしは第一の御のうげいきんの御琴なれば二ほんの宮の御きんはさりととも引ならばし給てん このたひ五十の御賀のとき山のみかとへまいり給て引給はんをまいりあひてきかばやといまのうへはおほせらるゝよしけんしつたへきゝ給てこのころそ御心に入てならはしきこえ給ける ひるはまさるゝ事おほくてゆしあんずるもいとまいはよるゝ事の心をもしつかにしめたてまつらんとてこのころはむらさきにも御いとまきこえてよるゝをしへきこえ給ふ むらさきの」うへにもきりつほの女御殿にもきんをはをしへ給はさりければうらめしくなとかわれらにはつたへ給はさりけんとしてわざとうちよりまかて給て夜なゝの御しらへをきゝ給けり 春秋にしたかふてうし夏冬にかはるしらへ又そらのさむさぬるさにしたかふ時ゝのをしへともをよくわきてならはしきこえ給へり としも

46オ

かへりぬ 山のみかとの御賀正月に大やけよりまつ申給へり 六条の院のはきさらきとさためてまいともならはし樂所のとゝのへなんとをは大將の君仕給ふ」

46ウ

一 む月のつこもりわたり大かたの空のけしき花のかほりも物おもしろきに宮の御きんをことのゝ音にあはせてきこしめさんとて女御殿も又たゝならすおはすればこの比はさとにまします その御かたへつどる給ふ 中かの戸あけおはせて二ほんの宮も御一とところにおはすへし 中かのまには源氏のおまじよそひてしやうかし給ふへし 御かたへは木帳はかりをへたてゝおはすへし しやうのふへよこふへをおさなき人へにふかせたまふ

一 御しとねまいり御琴ともまいりわたす」

女三

二ほんの宮

47オ

きん 事くしきをはいかゝとてねの御手ならしをたてまつり給

女御殿 きりつはしやうの琴

紫の上 わごん しようの琴は中かのはそをのたへかたき物なりとてをへはりしつめたまふた

明石の上 琵琶

一 しらへとゝのひてかきあはせ給へり いつれもとりくはすくれたるものゝね也 あかしの上のひはことさらにけ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

たかくかきかへすばちをとすみて上ずめきたり 二ほんの

宮の御きんはをしへきこえ給しにひやうしたがへず心へわ

きまへてひき給ふをけんしいとおもたゝしとおはすと

はめんほく」 女御殿のしやうの御琴はつねにみかとの御まへ

にても物にあはせて引ならし給へれば心もとなからすも

のゝねからのなつかしき物にてたえゝなまめかしうきこ

ゆ むらさきのうへははしめは和琴のちにしやうの琴をひ

き給しがいつれもすくれてめてたければけんしありかたし

とそおもひきこえ給ける これをわかなのおんな樂と也

一 しやうの琴のをはりとゝのへんとてまめ人の大將をみす

のうちへよひたてまつり給へり 御なをしいたふたきしめ

て心ことに引つくりろひ心けしやう」 してまいり給へり

ことのをはりしつめて染ひとつすさましからす引てもやの

みすのうちへさしいれたまふ そのつゐてに大將人へを

のそきて花にたとへ給ふ

一 二品の宮は人よりけにうつくしけにほそくちいさくみえ

て御ぞのみある心ちし給へり さぐらのほそながに御くし

はひたりみぎよりこほれかゝりて柳のいと心ちす にほ

47ウ

48オ

ひやかなるかたはをくれてまめかしうつくしけ也 きさ

らき中かの十日のあをやきのわつかにしだりはしめて鶯
の「羽風にもみたれぬへくたをく」とみえたまふ

48ウ

一 女御殿はおなし御なまめきすかたのいますこしにほひく
はりてよしあり マヤ木たききしより松にかゝれる藤の花の
めつらしくみゆるあさはらけに給へり こうはるの御そ
に御くしのかゝれるほと心くるしくらうたけなり

一 むらさきの上はさかりににほひおほく花やかに物よりす
くれて花といはゞ桜にたとへても物よりことにけたかくみ
え給へり みしほとよりもなを物くしくやうだいあらま
ほしくうつくしけ也

49オ

一 かゝる御中にあかしの上はにほひをさるへきをさはあら
すけたかくあくまでよしあり からのあをちのにしきのし
とねにまほならすひわをきてたをやかにつかひなしたる
はちのもてなしねをきくよりもけたかし かみのさはらか
おちたる事也にへがれたるほとはらうくとうつくしうみゆ さ月まつ花
橋を花もみもとををし折たらんかほりおほえて心にく
けたかきもてなしなり 廿日の月さしいてゝ御あそび過ぬ

これをおんながくといへり 開花たと

一 むらさきのうへそのあかつきよりむねをやみ給て」 きさら

におこたり給はず きさらきとありし御賀ものびぬ 御琴

ともひきこめられてすさまじくなりたり 日をへてよは

り給へはけんしのおもほしなげく事かきりなし 御いのり

をも心やすきむらさきの御わたくし所にてとて二条の院へ

わたり給へり けんしのゐんもかりそめにもたちざりたま

はねは六条の院はたゞひをけちたるやうにおんなとちしめ

やかなり 賀茂のまつりのころにもなりぬ かのゑもん

のかみれいのこしうをむかへとりてまめやかにかたらひ

給 かはかりけんしのうちたへおはし」 まさぬ御ひまに

いかやうにもたはかれりて二ほんの宮の御かたへけちかき

さまにみちひけといみしきちか事をしてあやまちはあらし

とせめたまふ しはしこそあるましき事ともいひしかせめ

られこうしてかものまつりあすとて女房十二人は齋院へた

てまつり給ふそのほかもさとへ出たるひまにこの小侍従は

かり御あたりちかくさふらひける夜ゑもんのかみを道ひき

たり 二ほんの宮はなに心なく御殿こもりいるにちかくお

50オ

とこのけわひのすれはけんしのおはしたるかとおきめたる
心ちに」 おほさるゝにゆかのしもにいたきおろしたてま
つりてきゝもならひ給はぬ事をそきこゆるや あさましく
おそろしくて御あせも水のやうにわなゝき給ふさまいとわ
かふらうたけなり よそのおもひやりはけたかふよりつか
んかたなくおほえしをきはおはしまさすたをくとなまめ
かしき事そ人にゝさせ給はさりける かしこうおもひしつ
めし心もうせていづちもくゝゑてかくしたてまつり我が身

50ウ

も世にあとをとくめすうせはやなんと思みたれたり あもん
のかみ たゝ
いさゝかまところむともなき夢にありし」 ねこをゑてきて
この宮に奉とおもふ なにしにかまいらせけんとおもひて

51オ

うちおとろきぬ 夜はたゝあけに明行はいと心あはたゝし
くてあはれなる夢かたりもきこえさすへきをかくにくませ
給へはこそさりともおほしあはする事もありなんとてたち
いつるあけぐれ秋の空よりも心つくし也

衛門 おきてゆく空もしられぬあけくれにいつくの露のか
かる袖そも 宮はものゝさらにはれ給はねはいみしく
ためらひて出なんとするになくさみて」

51ウ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

二品 あけぐれの空にうき身はきえなゝむ夢なりけりとみ
てもやむへく はかなげにのたまふ御こゑのわかとおか
しきをきゝさすやうにていてぬるたましゐはまことに身を
はなれて御袖のうちにとまりぬる心ちす さてもいみしき
あやまちもしつるかな世にあらん事こそまばゆくなりぬれ
とおもひふしてかものまつり見にいてたゝれす

衛門 くやしくもつみをかしけるあふひ草神のゆるせるか
さしならぬに 二品のあねをゑもんのかみの北のかたに
ておはするかたへもよりつかで」 なかめふしたれば女二
の宮の御かたにはなにとはしらねどすさまじき心ちしてし
やうの琴をかきならしておはするさまけたかし いま一き
はおもふ事かなはぬよと思て

52オ

衛門 もろかづら落葉をなにゝひろひけん名はむつまじきか
さしなれとも (ついで)
いとなんめけなるしりうことなりかしこ
の歌ゆへに女二の宮をおち葉と糸図あり

一 又の日はまつり見にゑもんのかみも出給へり かへきに
みな人くゝいひさはくはむらさきのうへたえいり給ぬとて
そのわたりのおうちまで人たちみちたり」 けんしの院は

52ウ

さらにとまり給ふましくみえ給　せめていま一たひわれに
 めをみあはせ給へかきりあるいのちなりともふどうそのの
真言のひし也
 御もとのちかへありその日かすをたにかけとめ給へとま
 ことにかしらよりくろけふりをたてゝいのり申す　けんし
 もほとけをねんし給ふをものゝけもみしるにや日ころさら
 にあらはれぬものゝけちいさきわらはにうつりてよばいの
 ゝしるほとにすこしいきいて給へり　ものゝけはたゝいに
 しへこらんせしにたがはす六条のみやす所なり　いまはこ
 と物にむまれぬ」　れともいにしへつらしとおもひししゆ
 うのこりたり　けんしのたれともしらぬとのたまふうらめ
 しきとて

物のけ　我が身こそあらぬさまなれそれなからそらおほれす
 る君はきみなりつらしくとなきさけぶ

一　まつりよりもとり給ふ人くみな御とふらひにまいり給
 へはゑもんのかみもまいりたり　かゝるまきれならすはえ
 まいるましくけはひおそろし　なにかうき世にしゆんし
 口すさみたる心は　引歌なこりなくちるそめてたき桜花な
 にかうき世にひさしかるへきと言歌の心也」

53ア

53オ

一　ゑもんのかみはゆめ。やうにて時くはみたてまつりけ
女二まいる事也
 り　かのゆめにみしねこの事御子のいでくへき夢とゑもん
 のかみはおもひたりしをまことにそのころよりやかたてゝ
 ならすなり給てうちたへなやみ給

一　六月になりてそむらさきは御ぐしすましますこしたゝなを
 り給へる　池のはちすのあをやかなるをけんしかれ見給へ
 をのれひとりもすゝしけなる物かなとの給へは

紫　きえとまるほとやはふへき玉さかにはちすの露のかゝ
 るはかりを　けんしはなみたもせきあへすして」

御返　契をかんこの。ならてもはちす葉に玉ある露の心へた
 つな

一　二ほんの宮もなやましくし給へはあまりとちこもり給
 へるも山の御門うちなとにきこしめさん事もかたしけな
 くてけんしはおほしたちて六条の院へおはしたり　二ほん
 の宮はさやかに見あはせてまつり給はぬをさりけな
 くてこのほとのとたえをうらめしくおほすなめりといとお
 しくてむらさきの御なやみのやうもくはしくかたらひきこ
 え給　二三日おはしますいみしくあおみやせてつやく物

54オ

も「まいらぬをらうたしとみたてまつり給ふ 羸もんのか
みはけんしの心のどかにおはしませはかつは心やすくも又
うらやましくも覚ければふみこまかにきこえたり 小侍
もてまいりたるを心ちのくるしきにむつかしとの給へとな
をたゝこのはしかきのあはれに侍るそやと申せはしぶく
にみたまふ所へけんしとよりうちへいり給へはかくすへき
かたなくてしとねのしたにさしはさみ給へり なにかと御
ものかたりし給てすこし御とのこもりたるに日くらゝの花
やかになければけんしむらさきのかたへ」 おはせんと御し
やうそくし給ふ いかゝおほしけん

55才

二品夕露に袖ぬらせとや日くらしのなくをきくくおきて
ゆくらん かたなりなる心にまかせていひいたし給へる
もいとらうたくてあなくるしとてついゐる給ふ

源氏 まつ里もいかゝきくらんかたぐに心まよはず日くら
しのごゑ なさけなからんもいとをしければこよひはこ
れにとまり給てむらさきは日に二たひ三たひぞ御文まい
りける いつ。まにつもる御こと葉ならんとごたちにくみ
きこゆ ままたあきすらみのほとにわたり給はんとしてけんし」

55ウ

よべのかわばりをおとしてこれは風ぬるくこそありけれど
て御あふきををはき給てきのふひるねし給へるおましの
あたりをたちとまりて見たまふにあさみとりなるうすやう
にのふみを見付給へり これそいまほこの付合にしとねのしたのかく
しづみといふ事なりける はつ秋也

一 けんしこのふみをみ給て衛門のかみの事くはしく心へ給
へり さてはたゝならぬ御心ちもかやうのまきれなりけ
り かやうにふみのあらはれたる事をきくに羸もんのかみ
も身もしむる心ちしておそろしくはつかしくけんしの御心
かたしけなく覚けり」

56才

一 源氏もいにしへよりわりなき事のみふるまひ給し御事も
いまぞうき事とおもひしられ給ふ おほろ月よのあまにな
らんとし給をも人しれすさまたげきこえ給しをかゝるしの
ひわざうき物とおほしりたれば心あさくやなりにけん
つるにおほろ月よはあまになり給へり

源氏 あまのよをよそにきかめや須磨の浦にもしほれたれし
もたれならなくに あまの御しやうそくけさなとむらさ
きのうへいそきせさせてたてまつれ給ふ」

56ウ

おほる あま舟にいかゝはおもひをくれけんあかしのうらに

あさりせし君 この御返をしきみのえたに付給へり

一 山の御門へ二ほんの宮まいり給はん事神無月とおほしけるを御はらもたかくなり給ふにそへていたくわつらひて二ほんの宮おとろへ給へは十月ものひぬ ゑもんのかみもやまひつきてきらくしき事もなくなやみくらし給へとも神無月に女二の宮山の御門へ御賀にまいり給ふ そのつゐてにそおもひおこして御山へまいり給へりけるいかめしかりけり

一 御賀の楽ともの心見の日ゑもんのかみをしきりに「けんしよりめしてなつかしくあひしらひ給しかと御心の中にこもりたる事やしるかりけんゑもんのかみにたはふれなからにたくき御こと葉をのたまひ又さけをもたせなからいたくし給しより心ちまどひてそのちはおきあかり給はずなやみ給へはいよゝのひゆきつゝ十二月廿五日にぞまいり給し五十寺に山の御門の御いのりいかめしう又おはします御寺にても摩訶ひるしやなの

以上十八首

「 57ウ

光源氏一部譚第八(外題)

(表紙)

(目次)

廿一 柏 木

廿二 横 笛

并 鈴 虫

廿三 夕 霧

廿四 御 法

廿五 幻

廿七 薰 中将 この巻匂兵部卿の宮ともいふ

并 紅 梅

并 竹 川

「(扉裏)

1ウ

廿一 柏 木

一 衛門のかん君かくのみなやみわたり給ふ事おこたらで日比へてとしもかはりぬ ちゝおとゞ母北のかたのおほしなけく御ありさまをみたてまつり給ふにしめてかけはなれなんいのちのかひなくつみをもかるへき事をおもふ心は心としてあながちにおしみとゞめまほしき身かはいはけなかり

しほとより人にはひときはまさらんとおもひあかりしをそ
あもんのかみ
の心かなひかたかりけりとひとつふたつのふしことに身を
思おとしてしこなたなべての世中」 すましくてのち
2オ
の世のおこなひにふかくしみにしをおやたちの御おもひを
おもひて野にも山にもあくかれんにをまきはたしなるへく
覚しかは一日ふつかとなからへしに又かく世にたちまふべ
くもなき物おもひの身にそひにたるはわれよりはかにたれ
かはつらき これみなしかるへきにこそは ほとけ神をも
かこたなかたなきはたれもちとせの松ならぬ世ほとまる
へきにもあらぬをかくすこし人にもうちしのばるへきほと
にてなくならんはなにかおしからん よろつの事いまはの
きはには」 みなきえぬへきわさなるをとしころまつはし
けんしも
2ウ
ならひ給しあはれもすこし又いできなんなとつれくとお
もひつゝくるにいとあちきなし などかうほどもなくしな
しつる身ならんとまくらもつきぬはかり人やりならずなが
しそへてふし給へり すこしひまありとて人々たちさり
心ちよき事なり
給ぬほとにかしこへ御文たてまつり給ふ いまはかきりに
二ほんのみやの御かたへ也 ふみのことは也
なりにて侍るありさまはをのつからきこしめすやうも侍ら

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

んをいかゝなりぬるとだに御みゝとゞめさせ給はぬはこと
はりなからいとうくも侍るかなときこゆるに」 いたくわ
なゝかるれはおもふこともかきさして
二ほんの宮 御返し たちそひてきえやしなましうき事をおもひみた
り 小侍従にもこりずまにあはれなる事いひをこせ給ふ
のへて也
二ほんの宮 御返し たちそひてきえやしなましうき事をおもひみた
るゝけふりくらべに をくるべうやはとあるをもちて
こしゝうまつでたり ちもんのかみぬざりいでゝこの人
ものかたりして也
にかたらひてしそくめして」御返し見給 あもん いでや我が世の
おもひいでにはこのけふりくらべはかりこそはあはれには
かなかりけるちきりかなとなきいりていとゝ心ちもかきみ
たるゝやうになれど又御返りきこえ給ふ
あもんのかみ 行急なき空のけふりとなりぬともおもふあたり
をたちははなれじ ゆふへはわきてなかめさせ給へとが
め給はん人めいまは心やすくおほしなりてかひなき御な
さけをだにかけさせ給へなときこえ給

一 おとゝはかつらき山よりたうとき山ぶししやうじおろし

てゑもんのかみのなやみ給さまをかたりてむかひる給 4オ

へり かやうの人もおほくはおんなの御りやうとのみうら

なひたり あもんのかみ くれきゝ給へなにつみとも思給ふまじきにう

らなひよりけん女の御りやうよまことにさる御しうしんの

とまるならはいとほしき身も引かへやんことなくこそなり

ぬへけれと小侍従にの給ふ

心は二品の宮この事をのみかなしく空おそろしくおもひ給ふほどに恋しゆか
しとおほきねどうちまきにといふ物にて給たる事也

一 この山ぶしもまぶしもつゑだましくてだらによむとあり

人うちまなこなる事也

一 女三のみやかほる大将をうみ給ふ事也 二品の宮この夕くれより御さんけありて又の日わか 4ウ

君をたいらかにうみ給へり けんしあな心うや思まする

事なくてむまれ給はゝいかにうれしくおもふさまならん

と思たまへとも人めにあらはさじとて事くしくもてなし

きこえ給ふ かなたこなたの御うぶやしなはいいかめしうな

ん 宮はいとゝきえいるやうにし給てもたのもしくもなき

御ありさま也

松平文庫本『光源氏一部歌』翻刻(下)(今井)

一 山の御門はかゝる事たいらかにときこしめしてあはれに

うれしくおほさるゝに御心ちよはくしくていま一たび院

のうへをみたてまつらまほしきと二品の宮なき給ふ け

んし入してこのよし山の御かたとへ」申給へり 院はい

とゝ心もとなくたえがたくおほしめして世にかくれてい

させ給へり かさねて御せうそもなくてにはかにわたり

おはしましたれはけんしのゐんもいみしくさはきおほしめ

す 二品の宮をゆかのしもにとかくしておろしきこえてや

かて御帳のまへに院の御しとねまいらせたり うるはしき

御ほうぶくならずつねの御すみそめて御めをしのごひつ

ゝおほつかなくおもひ給はん心をさながら見給へきなめり

とて御木帳をしやり給へり 二品のみやいみしくなき給て

われいくべうも侍らねはかくおはし」 ましたるつゐでに

あまになさせ給てよとてなきたまふ このよし源氏に申給

へはたびくかやうにのたまへともきゝいれ侍らねと申給

ふ 御心ちのうちはけにさやうになしてみたまつらん

はあはれなるへしかつみつゝも心をかれ給もくるしきにと

おほす 夜のあけぬさきにみてらへ帰りおはしまさんため

心あはたしくいそがせ給てさらはかくものしたるつゝめで
五戒の事也

にいむことうけさせんをだにけちゑんにせんかしとて御か

の僧の中にさるべきをめて御二ほんのみやぐしおろし給ふ 二品廿二

三の御はとなれといとわかかく」 おさなきやうにみえた 6オ

まふ さかりにきよなる御ぐしをそぐほといとかなしう

てけんしもゑしのひあへたまはざりけり かくてもたいら

かにておこなひをつとめ給へとてかへらせ給ぬ けんし御

くしおろしをとゝめ給をも二品の宮はかしらふりてうらめ

しくおほしたりしかはこのつゝめてにほいかなひてすしく

ぞおほしめしける

一 ゑもんのかみはかゝる事をきくにいとゝきえいる心ちし

てむげにたのみなくみえ給ふ 今上 御門よりもおもひおこして

よろこひにいま一たひうちへまいるやうもやと」 おほせ 大内也 6ウ

られてにはかに権大納言になさせ給けり ちゝ大臣はよせ

おもきを見給にもいとゝおしくかなしくなん つゝにおき

もあがり給はず まめ人の大将は御いとこと申ながら又は

かしわきのためは御いもうとむこなれはいつかたにもつけ

てもなけき給てかきりの時しもおほしたり 一条のおち葉

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

の宮の御事かならずかずまへなきけをかけ給へかくちきり

をかけ申てもみすてたてまつればかたじけなしとゆいごん

しをきてたゝあはのきえゆくやうにてはかなくなり給ぬ

大将いとあへなくかなしきとぢめを」 みつる事と御はら 7オ

からにこえてなけき給

一 ちゝおとゝ母北のかた落葉の宮などの御なけきかきりな

し 世の中おしみ申けり 大やけもおしみなけきおほしめ

す

一 このむまれたまへるわか君いとうつくしくよのつねの人

ならすまなこゝるのどやかにまじりのとぢめかほりてあやし

きまでみゆ けんしの御かゝみの影にもにたりとおほす かほる

いかになりてもちるをほけんしの御ひぎにてまいらせ給て 五十日

いとめてたし 御めのと共花やかにしやうぞきたりあまみ 二ほん

やもこのころは」 やうくさはやかになり給へり わか 7ウ

君のたからかにものかたりするをけんしいとうつくしとお

ほして宮のおもとへさしよせて 入道

源氏 たが世にかたねをばまきしと人とはゝいかゝ岩ねの松

はこたへんとの給へは入道の宮御かほうちあかめてひ れ

ふし給へればことはりとおほしてしるてもなたまはざりけり

一 ゑもんのかみの御いみすぎがてに一条の落葉宮の御かた

へまめ人の大将後に夕きり おはしたり おち葉の御はくかうる

一条のみやす所いてあひ給てよろつかなしき世の」 御も 8オ

のかたりきこえたまふ 大将たちさまに御まへのさくらを

見給てみやす所へ申給

大将時しあれはかはらぬ色にほひけりかたへかれにし宿

のさくらも 御返一条の御息所

御息所 この春は柳のめにぞ玉はぬくさきちる花の行ゑしら

ねは ゑもんのかみのこのみ給し鷹むまなともこの一条

にいまたありてつくかたなげにいてるを見給にもつきせ

すおほしこかるへし 大将はすくにちじの大殿へまいり給

へれはおとくはいてくたいめんし給へり れいは「いと花 8ウ

やかなるおとくのいたふおとろへてひげもしけりつくおや

のけうよりもやつれ給へり みるにまつかきくらしかなし

きにおとくも大将を見給にすくれて御中よかりしとおほす

にも春雨よりげにふり落てとくめかねたまふ 大将はあり

しやなきのめにぞとありしみやす所の御歌をたうかみに書てもたまへるをみせたまつり給へはめををしほりて

ちし大臣 このしたのしづくにぬれてさかさまにかすみの衣

きたる春かな」

大将 なき人もおもはざりけんうちすてくふへのかすみ君

きたれとは ゑもんの御おとくと

弁の君 うらめしやかすみの衣たれきよと春よりさきに花の

ちりけん 御はての事さかさま事にいそかせ給ふ その

ときけんしこのわか君のためと心さしてこかね百貫御ちく

おとくのかたへつかはし給けり

一 この巻かしわ木と名付る事一条の宮へ大将春のすゑにお

はしたれば所くのすなごによもきおいてさひしけなるに

若かやでかしわ木のすゑあひたるをたのもしき事かなと心 鶏冠木

あるさまに「いひなして

大将 ことならはならしのえたにならさなん葉もりの神のゆ

るしありきと 御返女はう

少将の君 かしわ木に葉もりのかみはまさずとも人ならずへ

きやとのしづえか この歌ゆへ巻を名付 この巻にかく

れ給へはかしわ木の衛門の督といへり
以上十一首

廿一横 笛

一 故権大納言のはかしわきの事かなくかくれにし事を月日のかさなるま

ゝに大やけにもわたくしにもおほしいてゝしのびたまふ

あはれこゑもんのかみのと」 いふ事はぬ人なし まし

て六条の院には御あそびのおり〜にはものゝひかりうせ

ぬる心ちし給けり このわか君をけんしの御心ひとつには

かたみぞかしとおほざる 春になればこの君はいぬざりな

とし給ふもうつくしければおやたちのあもんのかみのちよちしのおとゝの事也 子

となのりいつる人たにあれかしとこひなき給ふにもみせず

はかなきかたみはかりをとゝめてさはかり思ひあがりおよかしわ木

すけたりし身を心もてうしなひつるよとおほすもおしけれ

はつねにうちなき給ふ」

一 山のみかとよりは二ほんの宮御くしおろし給て後ははか

なき事につけてもつねにきこえかはし給けり 御寺のかた

はらのはやしにぬきいでたるたかうなそのわたりの山には

10ウ

10オ

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下) (今井)

れたるところなど所につけてはおかしと入道の宮の御
ヒ山のみかとより
かたへ御文こまやかにて春の山はかすみにたど〜しけれ
ど心さしふかうほり出させて侍るしはかりにとて

朱雀院 世をのかれいりにし道にをくるともおなしところを

君もたつねよ 御返し

入道の宮 うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく」 山路

におもひこそいれ わか君はねたまひしがめのとのもと

よりはいい出てけんしの御袖をひきまさぐり給ふ かのたか

うなのらいしになにともしらすたちよりてとりちらし御は

のおい出るにくいあてんとヒくいかなぐりてしづくもよ〜と

くいぬらし給へはねちけたるいろこのみとて

源氏 うきふしもわよれずなからくれ竹の子はすてがたきも

のにぞありけるといマヤてはなちいひかけ給へはわか君うち

わらひてはいおりさはき給ふ こうはいのかめのこのの御

ぞうしろのかぎりにき」 なしたまへるれいのおさなき人

のありさまなれどしらくそびやかに柳をけつりてつくりた

らん人のやう也 かしらは露くさしてことさらに色どりた

らんやうにくちつき花やかににはひたり 日にそへてこの

11ウ

11オ

君のおやすけゆくまことにゑもんのかみのうきふしみな
わすれぬへし

一 秋のゆふへはいとゝ心すごきに一条の宮へまめ人の大将

おはしたり 和琴 わごんしやうの琴なととりちうしてあそひ給

へりけるとみえてはしなる人のおくのかたへるざりいるほ

とうちそよめきて心にくゝきこゆ」 大将はすのこにめ給

てわごんのちかくあるを引よせてかきならし給へはりつに

よくしらべられたり 大将ひはにてさうふれんをひき給て

おち葉の宮へ みすのうちへこれは事とはせ給ふべくやとせちにそゝのか

めたり しきさつてはしがけんのたつと言心也 し申給へともみやす所の御こと葉に琴のをたえにし

ころのわらはあそひたにわすれ給へりとあるは引歌おもふ

にとはすみしらせてきみゝな草わらはあそひの手たはふれ

よりと云歌の心也 琴のをたえにしとはしきまつてのちは

くがけんをたつと云詩の心也 さうふれんをすゝめかね

て」 大将 ことにいでゝいはぬもいふにまますとは人にはぢた

るけしきぞぞみる

落葉の宮 ぶかき夜のあはればかりはきゝわけとことよりは

12ウ

かにえやはいひける ほのかに心くるしけにいらいらへ給へ
り 大将は心とまりはてゝいかさまにさるへからんおりに
ちかつきたてまつりて おち葉に 心ざしのほといひしらせんとおもひ
たち給へり

一 ゑもんのかみひさうせられしよこぶへをこゝにのこしを

きてかくれ給へり かゝるよもきのもとにくちん事のくち

おしきに大将のおりゝおもひを」 なくさめ給ふ御心ざ

しもかたしけなければこのふへを大将にたてまつり給へ

り ゑもんのかみの此ふへをおりゝもてあそびてつたふ

へきかたへゆづらばやといひし事も思出ですこしふきなら

し給へれば

御恩所 露ふかきむくらのやとにいにしへの秋にかはらぬむ

しこのゑかなときこえいたし給へれば

大将 よこぶへのしらへはことにかはらねとむなしくなりし

ねこそつきせね

一 この笛を大将とりて我か殿に帰給へり」 北のかた

三条のうへ 雲井のかり也 この落葉の宮へ大将ちかつき給ふ事をうたがは

しくおほしたり 大将いもとわれといるさの山のとこゑは

13ウ

いとおかしくてうたひていり給へり あなむもれやなとこのかうしはおろされたる こよひの月に心やすく夢みる人もありけりとのたまへときゝつゝふしたまへり

一 月をみつゝはしつかたにすこしまどろみ給へるに夢もなくゑもんのかみつねのうちぎすかたにてまくらもとにてこのふへをとりてみる なき人のわづらはしく笛の音をたつねて来たりとおもふに」 ゑもんのかみこのふへつたふへきかたことに侍るものをといひて

ゑもん 夢 笛竹の吹よるに吹よる風のごとならはずゑのせ

ながきねにつたへなん ヒヒヒヒ といふとみておとろきぬ おさ

なきわか君物におそはれてなき給へは北のかたおきいで、かみをみゝにはさむ事也 ねき事也 みゝばさみしてうちまきしちらしなどしていたきてる給へり 物さはかしくて夢のおはれもさめぬるにこの君いた

くなきてつたみなんとし給へは北のかたはらだちて大将の夜ふかき御月めでにかうしあげられ」 たれはものけい

りくるなめりとのおたまふ 大将うちわらひてまろかうしあ

げずは道なくてげにいつくよりかいりこん 人のおやになり給ふまゝに物をこそ心えてのおたまへとはづかしけにの給

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻（下）（今井）

へはいてたまひねむつかしとてさやかなるほかけをはつかしとおほしたり 明ぬれはをたきに誦経せさせ給ふ 又ゑもんのかみの心ざしのでらにもとふらひ給へり

一 大将は夢のよしをけんしの院にかたり申給へはそのふへはみるへきようありとてこひて取」 給て御心のうちにはつたふへきかたとはいつかたにかは たゝかのわか君の事にてこそはとおもひより給ふ すゑの世にかほる大将ときこえしときゆめにつたへしふへとてやりきの巻の藤のえんにかぎりなきねをかほるふき給ふ

一 このふへはやうせい陽成るんの御笛也 しきふ卿の宮とはやうせいの御子にや そのみやの萩のえんし給し日ゑもんかみわらはにてかきりなき上すなりしにめでゝをくり物にし給へりとてそ

以上八首

廿二の 并 鈴 虫

一 夏比はちすの花のさかりに入道のひめ宮の御ちぶつとも

「 15ウ

あらはし給しをくやうせさせ給ふ 夜のみぢやつ御張のかたらひ

を四おもてなからほとけの御ちやうだいにかざられたり

本ぞんは阿弥陀ほとけおなしくけうじ勝士のほさつみなひやく

たんにてこまやかにつくられたり うしろにはつけのまん

だらかけ給へり あかのぐはれいのちいさくきばやかにて

花かめにいろく白壇なるはちすの色をとのへてたてさせ給

ふ 名みやうかうは百ぶ香 の色香をみつ蜜をほうろげてたき

にははし給へり ちやうもん導師の女房の中にそらたき物けぶ

たきまであふきちらせはけんしきしより給て空にたくはい

つくのけふりぞとみわかぬこそよけれ ふじのねよりけに

くゆりいでたるはほいなき事とをしへ給ふ 導師だうしまいり

みこたちかんだちめなとまいりつどぬ給へはけんしもそな

たへいで給ふとてかうせつのおはりはなりをしつめて心し

つかにちやうもんあるへき事也 わか君いだきかくせな

と人くしづめ」 給て入道の宮にもちやうもんし給へき

ものゝしたかたをしへきこえ給ふあはれにきこゆ かうぞ

め御の。あふきに書て

源氏 はちす葉をおなしつてなと契をきて露のわかるゝ今

日ぞかなしき とて宮にみせてまつり給ふ 御返

入道音 へたてなくはちすのやとをちきりても君か心やすま

じとすらん ほとけの御かざりをみやり給てけんしかゝ

るかたのいとなみをもろ友にいそがん物とやはおもひしと

てまことにあはれとおほしたり 源氏入道の宮の御ち経を

は御手づからかゝせ給へり」 からのかみはもろくてつね

の御手ならしにわろければわざとかん紙やの人をめしてすか

せて書給へり けかけたるすぢよりもうへにかゝやくすみ

づきのさまめもあやにめてたし けふのは六道しゆじやうとよむへのすぢうの

ため六ぶかゝれたり 山の御門又いまのうちよりいかめ

しき御とふらひともありければそうともいはきおひてゆふ

べの寺にをき所なきまでのいきおひにてぞ帰ける

一 秋になりて中のへいのきはををしとして野につくらせ

給てむしともはなち給へはなきみた」 れたる夕暮おもし

ろきを源氏やゝもすれはおはしましてきゝ給ふ 松むしは

へたて心あるむしにて人きかぬ野の松原はるけき山のおく

などにてはこゑおしまぬ物也 名にはたがひていのちのほ

とはかなきをすゝむしはなに心なくいまめいたるいとおしげ也こそらう

たげれとむしのねきためをし給ふ

入道の言 大かたの秋をほうしとしりにしをふりすてかたき

すゝむしの声

源氏 心もて草のいほりをいとへともなをすゝむしのこゑ

ぞふりせぬ この歌ともゆへにすゝむしと名付たり

18オ

一 こよひは十五夜なりけるをすゝむしのゑんにてあかして
んとてきんの琴めしてかきならし給へは宮も御じゆず引お
こたりてなを御琴に心いれ給へり

一 冷泉院はおりくりにけんしに心やすく御たいめんあらん

とており居給し御事なれはこよひも六条の院へ御使あり

院 雲の上をかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の

夜の月 おなしくはとあり いとかたしけなしとてには

かなれともまいりたまはんとす 御返

源氏 月影はおなし雲井にみえなから我やと からの時

18ウ

そかはれる こゝにおはします人くほたるの宮これ

かれ御車しだひのまゝ引なをし事々しからぬてまいり給

ふ 院には待よろこひ給て御あそひあり

一 けさは御帰りに秋このむ中宮の御かたへけんしはまいり

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

給へれば御ものかたりし給て世の中なべていとほしければ

さまをかへん事をねかひ給ふ けんし人まねのやうにさせ

る事なきに御ぐしをやつし御かさりをおとさせ給はん事

中く心あさき御事と申給ふ 故六条のみやす所のむらさ

きの上二ほんのみやなどのものけに出させ給て

あらぬすかたの物になりてくるしみあるよし中宮の御かたへ御

ことつけありしをいかにしてかもりけん中宮はきこしめし

てかくはのたまふなりけりとはりにおもひ給 そのほ

のをなんたれものかれぬ事なれともあしたの露のかゝれる

ほとほと申給ふ

以上六首

廿三 夕 霧

一 まめ人の名をとりてさまよかり給ふ大将なをか的一条の

宮おち葉に心をかきこえ給へり 秋の比一条のみやす所おち葉

ものけにわつらひ給てとしころものけなんとはらひす

つるりんしのひゑえヒの山にこもりたればふもとちかく

てしやうじおろさんために小野といふ所に山さともたまへ

19ウ

るにいのりのためわたり給へり 落葉の宮も引くしきこえ
給へり 御くるまよりはしめてしゆほうなとおこなひ給
べきそうのふせまで大將殿よりたてまつれ給 みやす所
の御心にあはれにかたしけなき御心かなるゑんのかみの
御おとうとたちの御中にだにおほしとふらふもまれなるに
たえずとふらひをとつれ給につれ／＼なくさむ事しげくて
なとよろこひきこえ給ふ くもぬのかり きたのかたうたかひ」 給ふも
わつらはしけれともをのゝけしきゆかしくて八月十日ころ
に大將小野へまうて給へり 松がさきのを山のけしきなと
さる岩いははかべなれと秋のけしきつきてみやこにかぎりなくと
かしづく家ぬにはおほくまさりたり をのにはかりそめな
れとゆへある小柴がきしわたしよしありてすみなし給へ
り 中のまにはしゆほうごま世のだんぬりてにしのまにみやす
所はおはしませはひんかしのたいにおち葉をすゑ申給へ
り まらうとのおはすへきかたもことになければ大將殿を
宮の「おはしますたいのみすのまへにいられたてまつりて人
してみやす所よりきこえ給ふ やう／＼くれゆけは大將は
こよひとまりていかにしても落葉の宮の御あたりちかくて

20ウ

20オ

とし月の心のほとをもきこえしらせつゝゐにはむかへとり
申さんと心の中にかまへ給へり 霧のこゝもとまでたちみ
ちたればまかてん空もなしとかこちて落葉の御かたへ
大將 山さとのあはれをそふる夕霧にたちいてん空もなき
心ちして と申給へは
落葉 山かつのまかきをこめてたつ霧も心そらなる人は
とゝめず ひきいりなからほのかにのたまふ」 うちみ
しろき給ふほといとやはらかにしめやかにきこゆ
一 くるすの小野といふ事ことなるをのにてなし こよひ大
將御ともの人をめしてこよひこのわたりにとまらん人／＼
こゑあまたせずしてらうのかたにさふらへ又馬ともをはく
るすのみしやうちかく人つかはしてすいじんのをのことも
やりてみまくさとりかはせよとのたまひし也 御とも
人／＼あるやうあるへしと心えて馬ともをはくるすのしや
うはこの大將のしり給ふ御りやうなれば隨身そへてつかは
してあかつきに又をのへこえて御かへりの」 みやこの御
とも申き 是ゆへにくるすの小野といへり 同里也 いせんの
山里のあはれをそふる夕霧にたちいてん空もとよみ給しによりて夕霧の小

21ウ

21オ

野とも名付たり くるすのをおなしと也 又この歌ゆへ巻を夕きりと名付 又まめ人の大将をも夕霧と也

一 落葉の小野と云も同小野也 一条の女二の宮をかしわ木のしりうごに落葉をなにくひるるけん^ひとよみたりしゆへおち葉のみやと系図あり しは^しすみ^みゆへ^ゆおち葉 この落葉の小野と付合あり たゝ物によりてもちゆへし

一 てならひの小野といふは宇治の九手習のまきにみえたり 夕きりのをのよりもなをひゑえのかたへ^ヒ よりて横川の山にかたかけたり 里はおなし所也 付合心えへし 22オ

此てならひの事このまきの事にはあらず

一 かけろふの小野といふ事源氏にさたなし けんしの外をはしらすとあり 私言これは寛見歌 万葉に其例候歌 小野にをとなしの滝はありとみえたり 本歌 いかにかにしていかによからんをの山のうへより落るをとなしのたきと云歌あり けんしの歌にもをのゝをとなしの滝とあり

その夜はをのにとまり給て夕くれのきりのまよひにたどり入てすべりかくれ給を引とゝめきこえてとし比の心さしたゝむかしをわすれぬとみせたるもこのゆへなりと申きか

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

せたてまつりて 人の御ありさまを見給ふにあてにけた 22ウ

かくさはいへともよのつねの人にはことにおはしけりと心まさりし給ふ 宮は夜もすから風のをとまたきのよども木の葉のをとなひもひとつにみたれて夢にもよろつみゆへきひまなし 宮もいと心うくかしわ木のおろそかなりし心さしだにうかりしに又人にみえぬる事とおほすにたげき事とてはねのみなき給ふよりほかの事なし

宮 われのみやうき世をしれるためしにてぬれそふ袖のなをくたすへき

大将 大かたはわれぬれきぬをきせずともくちにし袖の名やはかくるゝ あかだたに出給へとやらひ給ふに大将はあさましや事ありかほにわけ侍らむあさ露のおもひ侍らん事よとて

大将 荻原や軒端の露にそほちつゝやへたつきりをわけぞゆくへき 御返

宮 分ゆかん草葉の露をかことにてなをぬれきぬをかけんとやおもふ 大将はみやこに帰てその暮に御文あり 大将 たましむをつれなき袖にとゝめをきて我か心からま

23オ

とはるゝかな」

一 律師は日中の御かちにまうのほりてみやす所のすこし御

心ちよきをよろこひて大日如来そら事し給はずはかはかり
ながしが心をいたす御かちにしろしなきやうは侍りなん
やあくりやうはしうねき物なれはどごつしやうにまとはれ
たるはかなき物なりとこゑはかれていかりたまふ ゆくり
もなきひじり心とはしあんなきをゆくりなきと云也

りつし大将はいつよりこゝにはかよひ給ふぞといふ みや
す所さる事侍らすこゑもんのかみの申をかれしなきけにて
きのふもわざととふらひものし給しとかたり給へは律しな
にかしにかくさるへき事にも」侍らすけき後夜の御かち

24オ

にのほりしときにしつたまよりうるはしきおとこのいで給
しをなにかしはみしらずこほうしばらの申せしは大将と
の御ともの人をよべかへしてとまり給へりと申するにあ
はせてかしらいたきまでかうばしかりつるつねにかうはし
くおはします殿なりこの宮へかよひ給事いとしもなき事
也 本妻 孫類 ほんさいのそんるいつよくて子とも七八人になり給を
こゝのみこの君えをし給はし この心は三てうのうへはほんさい

23ウ

也 そんるいつよきとはちじの大政大臣のむすめなる事也 大将の御子をう

みたまふ(旁記「三条のうへに事七八人ありし也」) なをもりつし申

24ウ

やう女のあしき身をうけてくるしき道におもむくはたゝか
やうの事によりて也もつはらうけびかずゝとかしらをふ
りてたゞいひにいへはみやす所御心中にさもやありけんた
ゝならぬけしきはおりゝみえ給へは入すくなゝるおりを
みてはい入もやし給けんとおほして少将の君とて上らう女
房あるをめしよせとひ給ふにあとかなき事ならねはあ
りのまゝに申てたゝ大かたの御中と申わけたれどみやす所
はともあれかくもあれかろゝしくほうしはらなとにいひ
ちらしてん事とてよはき御心に」 おとろきなき給ふ さ
らは又こよひもおはしたらはよその名はとてまかくても御
心ざしあらはゆるしてんと心まち申給ふにそのくれもたゝ
御文はかりありみやす所めしよせてみたまへはこまやかに
大将 せくからにあささそみえん山川のなかれての名を
つゝみはてずはとあり この御返しはきこえんとの給て
わなゝゝゝ

25オ

みやす所 をみなへししほるゝ野へをいつことてひと夜はか

りのちとをかりけん 鳥のあとのやうにてみえわかねは
おほとなあふらちかくてみ給に三条の「上うしろよりは
いよりのこの文をとり給つ 大将いとあさましとおほせど
おこつりてとらんとおもひ給へはさのみもさはかずみ給へ
けしきあるふみかとしにそへてあなつり給ふこそうれたけ
れいかに女房たちもおかしくみ給らん鳥のせうやうのもの
ゝやうにとあるは 鷹のせうはたかにおづる物也 北のかたに大将お
ち給よしをたとへ給へり

25才

一 大将の心の中にさてもいかなる事かありつらん返事をも
きこえずしておろかにおもひ給はん事よと心にかけてこゝ
かしこをみ給へともみえず 北のかたはおさなき人ゝに
たはふれてあそひあひてひいな あそひの子もありてな
らひし給も又ふみよむもあり おさなきはひぎにはひかゝ
りすたきあはて給へはこれにとりあひてとりしふみの事も
おもひいて給はず おとこ君はこと事なくたつねたまへと
なし 御殿ごもりてもむねさはぎておほへたまふ あけぬ
れは北のかたはきんたちひかされてとくぬざりいて給へ
り 大将はねたるやうにてこゝかしこさかし給へとみえ

26才

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

ず 心やましくて御だいなんとすぎてひるつかたをしあて
に御ふみたてまつらんとてすみをしりてうそぶき給ふ
におましのはしすこし」あかりたるを心みに引あげてみ
給へこゝにさしはさみ給にけり うれしきものゝおこかま
しくてみ給へはみやす所のかなしけなる御文なり よへた
にいたつらにすきにけるいとをしきにこよひもくれにけれ
はいかになさけなく思給はんとなきぬはかりおほさる い
でや我ならはしそやとつらくていそぎ御返

26才

大将 秋の野の草のしけみはわけしかどかりねのまくらむ
すひやはせし たゝくれに暮行はこの御文を馬のせうを
めしてたまひてみまやにあしときむまにうつしをきてのせ
てやり」たまふ うつしといふはくらなりひすへし
くらふなるほとにをのへまいりつきたり みやす所心ちか
きくらしたるおりしも大将殿より御文といふをきゝ給てや
かてたえいり給ぬ 人ゝ心をまとはし宮もそひふしてを
くれじとなげき給もことほりなり 大将はきゝ給もあへな
くさためなきほともおほししられてなき給 やかてをのへ
おはしまして御あとの事さためおこなひたまふ 宮も御せ

27才

うそこあれともさらばにうこき給はずすくみたるやうにてき

るへき事とはいひなから大将の事をき」 給て御心まと 27ウ

ひしてかやうにかくれ給ふとおほせはうきゆかりとおほし

しみてそなたの名をもきかじとそおち葉はうらみ給

一 大将いといたくなかめてはしちかふよりふしたまへる所

へ三条の北のかたわかきみして

北のかた あはれともいかにしりてかななくさめんあるや恋し

きなきやかなしき 一条の宮へ心さつくし給はみやす所

に御心さしか又むすめの落葉の事か^返ととひ給ふ也

大将 いつれとかわきてなかめんきえかへる露も草葉のう

へとみぬ世を をのへは御文のかすはつもれ」 ともさ

らに御返事なし あまりなさをくれたる事かなとつらみ

給事かすゝにて

大将 とにかくに人めつゝみをせきかねてしたにながるゝ

をとなしのたき をとなしの瀧の小野にあるせう歌也

この御文におち葉のみやてならひをしたまへるを少将の君

ぬすみて侍るとて引やりて大将のかたへ奉たり 見はみ給

にけりとおほすはかりの心やりのうれしさそ人わろかりけ

る 手ならひに

落葉の宮 あさゆふになくねをたつるをの山はたえぬなみた

やをとなしのたき」

一 かやうにつれなければおほしわびてなが月十日はかりに

又小野へおはしたり 秋はつる野辺のけしきあはれもすく

なからすしかのなく音もたきのをとも松の風もひとつにあ

ひていと物かなし みねのくす葉も心あはたしく吹ちら

したり 鹿は山田のひたにもおとろかすいるこきいねにま

じりてうちなくもうれへかほ也 夕日の花やかにさきた

るを大将はまばゆげにあふきをさしかへし給へる御手つき

をんなこそかやうにはあらまほしけれとこのほとなけき

しづみたる女房共はるゝ心ちしけり」 少将の君をめしい

でたればにひ色の木帳をみすより外へすこしをしいたして

うすゝみににびたり あをにひたり

も引かけてよしあるさまに袖くちはかりほのみえたり

つるばみはうすあをくかさねたり

おち葉の心つよくおはします事をうらみて

大将 里とをみ小野のしの原わけてきくわれもしかこそこ

28オ

29オ

28ウ

ゑもおしまね 御返

少将の君 藤衣露けき秋の山人はしかのなくねにねをそへ

たるといふさまのなれたるにぞすこしなくさみ給ふ」

29ウ

一 大将は小野より帰りに道なりければ一条のみやをついぢのくつれよりみいれ給 みな小野におはすればはるくとおろしこめて人影もなし やり水に月すみたり

大将 みし人の影すみはてぬいけ水にひとりやともる秋の夜

の月 こよひは十三夜也 故ゑもんのかみのこゝにてあそひなんとせし事を思てひとりこちたまふ

一 この事かやうにうかれたち給へればとても人もきくふれたるにいつまでつゝむへきとひたおもむきにおもひたち給て一条のみやをみかきしつらひて」 落葉のみやを小野よりむかへとらんとし給ふ 落葉は御さまかへて小野にすみはてんとし給へど山の御かとよりもせいしきこえ給ふ人くもまはりたてまつればちからおよはすすてに御車ま

30オ

いりたれば

宮 のほりにしみねのけふりにたちまじりおもはぬかたになひかすもかな さふらふ人くもこはこふくろなんと

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

もさきたてはこひたれば御心ひとつたけからぬ事にて御

車にのり給ふに故みやす所の御経はこをかたはらにのす

宮 なき人のおも影はかり身にそへて涙にくもる」 玉の

30ウ

はこかな 大将は一条のみやにありつきかほにおはしましてむかへととり給へは人のおもふらん事もあさましくてその夜はぬりこめにおまし武(式)か(け)にちやうたいふ所也としきしかせてうちよりさしかためて宮はおはしけり 夜あけてぬりこめへ

大将 うらみわひむねあきかたき冬の夜に又さしまさる関

の岩戸よ すぐに殿へおはせん事は北のかたのわつらはしければ六条の院のひんかし夏のまぢ御やしないはゝの花ちるさとの御かたへまうて給へり れいのなつかしう物かたりし」 給て一てうの宮をむかへとりたまへるよしちじ

31オ

の大殿わたりかしわきのちよの事に人く申なるはまことにやととひ申給ふ

一 大将さそ申侍らん故一条のみやす所申をかるゝ事侍りしほとに又は年ころおもひし事にてかやうにはからひ侍るけんしの院のおはしましたらん時事のよしきこへ給へと申給ふ 花ちるさと人のそら事にやとおもひしをさる事侍りけ

りくるしからぬ事なれとも三条のひめ君のならひたまはぬ
事にていかにおもひ給はんと大将の給へはうつくしけにものた

まひなすひめ君かないとゝおにしく侍るさかな」物をと

きこえ給ふ それをもなとかおろかに思侍らんまつみなみ紫

の上又こなたなんとの御身もちにてもおほしめししらせ給

へき事也と申給へは花ちるさとわらひ給てものゝためしに

引いてらるゝほとに人わろき身のほとこそあらはれぬへけ

れとのたまふ さておかしき事は六条の院の御身のくせを

は人のしらぬ事のやうにすこしもすきくしき事も人の身

にあれば大事とおほしていさめ給こそさかしらだつ人の身そのか

のうへしらぬやうにおほえ侍れとて花ちるさとゝ大将とし

てけんしを」そしりわらひきこえ給へり

さかしだつ人とは物しりたる人をいふ也 身のうへはおんみやうし身のう

へしらすといふ引事

一 三条殿へおはしたれば北のかたはね給ておきもあかり給

はず うらめしきにこそはと見給へともはゝかりたるけし

きなく大将うへのきぬをひきやり給へれば北のかたこれは

いつくとおはしましたるぞまろははやうしにゝきつねは

31ウ

32オ

おにとの給へはおなしくはなりはてんとおもう也かくたに

なおほしいてそとておきあかりたへるかほのあかみたるも

あいぎやうづきおかしき御人さま也 大将かやうにはの給

へど」めなれてこのおにこそさらにおそろしくもなけれ

すこしかう神くしきけを付はやとてわらひ給へは 北のか

たなに事いふぞとよまめやかにしに給ねわれもしなんみれ

はにくしきけはあいぎやうなしとのたまふ あいきやうつ

きてはらだちなし給へは大将としころはさこそちきりきこ

えしかどにはかにうちつゝきまこゆへきよみぢのいそきよ

ちかくてこそ見給はさらめよそなからはなとか御らんせさ

らんとておこつり給へはなをさきり事とはおもへともすかさ

れてきのふけふ露もまいらさりつる物」いさゝかまいりな

としてなこみておはするをあはれとみたまふ いにしへよ

り三条の上の事に心をつくしたりし事のためひいてゝいま

となりてはみすてかたき物ともかすそひたればよもはなれ

はて給はしなんとかたらひきこえ給 くるればうちいそき

て一条へいて給をみるに心やましければ大将のぬきすて給

へる御そを引よせて

32ウ

33オ

三条の上 なるゝ身をうらみんよりは松島の海士の衣にた

ちやかへまし うつし人にてはえあるまじかりけりとの

たまふ」心はもとのまゝの身にてはえあるまじきと也 うつし心といふ

はほんしやうの心也

大将 松しまの海士のぬれきぬなれぬとてぬぎかへつてふ

名をたゝめやは しはし心もなぐさめんとて御ちゝちじ

の大殿へ三条の上はわたり給へり きんたちも少くはめ

のとにくして我か殿にのこしすこしをばくしきこえておは

して御あねのこうきてんの御かたなとへたいめんして心を

のどめ給 一条の宮にはこよひもなをさしこもり給へるを

やまとのかみにてよろつの事をとりもちたる御したしき人

ありて大将の御心さしはかたしけなきを」かゝる事いみ

しき事とおとろくしく申てぬりこめのうらより人かよは

し給ふかたより大将をいれたてまつりたり うちくくの御

しつらひなどあるへかしくしてありつけたてまつる たけ

くのたまひてもかひなき事なればたゝ女の御名ぞたちぬる

一 ふるき御しうとかしわきの御ちゝおとゝよりしはくは

さてもおはせすして御文あり

大臣 ちきりあれや君を心にとゝめをきておはれとおもひ
うらめしときく

落葉 なにゆへか世にかすならぬ身一つをうく」 ともお

もひかなしともさく 六条の院もきこしめしてわかき女

の御身はとくるしき事なりいろをもよしをも人にみえじと

すればなにゝ付てかいける身のかひもあらん又おほしたて

たるおやもくちおしからすや さるほとにすこしのなさけ

もあれはかゝるなんいでくる物也 わか身ほいをもとげな

はいかなるさまにさすらへ給はんとおもふこそうしろめた

けれとむらさきの上に申給へはさまてをくらかさんとおほ

したるかとおかほあかめ給へり

夕まりの御おもひ人 三條の上のわ

れをつねにゆるさぬ物とのたまふなるにかくあなづりにく

き事もいてくるはとおもふ 北のかたへ御文たてまつる

藤内侍 かすならぬ身にしられましうき事の人のうへにもぬ

るる袖かな 北のかたにかにそやおほえ給へとおりから

物あはれにて御返しあり

三条の上 人の世のうきをあはれとみしかとも身にかへんと

はおもはざりしを かくてのちは三条の雲井のかりの御か
たこの宮と月を十五日つゝうるはしくかよひすみ給け
り」
以上廿五首

35ウ

廿四 御法

一 むらさきのうへありし御なやみのうちよりはいとあつし
やせひつたる^{やせひつたる}群也
うなりまさり給てすぐよかなるおりすくなくおはしますを
けんし
院のおもほしなげく事かきりなし しはしにてもおくれき
こえん事はいみしかるへき事におほひたり むらさきの御
心にもとしころの御ちきりかひなくなりゆきておもほしな
げかれん事をぞあはれにおほしける のちの世のためと心
さし給ていかめしきくとくの事のみせさせたまふ つるに
ほいをはとげずなりぬるとおほざるゝのみなん」 むせひ
たる心ちしてつみもおもかるへきゆへにやとつしうめたく
おほしける

一 日ごとにかゝせさせたまひけるほけ経干部のくやうをこ
のたひぞし給ふ いまのとしや干ふなるへし 事そぐとおほさ

36オ

るゝ事たにといかめしうなるをましてこのたひは御心と
めてほとけのかざりもとゝのへさせ給へればまことの極楽
おもひやらる 七十僧のふせんといかめしうおほしまう
く ほうふくはさらにもいはずけさのぬいめまてむらさき
のあやなりければ見しる人はいとめてたしとおもふ はか
なき」 女のをきてともみえずいその神の世々をへたる御
願にやとぞ人々はおとろき給 みこたちかんだちめつどの
給ふ 殿上人たちはましてうち春宮院きさいのみやいつか
たのもあつまり給へり かくにんまい人などのさためは大
將の君とゝのへ給 つねにまいりなれ給し人々の御かほ又
はことわきなとをもこれやみきくかきりならんとむらさき
の御心の中はあはれ也

一 花ちるさとあかしのうへなともちやうもんにわたり給へ
り 時につけたる夏の事にふれても心のおくはいどまし
くもやあらんうはへはなさけをかはし給しに」 まづひと
りむらさきのわかれゆく心ちし給もいとあはれなり

一 たきこるさんだんのこゑもいとたうとし あかしの御
こゑにて行道する事は花のさんたんに有
かたへ

37オ

衆

おしからぬみのりなからもいまはとてたき木つきなん
ほとのかなしさ この御返をあかしの上の御心に物あは
れなる事なときこえんはのちのきこえも心をくれたるすぢ
にやとおほしてたゞそこはかとなくぞあめる

明石

たき木こるおもひはけふをはしめてこの世にねが
ふのりぞはるけき 人々のうちやすみたるひまにいと心

ほそくおもひめぐらされ給へはましてよろついまはとおも

ひはて給ふ御身は」あはれなり 花ちるさとの御かたへ

むらさき 〓 たへぬへきみのりなからぞたのまるゝ世々にとむ

すふ中のちきりを

花散里 むすひをく契はたえじ大かたののこりすくなきみの

りなりとも 事はててをのゝ帰給もとをきわかれめき

ておしまる この歌ともゆへ此まきを御法と名付たり

付合心え給へしたき木こるはくどくの事也 又人のおほりはたき木つくる也

一 かやうにあつしうおはしませは中ぐうこの院にまかで給

へり といふは二条の院むらさきのわたくし所也この比中宮
と申はあかしの女御殿也今上の御代の後にたち給へり

むらさきはなたいめんをきゝ給にもその人の御うへも」

これやきくへきかきりならんと御みゝとゞめられたり

38オ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

なたいめんは日ごとに大内に夜る御とのみ申給ふ人のふんはなのりあひ給
ふをなたいめんと云 殿上にての事也 又かやうにまきまきの御とも申たる
人もそれかしかれかしと氏と位とをたのり給をなたいめんと云也

一 むらさきはいひをかまほしき事あれともさかしくさたか

にはのたまはでおりゝきさきにめしつかふ女房などの心

ほそけにてのこりとまらんをほおほしかずまへよなんとさ

りげなくてはたまふはかりなり なにゝつけてもこの世を

かりそめにおもひなし給へる御さまのかきりなくあはれな

り あかしの上も」御むすめの中宮にそひたてまつりて

おはしましてしつまりたる御物かたりもきこえ給ふ あか

しの中宮はまことのははうへよりもむらさきのうへをはた

のもしくありかたき物におほしたるにかやうにたのもしけ

なくの給へは心ほそくかなしとおほす

一 梅桜ゆすり給ふといふ事あり これは三のみやにかきり

たる事也 のちにほふ
兵部卿の宮 此比三の宮四つはかりにおはしまし

けり 人きかぬまにむらさき御まへにすへ給てまろが侍ら

さらんときはいかかおほすへきとの給へは三の宮むらさき

の御かはを」うちまほりてまろは内のうへよりも宮より

38オ

ちむらさきの事
もはゞをこそおもひきこゆればおはせすは心ちむつかしか

りなんとてなみたおちぬへければうつぶしてまきらはし給

さままつくしければうちゑみなから涙こほれたまふ まろ

がなからんのちおとなになり給てはこゝにすみ給てこのこ

うはいとさくらとをほとりわきてなかめ給へさるへからん

おりはほとけにもたてまつり給へときこえをき給し事也

むらさき御かくれの又の春もいつしかおほしりてまろがさくらとの給し
也

一 秋になりてすゝしさまちいてゝはすこし心も」 つき給 39ウ

ふやうなれとなをいとたのもしけなし 中宮はそのまゝま

いり給はすてみてまつりたまふ 風つねよりもふきい

てゝ物すさまじき夕暮につねよりもうちなかめてけうそく

により居たまへる御かたちたとへんかたなくうつくしけに

て中々によのつねに引つくろひ給しときはこの世の花にも

おもひよそへられ給しをいとはかなけにてしるふすきとを

りたるやうにあてなる御はだつきなとたとへいふへきやう

なし けんしおはしましてこよひはむらさきの中宮の御か
たにとまり給へれば」 けんしはすはなれたる心ちしてと

40オ

の給ておきておはするをうれしけにおもひ給へればなから
んのちの御心も心くるしくおほしやりて

紫の上 をくとみるほどぞはかなきともすれば風にみたるゝ

萩のうは露 中宮は御なみたせきあへすして

中宮 秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへと

のみ見ん けんしの院もいみしくなき給て

源氏 やゝもせはきえをあらそふ露の世にをくれさきたつ

ほどへずもがな とのたまふさまのあら」 まほしきに

かくてちとせをすくすわさもかなとおほせといとかひなく

てその暮よりふし給て又の日のあかつききえはて給ぬるは

いみしきわさかな あるかぎり物おほゆる人もなければけ

んじの院ぞよろつををきてたまふ 大将の君をちかくよひ

よせたてまつりてとし月のそみ給しむらさきの御くしおろ

さんとのたまへは大将いふかひなくなり給て御くしはかり

をやつし給はんは中々ならんとて申とゝめ給へり うせ給

ぬるあかつき御とのあふらの光に見給し御かたちにかの野

分の夕むらさきを」 見給しをおほしあはせて
夕霧 いにしへの秋の夕の恋しきにいまはとみえしあけぐ

41オ

40ウ

れの夢

一 御とふらひはいづくよりも一わたりならずこの事により
てげんじの院は御はいとげ給へしとみな心え給へればよの
つねならぬ御事也 ちしのおとどはあふひのかくれ給し秋
もおほし出て御文

大臣 いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖に露そ
をきそふ 御返

源氏 露けさはむかしいまともおもほえず大かた秋の世こ
そつらけれ 秋このむ中宮よりもしばしば「御とふらひ
あり この御せうそこはかりをぞ御めもとまりておほされ
ける

秋好中宮 かれはつる野べをうしとやなき人の秋に心をとど
めさりけん 御返

源氏 のほりにし雲井なからもかへりみよ我か秋はてぬつ
ねならぬ世を 大かた人にもみえ給はず御かた／＼へも
かりにもおはしまささりけり

以上十二首

廿五 幻

一 春の光を見たまふにつけてもいと御心ひとつはくれま
どひたるやうにおほさるゝにとはは「みすのと也れいのごとく人々
まいりつどひなとしたまへど御心ちなやましとてみすの内
におはします 兵部卿の宮わたり給へるよしきゝ給てまづ
きこえたまふ

源氏 我やとは花もてはやす人もなしなにか春のたづね
きぬらん うちなみたくみて

宮 かをとめてきつるかひなく大かたの花のたよりといひ
やなすへき 宮はこうばいのとくさきたるもとにあゆみ
いてゝうそふきたまへるさまけにこれならては花をももて
あそふへき人なしとぞ御らんじける たゝつねのみすの内
ながら御たいめん」ありけり

一 春の雪ふりたるとし也 むらさきの世におはせしときか
やうに春の雪つもりたりしに女三の宮のわたりはしめにて
三ヶ夜のはとは夜かれなくわたり給しかはむらさきはれい
ならぬ御かたはらさひしき夜な／＼のへにけるをもおもひ
みたれ給にけんじ夜ふかく帰給へり ひさしくまたせたて

41ウ

42ウ

42オ

まつりてかうしをあけたれば御身もひえてよりふし給へる
にむらさきなに心なくなつかしきもてなしにてなきぬらし
たまへる御ひとへの袖をさりげなく引かくしてさすかに又
うちとけてはあらざりし御けしき」 などのいかならん世^{43オ}
にか夢にても又はみんとおほすに御かたはらのさひしさも
かなし

源氏 うき世にはゆききえなんと思ひつつおもひのほか
われぞほとふる れいの御てうつまいりておこなひした
まふもめつらしくみえたまふ うづみたる火おこしいて
御ひをけたてまつる むめもさくらもとくおそき花の心を
わけてうへおき給しかはそのつきくりにさきちるもあはれ
なり 二の宮にゆつり給しかたみのこうはいに驚のわかや
かになきいでたればたちいて給て」

43ウ

源氏 うへてみし花のあるしもなき宿にしらすかほにもき
るるうぐひす 花の木ともの色つきわたる御前のけしき
をみわたし給て

源氏 いまはとてあらしやはてんなき人の心とくめし春の
かきねを つれくなれば入道の宮の御かたへわたり給

て御物かたりあり ことにふかき御道しんなられとまきる
事なくおこなひ給もうらやましくかやうにてはみるへか
りけりとおほすにももよほさるゝ御なみたのやかてふりお
ちて心よはければ大かた人にみえじとおほす むらさきの
御事を思なげきて」 世をいとひたると人につたへられん
御なのあまり心よはければ御一めぐりまてはおなしさまに
てなからへんとねんし給ぞくるしかりける

一 あかの花の夕はえといふ詞はこの時の事也 入道の宮の
御かたの仏の御前にあかつきにそなへられたるやまふきう
つくしかりけり けんしむらさきの御かたのやまふきをう
へし人なき春ともしらすかほにさきみたれたるこそあはれ
なれとの給 その御いらへに入道の宮たには春もとおほ
せらるゝ 引歌花さかぬたにゝは春もしられねはさきてと
くちる」 物おもひなしと云歌の心也 心うき心はへの御
返りと入道の宮をみおとし申給し也

一 それよりすぐにあかしの上のかたへおはしまして心に
くゝおとなしやかに物かたり申給へは夜ふくるまでおはし
ましてかくてもあかし給へきをむらさきの御かたへ帰り給

44ウ

へはひじり心になり給へる御ありさまの引かへたるをあか
しの上はうちなきけり 御てうづめして御おこなひし給て
あかし給ふ つとめてあかしの上へ御文あり あしたとくを
つとめてと也

源氏 なくくも帰りにしかなかりのよはいつこもつるの
とこよならねど よべの御けしきは「うらめしけなり
しかと御返

明石 かりがるしなはしる水のたえしよりうつりし花の
かけをたにみず

一 卯月一日衣かへの御しやうそく奉給とて

花ちる里 夏衣たちかへてげるけふはかりふかきおもひもす
ゝみやはせぬ 御返

源氏 は衣のうすきにかはるけふよりはうつせみの世そい
とくかなしき

一 中宮將の君と云女房はむらさきのとりわきらうたかり給
し人なり れいの御くせなれはけんししのひくの御おも
ひ人なり かくうせ給てのちは「たむらさきのかたみ
ととりわきあはれにおほしけり かたち心はせらうたけに

45ウ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

みえてうない松におほえたるもあはれなり うない松の事引事也
おほえたるとはに
る事也

一 かもまつりの日はあふひをみなもてなす事なれはこの
中将がひるねしたまへる所へけんしあゆみ おほし。たればあふひ
をかたはらにきたるをとりてみ給てけんしなにとかやこ
の名こそわすれにけれとの給へは

中将 さもこそはよるべの水にみくさるめけふのかさしよ
名さへわするゝ

源氏 大かたは思すてゝし世なれともあふひはなをやつみ
をかすへき よるべの水は神き也」 寺社のうへにをか
るゝ物也 神事にのようにつかふ事あり

一 五月雨の比五月十四日月さしいてゝ空をのみなめ給ふ
にはかにあやにくだちて村雨のやうにふり出たり 郭公
なけは

源氏 なき人をしのふるよひのむら雨にぬれてやきつる山
ほとときす 夕きりの大しやうは御つれくを心くるし
かりてつねは御殿ゐにさふらひ給けり たちはなを
大將 郭公君につてなん故郷の花たちはなはいまぞさかり

46オ

と 日くらしを」

46ウ

源氏 つれく〜と我がなきくらす夏の日をかことかましく

きむしのこゑかな ほたるを

同 夜るをしるほたるをみてもかなしきは時そともなきお

もひなりけり 七月七日ほしあひみる人もなし

同 七夕のあふせは雲のよそにみてわかれの庭に露そをき

そふ 八月十四日むらさきの御ひとめぐりにかみしもい

もぬして ときをもせよかいを
もたもていもと也 むらさきのかかせをきたまひし

こくらくのまんたらおをかみたてまつる あかつきの御て

うつまいらする中將の君か扇に書付てもちたり」

47オ

中將 君こふるなみたはきはもなき物を今日をはなにのは

てといふらん かきそへ給

源氏 人こふる我か身もすゑになりゆけはのこりおほかる

なみたなりけり 九月九日わたおほぬたる菊をみ給て

同 もろ友にをきぬし菊の白露もひとりたもとにかゝる秋

かな かりかねの鳴てわたりたるつらをはなれぬはれい

ならすうらやましくて この歌ゆへ幻と也

源氏 大空をかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉の行ゑた

つねよ

冬にもなりぬ 五節に御まこのきんたち 夕きりの
御子也 あまたは

しめて殿上するとて御おぢの殿原あひくし給へり みな」 御子也 47ウ

をみにてきよけ也 五節にはをみ衣
あをずりを用也

源氏 宮人はとよのあかりにいそくけふ日影もしらでくら

しつるかな

一 やうく世をいとひ給へき事ちかく成ぬればさりけなく

て人々にも物ともたまはず むらさきのかき給るふみとも

けんじのすまにおはしましける比のほうぐをひとつにむら

さきのつねはゆいあはせられてありけり みつけ給てさる

へき女房あまたしてやるに やかせ給 あまり御なみたのなかれて水く

きにいとくしければ人のみるもくるしくて」

源氏 しての山こえにし人をしたふとてあとをみつつまな

をまとふかな あまり人めも心よはければをしませてや

かせ給

同 かきつめてみるもかなしきもしは草おなし雲井のけふ

りとをなれ 仏名にはいつよりもしやくちやうのこゑも

めてたくきこえて行すゑとをき事をみだうしのいのり申も

48オ

ほとけのきゝ給はん事かたはらいたし 御導師を御前にめ
して御さかつきれいよりもさしまし給ふ ひさしくつかう
まつるほうしのかしらはやう／＼しろくなりぬるを」あ
はれに御らんす けふこそみすのちにいで給ぬる事のかき
りなりけれむかしのひかる御かたちにも猶まさりてみえた
まふ まことや御だうしのさかつきのつるてにかゝる事そ
ありける

源氏 春までのいのちもしらす雪の内に色づく梅を今日か
さしてん 御返

御導師 千代の春みるへき花といのりをきて我か身そ雪とゝ
もにふりぬる ふりぬるよはゐのそうは涙おとして見た
てまつるとあり 三の宮を見給もあはれにていのちといふ
物なからへぬとも君をみ」たてまつらん事はあるまじき
そかしとの給へは三の宮いとまがくしくはゝのたまひ
し事を又のたまふとて御そてにをひきまさぐり給ふ なや
らはんにおとたかかへき事をせんと はしりありき給
十二月 五月一日
一つこもりの日はあすの御まうけ大臣みこたちの御引出物
つねよりもきよらにしをかせ給へり

六条の院 物おもふとすくる月日もしらぬまにとしも我か身
もけふやつきぬる
以上廿六首

かやうにのたまひしまゝにてそのゝちの行急しる事なし
廿六の巻より廿九卅並二帖以上六てうは」宇治の宝蔵
にこめられしゆへ也 雲がくれともをしあてにこそ申せみ
たる人なし すもり 五帖 二帖 嵯峨野などゝ云ものちにつく
りそへられたる本也 それもいまは世にわたらず 廿五よ
り廿七かほる中将へうつるへし その間八九年とみえたり
大かたことばのつゝきなとふでうなりともふしんあるへ
からざる比の巻とも也 竹川まで四十四帖にて宇治十帖は
一はしひめより十夢のうき橋まで十てうあるへし 其内を
引つぎて卅五などゝある目録は ひすへからすゝ」

廿七 薰中将 此巻勾兵部卿の宮也

一 ひかりかくれ給にしちその御あとに立つつき給ふへき
人そこらの御中におはしませす おり居の御門をかけたて

まつらんはかたしけなしとは冷泉院の御事也 源氏おはし
まして後廿五と廿七のまきの間にかくれ給へる人々 朱雀
院山の御事也 螢兵部卿の宮 先帝式部卿の宮むらさき 五の宮
そつの宮の御事也 致仕の大政大臣こしうと 鬚黒太政大臣 かやうの
人々はかくれ給とみえてけんしの比五つはかりにみえ給し
宮のわか君又今上の三の宮にほふのの御かた／＼この巻
に元ふくをし給へは廿五まほろしの 1 まきと廿七の巻の
間八九年とみえたり

女三

一 入道の宮のうみ給しわか君をはまことはかしわ木のゑも
んのかみの子なりしかとも源氏の院そのけしきを人にみせ
給はずして御ゆつりにすゑ事かきを給しふみにもすゑの
ことありしかはあかしの中宮なともいさゝかもしり給はず
して御おとうとおほしてとをりたり 系図もかくのこと
し 冷泉院へ御子にし給へと申あつつけ給しかはけんしをか
たしけなくおほしめすにそへて又この君の心ふるまひもよ
のつねの人にはかはりてめてたくおはしませは「かうに」
院にておいたち給て十四にて院にてけんふくし給ふ 四
位の侍従と申き 御身のありかむまれつきてかうはしく

51オ

おはすれば世の人かほる中將と申けり この巻にうこんの申
將になり給しゆへ也
いまのみかとの御事
今上の三の宮あかしの中宮の御はらなれはいつかたにつけ
てもしたしくむつれたまふ このかうはしさをこと事より
もいとましく三のみやおほしてからのたき物をむめの花の
にほひにあはせてうつつにもしめ給へは大かた御かうはし
さまがひたり 世の人又にはふみやと申す 御けんふくの
後にはほふ兵部卿の 1 宮かほる中將ときゝにくゝ申つづ
けたり

一 ゑもんのかみのしのひたる子なりとおさなき御みみにか
ほるに申きかせたる人あるへし これのみ心にかゝりてよ
ろつの事に身につゝがある心ちし給ふ つつがといふは
わつらひなり

一 御母入道の宮はあき夕につけてたゝこの君のいていり給
をたのもしくうれしき事におほして山の御門の御ゆつりに
三条の宮とてひろくおもしろきを給はり給しにいかめしう
すみなして御おこなひし給けり かほるの御心にはあまに
なり給と申せとも女の御さとりいかゝあらん五つのなにが
しもおほつか 1 なしとあるほげきやうだいはほんに一し
やふとく さほんでんわうと五つまでとかれたり 女の身はどの五しやう
のへたである也 それを五つのなにかしとやほらけての給へり

52オ

一 かしわ木もくるしきおもひにもえてや過給けん わかれし
ゆつけしてそのつみにもかはらばやといつも道心ふかくお
ほしけり

かほる中将 おほつかなたれにとはましいかにしてははじめも
はてもしらぬ我が身ぞ かくはひとりこち給へともこた
ふへき人もなし くい太子のわか身にとひけんさととりもゆ
かしくてのちまてしゆつけの心さしにて」 おはしたり
梅太子 らごらの事といへり

52ウ

一 夕露の大臣はいまはならびなき御事にて大殿とそ申け
る はら／＼の御子おひたし 六条の院はつどひ給し御
かた／＼もけんしの御のちはちり／＼になり給へは夕露の
御こと葉に人の家居のなくなりて後すたれたるは世のはか
なきのほとあらはれてかなしき物也 我か世にあらんほと
六条の院をほとりのおうちの人にかけあらしはてじとの給て
しんでんには二の宮を今上のタきりの中の君にむことりてすゑ申
給ふ 又春の町にはあかしの御はらの女一のみやを」 住
ませ申給ふ にはふより御あね一品の宮是也 又夏の町に
はかの一条の落葉をわたし申給て夕きり十五日こゝにすみ

53オ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

給 十五日をは三条の我か御殿にくもぬの雁と住給けり
三条のうへの御はらをも藤内侍のはらをもひめ君をはこの
御まはまは、おち葉の宮にあつけ申て御てならひことならは
しなんとめてたき御このみなり

一 のりゆみのかへりあるじといふ事この巻也 こゆみな
りのり物とはかけ物也 くじ弓おなし いまの武家の弓
はかちゆみとのたまふ也 このかちゆみの時は」 人々の
とねりもいる也 とねりものゝぶしとあり 春はおり／＼
大内にてあるなり その帰さを大臣家のやくのやうに御も
てなしをわれ／＼のいへにてし給をかへりあるくと云也
かへりあそひとも云 あるじはもてなしの惣名也

53ウ

廿七の 并紅梅

アセテ 按察大納言アンシチアル悪敷

一 この比あんじちの大納言ときこゆるは故こしうとちしのおとゞの
二郎君也 かしわきのゑもんのかみの御さしつぎのおとゞ
となり はやうより御心あるべかしくて八つ九つのころ
ちゝおとゞゝゑんふたきのまけわざし給し日わらはにてたか
さこうたひし君也 故」 北のかたの御はらにひめ君一人

54オ

大い君中の君とてまします いまの北のかたはひけくろの
御むすめまきはしらの歌よみ給しひめ君也 はしめほたる
の宮の北のかたにてこれもひめきみ一人もち給へり この
大なこんしのひくにかよひ給てつるにまきはしらを北の
かたにさだめ給へはほたるの宮の御むすめをものちのおや
のかたへくそくし給へり 大なこんいかめしき御いきおひ
なれば七けんのしんでんおもしろくきよらに作てみなみの
に大なこんとのゝ大い君にしのたいに中のきみひんかしの
たいにはほたるの宮のひめ」 君をへたてつる心なくすま
せ申てもてなし給けり このひんかしのたいのつまにおも
しろきこうはいありしかはにほふ宮などはほたるの宮の御
むすめをこうはいの御かたなともたつね給しなり 大なこ
んのこと葉ににほふみや梅の花をめで給へはこのひんか
しのつまなるこうはいを一えたみせたまつらんと御子の
わか君わらはてん上し給がちこせうでん也 御ふところたうかみの事が
みにつゝみそへてもたせてにほふ兵部卿の宮へこうはいの
うすやうに

大納言 心ありて風のにはほすそのの梅にまつ鶯のとははずや

54ウ

あるへき 大なこんあはれけにひかる」けんしときこえ
し大将などにてましくしころなれ仕事こそよとも
恋しけれ ちかくなれ仕けん女房などのいまゝていきめぐ
るはおほろけのいのちながさにはあらじとうちなき給てい
かゝはせんほとけかくれ給しのちはあながひかり光はなち
けんを二たひ仏のいでたまへるかとうたがふしりもあり
けるをひかる源氏を恋しくおもひきこゆるなくさめには此
宮をきこえをかさんかしの給てまいらせ給ふ にほふ宮
は御心よせの花なれば ふところかみの梅の花にほふの
付合なるへしこうはいなるへし「いみし
くもてはやし給てこうはいの色にとられてかはしろきむめ
にはおとる物なるをこのこうはいは色もかもとりそへです
くれたりとめて給ふ

御返 宮 花のかにさそはれぬへき身なりせは風のたよりに
すぐさましやは 又

大納言 もとつかのにはへる君が袖ふれば花もえならぬ名を
やちらさん 御返

宮 花のかをにはほすやとにとめゆかは色にめつとや人の
とかめん ふところかみのむめといふはたゞつゝみそへ

55ウ

55オ

たる也 かやうの事により系図にこのおとゝをこうはいの
右大臣とあり

以上四首」

56オ

同并

竹川

竹川こうはいとも
こうはい竹川とも

- 一 これはちの大殿わたりにありけるふるごたちともとは
はずかたりにしをきたれはむらさきのゆかりにもにざめ
れど のちの大殿とはひけくろの事也 左右の太政大臣
二 なけがれすぎでのちこの人せつしやうし給へはのちの
おとゝと云歟 後と書へし 或けいつにのみちのおとゝ
といへり これはかながきのあやまりと覚 かやうに
いひもてゆきしほとにもんしをもさためて野通の大臣と
書たる事候。しんしかたく候ほんにはいまかきことくこれは後の大殿わたりにありけるとあり
ほんのほかに記したる物はみえず候 仍ほんをもちゆへ
き事に候

一 ふるごたちとは後達ふる女房也

一 紫のゆかりにもにぬとはけんしの御そんのうちのもの」
いはぬ事なるゆへゆかりならず されはゆかりの云こと葉

56ウ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

のえんにむらさきとはいへり 紫の上などの事にはなし

一 ことのゝ御子はといふはひげくろの事也

- 一 ひけくろかくれ給し後玉かつらの内侍の督は御子ともあ
またのおやにてとりあつめ心ひとつにすくし給ふ 男子三
人姫君二人也 ひとりのはいかけ給し
上の御はらに三人也 おとこきんたちは心々に
なりのほりたまふ ひめ君たちをいかにせましとおほさる
此ころ十八九はかりになり給ふ いもうと君もおいすがひ
給へり おいつゝきたる心
おいすかひと也

一 かたちよき名たかくて心をつくし給ふ人おほし」かの

- かほる中将正月一日の夕暮。玉かつらの御いへにまじり給へりこの君をこそこれの姫君たち
の御かたはらにはさしならへてみめとさゝめきてあまりし
つまり給へりともどかしかりて上らう女房よみかけ給へり
宰相の君 折てみばいとゝにはほもまさるやとすこし色めけ
梅のはつ花 くちはやしときゝて御返し
花もみぬやうなる本来也
かほる よそにてはもぎ木なりとやさたむらんしたににほへ
るむめのしづえを

57オ

一 夕きりの大殿の御子に蔵人の少将といふ人あり このあ
ね君を心かけてあさ夕まゝかしか」ましくいひわたり御

57ウ

文のかすのみつもりたり このかほるのこの殿へおはしか
よへはさためて人々心うつさんと

少将 人はみな花に心をうつすらんひとりぞまどふ春の夜
のやみ たうちよりとあり

御返 おりからやあはれもしらん梅の花たゝかはかりにう
つりしもせじ

一 む月のすゑにこの殿へかほる又おはしたり れいの少将
も行あひてもろともに紅梅のもとに梅か枝といふさいはら
をうそふきてふたりたちより給へり みすのうちよりわこ
んと琵琶にて女房梅かえの薬「かくをかきあはせたり り
よのしらへなりけり のちにはみすのもとへみなよひなら
へて玉かつらいろくの琴ともいたし女房たちにもひかせ
てあそひ又かはらげなんとすゝめたまふ さかしら心ある
人もまじらてみなうちとけてあそひ給ふ 竹川といふさい
はらうたはれたり 又の日かほるのもとよりひめ君の事を
ほのめかして

かほる 竹川のはしうちいてし一ふしにふかき心のそこはし
りきや 御返

ひめ君のおとうと
侍従 たけ川によをふかさじといそきしもいかなるふしを
契をかまし

一 花あらしの碁又さくらをかけものゝ碁なんと」 いふ
はこのまき也 この殿にゑもいはぬさくら一と木あり
故殿は ひけく あねひめ君の花とのたまひ玉かつらは又い
もうと君の木とのたまひし事あり この花のおい木になり

たるにつけてもあまたの人にをくるゝいのちをの給てやよ
ひのすゑにこのさくらをかけてひめ君ふた所して碁をうち
給へり 三番にかすひとつかち給はんかたへは此花をよせ
んとしたまふ いもうと君右にてかち給ぬ この碁うち給
ふありさまをれの少将わた殿よりのそきてみてあね君の
かたちまさりたるをみていよく恋けり」 風すこし吹た
る夕くれにこの花の散を見給てまげがたの左の

大い君 桜ゆへ風に心のさはく おもひかいなき也 かな思ひくまなき花とみ
るく その御かたしたの女房きこえたすけたり

宰相の君 さくとみてかつは散ぬる花なればまくるをふかき
うらみともみす かちかたの右のひめ君

御返 風にちる事はよのつね枝なからうつるふ花をたゞに

しも見じ かちかたの御かたしたる

大夫の君 心ありて池のみきはに落る花あはとなりても我が
かたによれ なをかちかたのうへわらはおりてちりたる
えたをおほくひろひてまいりて」

童 大かたの風にちれとも桜花をのが物とそかきつめてみ
る ひたりのうへわらばよめり いづれも少女也

馴公
なれき

桜花にほひあまたにちらさしとおほふはかりの袖は
ありやは 心せはけにこそみゆれなんといふ かやうに
花あらそひをしてあかしくらし給を母うへはいかならんと
おほしあつかいけり

一 あね君は冷泉院へまいり給はんとすればかた／＼の御け
しやう人はあへなくて

かほる いたつらに過る月日をかそへつゝ物うらめしきくれ
の春かな」

少将 いでやなそ数ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心
なりけり 御文とりつぐ女房のつぼねにてよめり 御返
中将の君 わりなしやつよきによらんかちまけを心一つにい
かがまかする

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (公井)

60オ

59ウ

又少将 あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする
我か身とならば 御まいりちかくなりて卯月一日御文に
少将 花みつゝ春はくらしつ今日よりやしけきなけきのし
たにまとはん」

御返 いまぞしる空をなかむるけしきにて花に心をうつし
けりとも 此少将のかたよりまいりたるふみに手習に
あね君 あはれてふつねならぬ世の一こともいかなる人にか
くる物そは まへ申の女房これを少将かたへやりたりけ
れはいとゝなみたもこほれて

少将 いける身のしには心にまかせねはきかややまん君
が一事 かやうにいひけれどいまだくらゐもあさしと
て院へまいらせたてまつり給ふ 卯月十日也 くらんと少
将はそのうち心うくて冷泉院へは」 まいらさりけり

かほるの中将はおなし院のうちにするすれはいまの女御
のおはしますかたに松にさきかかりたる藤をみてよめり
かほる 手にかかる物にしあらは藤の花松よりこゆる色を見
ましや ひめ君のおとうとをこのころあるしの君と云
あるしの侍従 むらさきの色はかよへど藤の花心にえこそ

61オ

60ウ

かゝらざりけれ 院にはいみしき御おほえなり ちじの

おとゝの女御玉かつらのいもうと也ここのむ中宮みなねひ給ぬるにわ

かやかにてさしいて給へれば時めきてひめ宮一人又わかみ

や一人うみ給 いつ」そやの春たけ川うたひし夜の御あ 61ウ

そひをおもひてその御かたの女房かほるに申たり

竹川のその夜の事は思いつやしのふはかりのふしはなげ

れと 返

かほる なかれてのたのめむなしき竹河によはうき物とおも

ひしりにき

一 今上 いまの御門故ひけくろのみやつかへと申をかれしにはた

かひて冷泉院へまいらせ給ぬる事と御けしきあしければ玉

かつらのないしのかみを御むすめにゆつりてうちへ中の君

をまいらせ」給へはその御ゆつりの事かなひて中の君そ 62オ

うちにさふらひける 御おほえも心にくゝよしある人に世

にもおほえられ給て中々めやすかりけり 玉かつらのうへ

をはさきの内侍のかみとほんにあり

以上廿四首

廿一 柏木より九帖分この内にあり」

62ウ

光源氏一部歌第九 (外題)「

宇治十帖之内

一 橋 姫

二 椎 本

三 総 角

四 早 蕨

五 宿 木 「(扉裏)

1ウ

宇治之一 橋姫

一 この比世にかすまへられたまはぬふる宮おはしけりとい

ふはけんしの御おとうと八宮也 うはそくの宮ともぞくひ

じりとも又ひじりの宮とも申けり 北のかたもむかしの大

臣の御むすめにておはすれどみやのうちとし月にそへてさ

ひしく大やけわたくしきはなれたるやうになりまさり給

ふ ひめみやのうつくしけなるをさしつゝき御ふたりうみ

をきてこのはく北のかたかくれ給ぬ 宮いとあさましくお

ぼしまどふ ありふるにつけていとほしき世なれとあは」

れなる御ちきりのふたつなきにこそなくまめ給へしかひ

2オ

(表紙)

とりとまりて心ほそくもあるへきかなとおほせとおきなま
人々をはこくみ給ふ御心になをしのなへはめるをき給て御
きやうをかたてにもちて御ことなとならほし給ふさまいと
はつかしけなり あね君にひわ中の君にしやうの琴ならは
しきこえ給ふ いとちいさきはとにやしやりてゆしたまへ
るさまいとらうたし 春のいとのとやかなるに池のみつ鳥
とものはねうちかはしつゝつかひはなれぬもつねははかな
き事と思給しをづらにをくれぬはうらやましくおほしけ
り いと心つくしなりやとて」

2ウ

宮 うちすてゝつかひさりにし水鳥のかりのこの世にたち
をくれけむ ひめ君御すすりをやをらひきよせて
あね君 いかにしてすたちけるそとおもふにもうき水鳥のち
きりをぞしる よからねとそのときはあはれなり
中の君 なくくもはねうちかはす君なくはわれぞすもりに
なるへかりける

一 かゝるほどにおはします宮やけにけり うつりすみ給へ
き所なければ宇治といふ所にわたりすみたまふ いとく山
かさなれる御すみかになをとつれまいる一人もなし あしろ

3オ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

のけはひみくかしましき川のわたりにてしつかなるおもひ
にかなはぬかたもあれといかゝはせん 花もみち水のなか
れにも心をよするたよりにていとくしくなめたまふより
ほかの事なし かゝる野山のすゑにもむかしの北のかた物
したまはましかはとおほしいづるに

宮 みし人もやともけふりとなりぬるになどてうき身のき
えのこるらむ

一 この宇治山にひしりたちたるあしやり住けり たつひしりの
やうなるあし
なり このあしやりは冷泉院にも時くまいりて御経なと」
をしへたてまつる 又この八の宮へもまいりつかふまつ
る おとこなからおこなひ給ふほうもんなど心さしふかう
よみならひ給をこのあしやりたうとがりきこえてつねに仕
けり 京に出たるとき院にてこのよしかたり申たり 院は
十のみこにてこの宮よりは御おとうとにてましますとも位
につかせ給しによりて系図にもかみ也 院の御こと業にい
またさまはかへ給はずやとてあしやりの帰りにそへて

御文あり

冷泉院 世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲を君やへ

3ウ

たつる あしやり此御使をさきに」 たてゝ宇治にまう
たり よのつねの人のつかひたにまれなる山かけにいと
めつらしく待よろこひ給て御かへし

4 オ

宇治の宮 あとたえて心すむとはなけれとも世を宇治山にや
とをこそかれ その比かほるをばさいしやうの中將と申
けり この宮の御ありさまをきゝ給ふにいとあらまほしく
われこそしゆつけの心さしはふかけれとも位なとたかくな
り行て心ならずながらへぬれさやうにぞくなからつとめた
まふやゝい^{道々}かゝと御みゝとまりてとかく申よりてうちへま
いりかよひたまふこのかほるのかくねんころに申給へは」
冷泉院よりも御せうそこたえす この中將もいかめしうを
とつれ申給へは山のかけも人めみるおりおほくやうゝな
くさみ給けり おなしほとけの御をしへをもみゝちかきた
とへに引よせてなまめかしくいひなし給へはかほるはこよ
なくなつかしくてひざしくみたてまつらぬおりは恋しくそ
おもひきこえ給 かくまいりかよひ給ふ事二とせあまりの
秋のすゑつかたおもひ出きこえ給てあり明の月の夜ふかく
いつるほとに御馬にて都をいて給て宇治へまうてたまふに

みやこ」にはまだいらたゝぬ秋のけしきをとほの山ちか
く風もいとひやゝかなり あらましきしけ木の中をわけた
まふにそこはかとなき水のなかれをふみしたくこまのあし
をとまなをしのひてとよいいし給へり 山かつのおとろく
もむつかしとて御さきもをばせ給はぬにかくれなき御にほ
ひぞ風につきてぬししらぬかとおとろくね覚の家ゝおほ
かりける

5 ッ

引歌 ぬししらぬかにこそにはへ秋の野にたがぬぎかけし
藤ばかまかもと云歌の心 ちかくなるまゝに」 ひはし
やうの琴のをと川浪にきほひておもしろくきこゆ 内にい
りてきゝ給へはうはそくの宮は四きにあてゝ七日の念仏を
かのあしやりの寺にてまきれなくつとめたまふ その御る
すなるにひめ君たちあそひ給ふなりけり 道にてひとりご
ちたまふ木の葉の露のつゐて
かほる 山おろしにたえぬこの葉の露よりもあやなくもろき
我なみたかな 御おこなひのほとなれば殿ゐにさふらふ
男かたくなしけなうできたり かほるこのとのゐ人をか
たらひ給てひめ君」 たちの琴ひき給ふありさまをかひま

6 オ

み給へり ますまきあけてはしにおはします ひとりのは
しらにみかくれて琵琶をまへにきて雲かくれたる月のに
はかにさし出たるをのそき給へるかほいとにほひやかにら
うたけなり あね君 あふきならでこれしても月はまねきつべかり
けりとはちをさしあげ給へり いまひとりはしやうの琴
のうへにかたふきかゝりていり日をかへすばちこそありけ
れあやしうさまかへてもおもひおよび給ふ物かなとてうち
わらひたるいとおもりにいますこし」 あいきやうつき
たり あねきみ およばずともこれも月にはなる物かはなむとはか
なき事をもとすゑとりてのたまひたるさまよそにておもひ
しにはかはりてなよびかなるけしき御心とまりたれば我な
からひじり心はうせてぞおほえ給

一 おくのかたよりかほるのおはしますよしをつけたるにや
すたれうちおろしたるさましのひやかにさりけなくいさり
かくれにけり やかてそのみすのまへにかほるあゆみいて
山ちふかくわけきたるよし申給

かほる あさはらけいつちもしらすたつねこし」 まきのお
山はきりこめてげり 心ばそくも侍るかなと申給へはひ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

きいりなから

あね君 雲のゐるみねのかげちを秋霧のいとへたつる比に
もあるかな

一 宇治のふるぶみといふ事こゝにあり 姫君たちの御うし
ろみに弁の君といふねび女房あり この人はすきにしかし
わきのゑもんのかみのめのとこなり ゑもんのかみやまひ
かきりなりしとき 女三 入道の宮の御かたへ申へき事あれ
ともせうそこかよはさん事かなひかたければふみをかきて
この弁に」 あつたり そのほか女三よりたひくの御

返五つ六つあるをもゑもんのかみのもとはやきもうしなふ
へき人めのひまなし そなたにてともかくもなし給へとて
からのふせんれうのふくろにぬいくゝみてそのくちにゑも
んのかみふうをつけたり これをつたへんとおもふころほ
とにこの弁をつくし人ぬすみて西のうみのはてまでとりて
行たり されとこれをくびにかけてつくしに十とせはかり
すみてぬすみとりしおとこもつくしにてうせにしのち十と
せはかりにてみやこにのほりてうちの宮はしたしき中」

8オ

しかよふにたのみをかけていまゝてまちてこのあかつきく
 はしくかたりたり かほるは神かんなきやうの物のとはずか
 たりする心ちしてあさましくも又はとし月ゆかしかりし事
 をくはしくきけはうれしくもおほしけり ほのくゝと明行
 はよしこのむかしかたりはつきすべうもあらず又人きかぬ
 所にてとてかほるはたちいてゝとのゐ人がしたるにしおも
 てにてなかめ給ふに宇治橋の神かうくしくみえわたれるに
 はかなき舟に柴かりつみてかなた」 こなたへ行かふさま
 はかなき水の上にかびたる身のわざをあはれに御らむず
 われはうかばす玉のうてなにしつけき身とおもふへき世
 かはとおほししらる ひめ君たちの御方へ
 かほる はしびめの心をくみてたかせさすさほのしづくに袖
 ぞぬれぬるこの歌ゆへまなかも給ふらんかしとてとのゐ人
 にもたせ給へり ひめ君たちはかみのかなんとなへてなら
 んはかたはらいたからんとおほす
 あね君 さしかへる宇治の川おさあさ夕のしづくや袖をくた
 しはつらん 身さへうきてと」 いとおかしけにかき
 給ふ まほにめやすくおはしけりと心とまりぬ

9オ

8ウ

引歌 さすさほのしづくにぬるゝ袖の露の身さへうきても
 おもほゆるかなと云歌の心也 宇治のはしひめといふ事
 は源氏いせんの事也 いまおもひよそへてかほる大將はし
 姫とはよみたまへり

一 かほるは都に帰てありつるふるぶみをみ給へはかしわき
 の御てもたゝいまかきたらん心ちしてかほるのむまれ給へ
 る事を

かしわき いのちあらはそれともみまし人しれず岩ねにとめ

し松のおいすえ 又女三の御さまかへたまへる事を

かしわ木 めのまへにこの世をそむく君よりもよそに」 わ

かるる玉ぞかなしき とあり これをみ給にかほるはゆ

めの心ちして世に又かゝるためしあらんやと人にいつゞふき事

ならねは心にこめておもひる給へり この弁の君をはとは

すかたりのふる人とも又宇治のふる人ともいへり

以上廿十三首

二 権 が 本

一 きざらき廿日あまりのほとにひやうにはぶぶ卿の宮はつせにま

うて給へり うばそくの御むすめたちうつくしけにておは
するよしかのひはのばちにて月まねき給しあり明の空より
はしめ心にくゝかほる大将」 かたり申給へは宇治に御中

10オ

宿あらんためにはつせへはまじり給へるなりけり 川より
をちに御まうけいかめしうせられたり 碁すぐ六なんとみ
なすさびくらし給ふ 舟にてのほりくたりあそひ給ふ
はるくゝとかすみわたる空にちるさくらあれはいまひらけ
そむるなと色くゝみわたさるる 川そひ柳のおきふしなび
く水影なとおかしきをみならひ給はぬわかき人くゝはめつ
らしくみすてかたしとおほさる ひじりの宮は 八の宮のた
御こと也
ゝさしわたすほとなりければかほるの御かたへ御せうそこ
あり」

10ウ

うはそく
の宮 川風にかすみふきとくこゑはあれとへたててみゆ
るをちのしらなみ かほるの御かたへの御文なれともに
ほふみや御心よせのかたなれはこの御かへりはまろきこえ
んとて

句宮 をちこちのみきはに波はへたつともなをふきかよへ
宇治の川風 かほるはかの宮へあそひに心いれたる若き

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

んたちさそひてまいり給ふ さしわたる舟のうちにてかん
すいらくという楽をあそひて 監水楽 水にのぞきたるらう
につくりおろしたるはしの心はへなとおもしろき宮なれ
は人くゝ」 心して船よりおりたまふ うはそく
このすまゐいと
事そきて 物をりやく(旁記)「略」
するを事そくと云也 あじろひやうぶなとわか
とならずよしづきてすみなし給へり 御琴とも事くゝしか
らす引出て御あそひあり 一こつてうの心にさくら人あそ
ひたまふ あるしの宮はきんの上すにてましくけり 源
氏の御弟也

11オ

一 にはふ兵部卿の宮はかゝる時たにと忍かね給てひめ君た
ちの御かたへ桜の花に付て

宮 山桜にほふあたりにたつねきておなしかさしを折てけ
るかな 御ともなるうへ童してたて」 まつり給へり
御返中の宮にそかゝせてまつり給ふ

11ウ

御返 かさしおる花のたよりに山かつのかきねを過ぬ春の
たひ人 このゝちはかほるの御しるへなくとも御文あり
けり ちゝみやの御心にもいつれにてもひとりをありつき
給はゝそのかけに又ひとりはとみすてんのちの御ありさま
を心くるしくおほしけり にはふ宮はかならず御ひとりを

はみちしるへし給へとかほるに申給 かほるは又あり明の
月影よりしては御あね君を御心にとゝめて我か物とおほし
たれともあね君はことにさやうのすちお」 ほしめしもか
けさりけり 12オ

一 秋になりてかほる大将はうはそくの宮へまうて給へり
いつよりも宮は待よろこひきこえ給てさきくみさし給し
ふみともとりいて、御となあふらちかくて御らんしてあし
やりもしやうじおろしてぎなといはせたまふ いとゝあら
まほしき風のをと吹はらひて川浪も夢たに心のとかにみゆ
へきくもなし ひめ君たちいかなる心ちしてすくし給らむ
とおもひやるも心くるしき御ありさま也 うはそくの宮も
このたひは心ほそげなる御物かたりし給てなからんあとに
は」このひめ君たちの又たのむかたなくておはせんをか
ならず御心とゝめてうしろみ給へと御ゆいこんあり かほ
るも一ことにてもかくうけ給てはおろかにみすてたてまつ
るましきとまめやかにうれしく思ひて申給ふ
うはそく われなくて草のいほりはあれぬともこの一ことは
かれじとそおもふ 御返り

かほる いかならむ世にかかれせんなき世の契むすべる草
のいほりは ^宮かゝるたいめんもこのたひやかきりならん
とおもふに忍かたかくてかたくなしきひか事おほくもなりぬ
るかなとて宮はほとけの御まへにிரり給ぬちゝみやにせち
に申給へはうとくし」からぬはしめにもとやおほしけむ
宮うちにいり給てひめ君たちをすゝめてしやうの琴をほの
かにひかせ申給ふ これよりのこりは世こもれるどちにゆ
つりきこゆるとおほせらるゝは 大かたわかき人を世こもれるおい
さきこもれるという おんな子の
おとこのかたへゆかぬさきをははゝき木の品さために世こもれるまどのうち
といへり おとこになれる女をは世なれたるといふ なれぬをは世こもれ
る人とあるなり よをしらぬ
といふも男になれぬなり

一 かほるはみやこに帰て又やかてまいらむと思給ほとに宮
はれいの七日の念仏にあさりの寺へ給はんとてまれいなら
すたちめくりて御らんしてひめ君たちにも心ほそくなおも
ひ給そ心をやりてあそひ給へ世のならひ」にてつるのわ
かれありとも此ふしみをあくがれ給ふな うち事もなく
すぐるとし月なり 身のほとにあはぬ心つかひ給ななんと
なからんあとの事をたまひて七日こもり給ふ (ママ)事あく日
御心ちわつらはしとてそのまゝおり給はてあしやりの寺に
13ウ

てはかなくなり給にけり ひめ君たちは世のつねにあるわ
かれともおほえ給はずあさましくかゝる事にはなみたもい
づちかいにけんたゝうつぶし給へり あしやりとしこ
ろちきり給事とてのちの御わざいとなみけり ひめ君たち
はなきからたにみたまはずして」 ふしまろひ給へとかひ
14才

なし かほるはましてあはれに世のさためなきさいまさら
おとろかれてかなしうなけきたまふ あしやりのかたへよ
ろつとりもちてし給ふ ひめ君たちもたのもしく御心に入
てこゝにもねんふつそうおほくすへ給へり たひくには
ふみやよりも御文あり 時雨かちなる夕へ

宮より をしかなく秋の山さといかならん小萩か露のかゝる
夕くれ 中の君はいまゝてなからへてすゝりなとみるへ
き物とやおもひし心うくもつもりぬるひかすかなとて又
なきふし給へは京を夕暮にいてたる」 御使よひすきてき
14ウ
つきたり こよひはたひねしてといはせ給へどたち帰りま
いらんと申せはわれさかしく思しづめ給ふにあらねどみわ
つらひ給て

あね君 涙のみ霧ふたがれる山さとはまかきに鹿ぞもろこゑ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

になく 御使はこわた山のわたり雨もよにおそろしけれ
とも物おぢすましきをやえり給けんむつかしけなるさゝの
くまこま引とゝむるほともなくうちはやめてまいりぬ 御
せんにてもいたふぬれてまいりたればろくたまはず く
ろきかみによるのすみづきたとくしかりしを宮はさき
15才

く御らんする手よりはいますしおとなびまさりてよ
しくしきかさまをいつれかいつれならんとをきがたふ
み給てとみにも御殿ごもらすねばごたちはねふたくてまつ
とておきおはしまし又御らんするほとひさしきはいかは
かり御心にしむ御文ならんとにくみきこえけり あしたあ
さきりふかきに奉たまふ

宮 あさ霧に友まとはせる鹿の音を大かたにやはあはれと
もきく

一 かほるはみつから宇治におはしましてよろつの事」と
15ウ
りもちて御はての事なといとなみたまふ ちみやおはせ
ねはゆつるかたなくてかほるにもあね君を物へたててあひ
しらひきこえさせ給ける すみそめの御木帳ほのくみゆ
るすきかげみな御ぶくのほとなれはいることなるをみ給に

おはしますらん御かたちゆかしくみまほしくてうちななめ

たまふ 九月也

かほる 色かはるあざちをみてもすみそめにやつるゝ袖をお

もひこそやれ 御かへり

あね君 色かはる袖をは露のやとりにて我かみせさらにをき

所なき はつるゝいとほとすゑは」 いひけちいひけしたりていみし 16オ

くものおもはしきけしきにていり給ぬ かほるはいとあか

ずそおほしける 引歌 藤衣はつるゝいとわひ人の泪の玉

のをにこそありけれと云歌の心也 雁のななくに

かほる 秋きりのはれぬくもるにいとゝしくこの世をかりと

いひしらすらん

一 あしやりのむろへもおはしまししときこそ人もかよひし

かいまはなにゆへにかほのめきまいらん かゝるかたの人

影さへたえはつるもあはれなり いにしへたてまつりなら

ひたるとてすみなんとあしやりの」 むろよりまいらせた 16ウ

り これよりもとし比こみやのつかはし給しをおほしいて

ゝわたきぬなと山風ふせくへき物つかはし給ふ 雪ふりつ

もりてこの御つかひのかへりのほるもみえみ見えずみなり

たち出て

あね君 君なくて岩のかけ道たえしより松の雪をもなにとか

はみる 御返

中の君 おく山の松葉につもる雪とたにきえにし人をおもは

ましかは うら山しくぞ又もふりそふや

一 年かへりてはかほるの御いとまも大やけ事しけるへけ

れはとしのうちに見まいり給はんとて宇治へ」 おはした

り はるけき山みちをわけいらたまへる心ざしのかたしけ

なければれいならずあね君はみいれ給てすみそめならぬ御

ひおけものゝ中よりさがし出ておましなとも引つくるひて

はつかしけれどれいものごしにて御物かたりきこえ給ふ

かほるはかやうにうとくてはやむましくおほせども心はつ

かしき御ありさまなれはうちいて給ふ事はなし にほふみ

やのあなかちにゆかしがり申給へはうはそくの宮の御ゆい

こんにも心にかけてはからひきこゆべきくおほせられしか

はともかくもうけ給て」 しるべ申へしにほふ宮へ御返事 17ウ

はいつれの御かたに申給らんととひ申給へは

あね君 雪ふかき山のかけはし君ならで又ふみかよふあとを

みぬかな と物に書つけてさしたし給へは御物あらか
ひよとて

かほる つらとちこまふみしたく山川をしるべしがてらま

つやわたらむ うはそくの住給し御かたみめぐり給へは

ゆかなともとりはらはれたれば

かほる たちよらむかけとたのみししるかもとむなしきとこ

となりけるかな 雪きえにつみ」 たるわらひせりな

と人のかたよりたてまつりたればこみやの御事を

あね君 君かおるみねのわらひとみましかは春のしるしもし

られやせまし

中の君 雪きゆるみぎはのせりもたがためにつみかはやさん

おやなしにして

一 としかへりぬ いのちはかきりあれはしなれぬもあさま

しとのみひるよもなくてあかしくらし給ふ にほふみやよ

りはたえず御文あり こぞのはつせまうての中やとの事を

おほしいてゝ」

宮より つてにみし宿のさくらをこの春はかすみへたてす折
てかさゝん

18ウ

御返 いづことかたつねておらむすみそめにかすみこめた

る宿のさくらを かほるにはかやうにうとくしくはな

きをわれをはなを思へたて給とうらめしくおほしけるとぞ

以上廿一首

三 総 角

一 あまたとしみゝなれ給し風のをともこの秋はいと物かな

しうて御はての事いそかせたまふ さるへき事はかほるよ

りあしやりぞとりもちて」 つかふまつりける ひめ君た

ちはたゝほとけの御かさりなとはかなき事をいとなみ給も

いとあはれにかほるのよそくの御うしろみなからましか

はとみゆ かほるもおはしまして経ほとけあるへき事とも

かきいたしをきてたまふ ひめ君たちのむすひたまふみや

うかうのいとの木張のほころびよりもりてたりのけしき

みゆればたたりとはいと さならんとおほして

かほる あけまきになかき契をむすひこめておなし心により

もあはなん とあり れいの」 事とむつかしけれと御
返り

19ウ

あね君 ぬきもあへずもろきなみたの玉の緒になかき契をい
かゝむすはん とあるをかほるはあはずはなにをとうら
めしけにおほしたり

引歌 しろいとをかなたにこなたによりかけてあはずはなにを玉のをにせむと
云歌の心也

ほとけの御前にみあかしの火かゝげてもやのみすよりに
かほるは御しとねまいらせであね君のもやのみすにひやう
ふそへて木張たてゝ御たいめんあり やふゝ物うらみか
ちになり給へるをむつか しくうるさくおほせとなたら
かにあひしらひたまふ こよひはすこしけちかくはいより
て月ころの心のほと御ものかたりあり いまた色かはりた
る御袖をいとはしたなくちおしくおほしてもてはなれて
つれなきをかほるはいつまでもうちとけ給はんをまちきこ
えんときこえてとを山鳥にてあかし給ふ には鳥もいつく
にかあらむほのかにをとなふに京おもひ出らる

かほる 山里のあはれしらるゝこゑにりとりあつめたるあ

さほらげかな 御返

あね君 鳥の声もきこえぬ山と思しを世のうき事はたつねき

にけり

20ウ

一 かやうにやうゝなれゆき給へはあね君の御心にふさは
しからぬ事なりはかなき世につみふかゝらで我か身はかく
てすくしてんわれよりはさかりにかたちもうつくしけなる
中の君をかほるの御心にさもとおほしめさはゆつりきこえ
てわれはおとなゝしくうしろみして心のかきりかしつき
てもてなしきこえんとおほしよりておりゝほのめかし給
へとかほるはおなし事といひながら中の君にはうつ ろ
はじとふかくおもひたち給へり うはそくの御一めくりも
すきてのかれ所もなくなりぬ いつもしかかほるおはして
とまりつゝかのおい人をかたらひて木張のうちへいりおは
しませはあね君ふときゝ付てやはらかなる御ぞはかりきて
すべりかくれ給ぬ かほるはあね君のひとりふし給へると
おほすにあらぬ人なれはいと心やましくうらめしけれと
中この君のなに心もなくてあきれまどひたるも心くるしけれ
はれいの御そひふしはかりにてなたらかにかたらひてうと
くてあかし給へり あねぎみ づらき人の御心みならひ 給ふなよ
となさけゝしくかたらひをき給へとも中の君はあね君を
づらしとおほしける 夜ふかくいて給ふ かのふる人ま

21ウ

いりたるにあね君のあさましき御心のほとをかたりをきて
かへり給ぬ あね君はむねつふれていかならむと思給ふに
こうてうの御文あり れいならすうれしくてあね君み給へ
は八月すゑなるにかたえいとくもみちてかたえは秋のけ
しきもしらすかほなる枝に付給へり
あをかりし也 かやて也

かはる おなしえをわきてそめける山姫にいつれかふかき色

ととはよや この御文のけしきは」そこはかとなくま
22オ

きはらしてやむへきなめりと心くるしくみ給へとも返事か
き給へとゆづらむもあいなければかきにくくおほせときこ
え給

あね君 山びめのそむる心はわかねともうつろふかたやふか
きなるらむ かほるみ給てさすかにうらみ所ありてしな
し給へるをにくみはつましくおほす

一 かほるはあり明の月おかしきあけほのにはふみやへまい
り給へれはおもひもしるく宮はおきおはしましけり れ
いのすきくしき御物かたりいてきてはまつうぢの事をみ
やは御心に入てかほるをかたらひ給へ」はかほるもした
にかまへ給事あり あね君のいもうとをゆつり給がうらめ
22ウ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

しきに此いもうと君をみちしるへしてにほふにひきつけた
てまつらむとおもひより給へはれいよりもあるへかしく宇
治のありさまにほふにかたり給てにほふは花心におはしま
せは中の君に物おもはせん事いとおしきとの給へは宮はよ
しみたまへとて

にはふをみなへしさける大のをふせきつゝ心せはくやしめ
をゆふらむ とたはふれ給

かはる 霧ふかきあしたの原の女郎花心をよせてみる人そみ
る かやうにいひあはせて又の夜は」にほふ宮とひと
23オ

つ車にて宇治へおはしたり 宮をはかくしをきてわれひと
りとみせ給へはおい人ともはいかならむとおもふにかほる
人をめしよせてひとよのやうにみちびけとたのみ給ふ 御
いらへ申てあね君にそのよし申せはされはよおもひうつり
けりと心やすくおほすにかほるは宮にあんないをしへきこ
え給ふ かしこのひやうふのもとにてあふきをならし給へ
といひをきてかほるはあね君のかたへ物ごしいさゝか申
へき事ありすこしいで給へと人してきこえ給ふむけにうつ
るふさまをいはむとてやかやうにのた」まふらんにくか
23ウ

らすあひしらひて夜ふけぬさきにとおほしてれいのおまし
所にて物ごしにいざり出給へり かほるしやうしのひまよ
り手をさしいれて御袖を引よせていみしくうらみ給ふ い
とむつかしき世かなとおもへどこしらへやらんとおほして
中の君をこととおもふまじきさまねんころにかたらひ給
ふ心はえあはれにおほゆ 宮にはふはをしへ給し所によりてあふ
きをならし給へはふる人たちはうたかひなきかほるとおも
ひて心やすくみちひきつ さきくもなれにける道のしる
へをお」かしとおほす 夜ふけてあね君ににほふをしる 中の君へ
へ申たるよしかたりいたし給へり あね君いますこしあさ
ましくおとろかれ給ふ かくさまくにもとはし給事我か
身ともいふかひなくなりはてたるゆへなりと心うきに物
もいはれ給はず うはそくの宮のいまはとて山にいり給し
時の御こと葉をおもひいつるにもおちとまる身ともをくち
おしく水のをとにも涙なかれそふ心ちしてこよひもとを山
鳥にてさすかにいりははてすしてなげきかちにあかし給を かほる
あはれにおほす 宇治に匂も薫もわかぬ契と云は是也又浮船の巻あり」
かほる するべせしわれやかへりてまとふへき心もゆかぬし

24ウ

のゝめの道 御返

あね君 かたくにくらす心をおもひやれ人やりならぬみち
にまとはゝ

一 宮はおもひしよりもちかまさりして中の君を御心さしあ
るへし こうてうの御文に 中の君にははふもかほるもわ
きかたくあやしとおほしけり

宮 よのつねにおもひやすらん露ふかき道のさゝ原わきて
きぬるも 中の君はよろつにあね君をうしろめたくつら
しとおほしたるもことほりなり あね君は又しらすりしき

まをさたかにもえいひ」 あきらめ給はてかたみにそむき
くも也 くるれはいかゝはせむほいならざりし事とておろ
かなるへき事ならねは御ぐしかきなてつくりひきこえ給ふ

に中の君いたくなき給ふをあね君もことほりとおほせとた
ゝいまかくさまくにも思みたるへき事とは思よらさりき

これやけにのかれぬ御ちきりなりけん すこし心しつまり
なんにしらぬ事のよしをもきこえんわれをうしとなおもひ

給そつみもこそえたまへとの給 中の君はけにあしかれと
おほすへき事にはあらねど身の人わらはれにてのちく

御心を」 つくすへき事にやとおもひ給ふかなしきなる

25ウ

へし にはふ宮は京より宇治へはるけき中みちをいそぎお
はしたるもうれしきわさなりけり 宮はたわやすくかよひ
こざらん事のわりなさをいまよりおほしなやむは御心さし
おろかならぬなり

一 かほるよりは人／＼のしやうそくうへわらはなとのため
を御は、入道の宮にもきこえ給ておほくたてまつり給ふ
又三日の夜は人／＼にたまはずへきろくなとまでその御よ
をるをも奉給 ひめ君たちのをほ二くたりいときよらにて
はこもふくろもことなりけり」

かほる さよ衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはか
けずしもあらじ といひおとし給へり あね君はけにこ
なたかなたゆかしけなきを心やましくおほす

あね君 へたてなき心ばかりはかよふともなれし袖とはかけ
じとそおもふ 三日にあたる夜はきさいのみやいみしく
にはふみやをいましめ給ふ 今上うへのきこしめしてはみつか
らのいふかひなきとぞおほされん心にまかせてさとのし給
ふがあしき事なりしのひありきはかろ／＼しき御名もたち
なんとむつかり給 かほるまいり給てこよひはかりの御つ

26オ

みにはかはりき」 こえむと宇治へいだしたて給へり 宮
はおほしわひてうちへはふみを奉給しにかやうにかほるち
からをそへ給へはうれしくてたゞふけにふけにける夜なれ
はこわたの山に馬はいかゝとて御むまにてそいて給 ひめ
君たちはおはすまじき御文をいみしく心もたなくおほしつ
るに夜るふけてあらましき風のきはひにしのひいり給へる
もあさからすおほししる しやうしみもいさゝかうちなひ
きておもひしり給へし 中／＼みなれぬる中納言のはつか
しけさよりはとにほふにはうちとけておほさるゝもざれた
る御心かな 宮は」 ありがたかりし御いとまの事かたり
給て

27オ

宮 中たえん物ならなくにはしびめのかた敷袖や夜半にぬ
らさむ けさはすこし日のさしいつるほとにて給ふ
中の君の御かたちのさかりにうつくしうらうたけにもてな
しもたらいてけたかくおほするを宮は我が御はらからのみ
やたちをたくひあらしとみ給しにかゝる人もありけりと心
まさりしたまふ 中の君もことにはいねどものあはれな
るけしきあさからすうつくし

御返 たえせじの我がたのめにや宇治はしのはるけき中
をまちわたるへき かくてのちつねに」 はえまきれあ 27ウ
りき給はねはいとまちとを也 御文は日に二たひ三たひな
とまいれはおろかにはあらぬなめりと見給物からあね君は
心つくしにもある哉かゝる事みじとおもひし物を身にまさ
りて心くるしとおもひみたれ給

一 なか月十日のほとにかほるとうちつれておはしたり
かはる さかしら人のそひたまへるをあねみやなまわつらはしう
おほせとやうくかほるの御心も見しりてあはくしくう
しるめたき人にはあらざりけりとみ給へはなつかしうはあ
ひしらひ給へとしやうしのかためは」 いとつらししゐて 28オ
やふらんはうき事におはしたれば御心にしたかひ給ふほと
にこよひもれいのとを山鳥にて明給 引歌 あし引のとを
山鳥のしたりおのなかくしくや恋わたるへきと云歌の心
也

一 中の君はかやうにたまさかにたいめんし給ときほふ宮
のいひしらぬこと葉をつくし行すゑかねてたのめ給ふに心
やすくまぢとをなるもわりなきさはりこそはおはすらめと

おもひなをす心ぞつねにそひたまふ あね君はひとへに心
いらくしき也
いられしてまちかねおもひみたれ給に心ちもいとくるしく
心ほそく」 おほす うちほへなやみたまふ

一 にはふ宮はせめておほしわひてもみち見に宇治へ出たち
給ふ 十月也 これを紅葉の会とも又あじろの会とも云 宇治に紅葉のかざり舟もみちをふきたる舟などあるはこの時なるし
ふみの道の人をもあまためしぐして詩つくりたまふ かほ
るとにはふ宮とはしたの御心にひめ君たちの御かたへ夜ふ
けてもおはしまさんと心したまへり かほるよりさる心し
給へ時雨のまきれにはみあらはしきこゆる人もあるへしと
かねて宇治へ御文ありしかはみすかけかへやり水のくち
葉」 かきあらためなとして心まぢきこえ給ふにあかしの
中宮より事くしき人をおほくたてまつり給へればかる
くしくはえもてなし給はで宮はいかゝせむと御心つくし
におほえたまふ 人くは心ゆきたる御あそひなれど宮の
御心はあふみのうみの心ちしてをちかた人のうらみいかに
とおほさる

一 いとくしく夕きりのおとをは宮はなまむつかしき人に
おもひ給ふにその御ちやくしゑもんのかみを御門より御む
今上

かへにまいらせ給へり 事くしきすいじんぐしてまいり
給へればよろつげうもなく」 なりにけり 明ぬれば帰り
給ふ おはしましたる日の暮はとに宇治川をもみちふきたる舟はしやうし
み(旁記「宮」)のめしたり そのほかふねあまたして色くの楽
をそつしてあそひたまふ

29ウ

一 このときをあじろの会といふは人くこの比こそあしろ
をは御らんせめときゆ 人くは木の葉にかきまぜても
てあそふ これをしも人などはめつらしき事にしたりこの
事にあちす

これよりはかに事くしき説はあしろになし なにかひをむしにあらそふ心
にてあしろにもよらんとそきすてたまふとはいせんの事也 かほる大將の御
しやうそくにかたりのなをしきぬきをわざとぬわせてめして宇治へおはし
たりしを御じやうそくを略したればそく也 かほるの御心いつもほとけの
又ぶゆうはかりとも
道にすゝみ給へればひをむしにあらそふとはあり ひをむしともへち也
ふゆうと云むしのおしたむまれて」夕しすることくひをむしのもろし
そのゆへあらそふ也 ひをむしは つるてに記すことくひのときはあらぬ事
也あらそふ也 又一説ひをむしはふゆうの事也 かほるのあたし身にた
とへ給へる

30オ

一 御歌ともからののはほんになし 大和 やまとのは

唐 頭の中將 いつそやも花のたよりにひとめみし木のもときへ
や秋はさひしき あるしかたにて
かほる さくらこそおもひしらすれさきにはふ花も紅葉もつ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

ねならぬ世を この歌はいつれもこそその春いまたうはそ
くいきておはせしとき初瀬まうての中宿のたよりにみたて
まつりにことしはおはしまさぬあはれをいへり いつそ
やといふはこそぞの春也」

30ウ

衛門の督 いづこより秋は行けんおく山の紅葉のかけはずき
うきものを

宮の大夫 みし人もなき山さとの岩かきに心なかくもはへる

くすかな

句宮 秋はてゝさひしきまざる木のもとをふきなすくしそ
みねの松風 とていといたふなみたくみたまへるを中の
君の事はのくしる人ありておろかならず思給ふと心くる
しくなん

一 いたつらに帰給へはみな御心の中はむせひたり まして
姫君たちの御心はかすならましかはなにしにかうち」す
き給はんとかなしくて御さきのことゑのとをくなるまゝいみ
しう思みたれたまふ このときの事によりあね君の御なや
みおもくなりてむげに物もまいらすよはりゆき給ふ かほ
る大將このよしきゝ給ていそきおはして御いのりいかめし

31オ

うくはたてぐはんなどもおとろくしくのゝしり給ふ かね君はいきよとおほしたるもさすかにあはれなれともなからへはかならずあはれとおもふ人の心もつらくなるへきわさなり おとこいふ物はそらごとをよくいふ物也 おもはぬ人をもおもふよしにこそいふなれいのちもしなからふへくともさまを」 かへて心なかくむすひてんとおもひ給

31ウ

へはかゝるつゐてにしなはやとそおほしける 中の君の御ひるねしておとろき給へる御かほのいとうつくしくにはほひたるをいさゝか物おもふへき人ともみえ給はぬにわれにさへをくれていかにたよりなくなけき給はんといとおしくおほす 中の君はうはそくの宮のゆめにみえ給しいにしへの御さまにて物おもはしげにこのあたりにほのめき給しとかたりてふたりなからいみしくなきたまふ この比あけくれ思いてきこゆればほのめきもやおほすらむ つみふかきそこにはよもしつみ給はじ」 おほすらむ所にむかへとり給

32オ

おなしさまにきこえ給へわれなくなりなほにほふ宮よりなこりなきかたにもてなす人もあるへき世也 この宮のたまさかにもをとつれ給はゝあなつる人はあらしとおもへはつらきながらあなたのまれ侍る あすしらぬいのちのさすかにおしきもたがためそやとて御となあふらちかくめしよせてみた」 まふ いとおほくかきつゝけたまへるをいかてかく口なれ給けんとおもふもうらめし

32ウ

宮 なかむるはおなし雲井をいかなれはおほつかなさをそふるしくれぞ

中の君 あられふるみやまのさとはあさ夕になかむる空もかきくらしつゝ かくのたまへともさはりおほみなるほとに宮はいとゞ待とをになり給へり にほふうちにのみをき奉給へははかなき女房などに御らんしつきてなくさみ給ふ 御あねのあかしの一品の宮の御かたにて絵とも見たまふになりひらかいもうとに」 きんをしへたるゑを見給て

33オ

宮 わかくさをねみむ物とおもほねどむすはれたる心ちこそすれ このゑをすこしこひ申て宇治へたてまつり給へり 中の君事にふれて恋しくおほせどむかへとり給へき所も

さすかになく中くたかき人の御身はくるしかりけり

一 あね君はたのもしけなくなり給へはひたふるにかほるは
宇治にこもりおはしてなげき給ふ うとくて過にし契はう
らめしけれとも御心ざまのたをやかになさけふかきをみる
まゝにこれをいかにしてかけとゝ」 めむと思まどひ給

33ウ

ふ あしやりも御いのりにありてよひのほとはかほると御
物かたり申てうはそくのさいつころゆめにみえ給て御つみ
すこしありすゝむるわさをせよとみえ給しほとにじやう
ふきやうをなんつがせ侍る 常不経也 ほか(か；セケチ)けきや
う七の巻にしやうふきやう品ありう
をさせたるにやとわたくしに記す

このおこなひ人ともこのわたり京のかたまでありきてあか
つきの嵐にわびてあしやりのあたりをたつねてこれへきて
中もんのもとにていみしくたうとく つぐ ゑかうのす
ゑつかたの心ばえあはれなり

34オ

かほる 霜さゆるみきはちとりうちわひてなくねかなしき
あさはらけかな 木張のうしろになかの君ゐ給て弃の君
して

御返 あかつきの霜うちはらひなくちとり物おもふ人の心

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

をやしる 十一月につゐにかくれ給ぬ かほるはあしず

りといふ物をしておしくかなしきに人めもおほえ給はざり
けり かくなからむしのからのやうにてみるわざもかなと
おほす さくりもよゝとなき給ふとあるはしやくりとよむへしよゝとはお
ほき事也 かほるは大やけわたたくし御いとまのよしにて御いみにこ
もり給ふ

34ウ

一 かほるのおはしませはまいらぬ人なし 御あとに念仏そ
うおほくて宇治にさひしさはなし とよのあかりはけふそ
かしとおほして

かほる かきくもり日影もみえぬおく山に心をくらす比にも
あるかな なげきしつみておはしまして

同 くれなるに落るなみたのかひなきはかたみの色をそめ
ぬなりけり

同 をくれじと空行月をしたふかなつゐにすむへきこの世
ならねは

同 恋わひてしぬるくすりのゆかしきに雪の」 山にや跡 傷

35オ

をけなまし きえな かほるの御心になかばなりけんげをし
へんおにもかなことつけて身をもなげんとおほすぞ心きた
なきひじり心なりけるとは

せつせむとうじ(旁記「雲仙童子」)の御時諸行無常是生滅法と聞てのこ
りをねかひ給し時谷のそこにやしや(旁記「夜叉」)ありて我に御身をた
ひ給へとやくそくしてのこり生滅々已寂滅為樂を申たり 其時童子木をき
さみて(旁記「いまのそとは是也」)両心あれ諸行無常の文をあらふ事な
かれこけ心あれ生滅々已の文をうつまざれとゆびのちをもつて書付てたて
きてて谷のそこへとび給しをやしや(旁記「けを敷」)をしへんおにもが
なとかほるの給へり このとうじをは衣にうけとめておにはくわざりけ
れはかほるを心ぎたなきひじり心と云(是は祐倫かわたくしりのりこう也
後)に御覽しあはせて自尽時恐給へし

35ウ

一 雪ふりあれてさひしきあかつき人のこゑあまたして馬に
てにはふ宮よもすから雪にまどはされておはしましたり

月比のうらみもとけぬへし されと中の君は人のおもふら
ん事もはつかしくこの御事によりおほくは御やまひもおも
くなりしをおほしめすに心うき御ゆかりと思しみて御たい
めんなし ものこしにてのたまふ事をきゝ給ふはかりなり
しかはかほるはいとゆゝしき御事也 なみくの御事なら
すかたしけなし いまもむかしも心うき 御心と申給へ
ともいとゝはつかしくて御たいめんなし

36オ

中の宮 きしかたも思いつるもはかなきに行すゑかけてなを
たのめとや とほのかにのたまふ 中くいふせく心も
となし

にはふ 行すゑをみじかき物とおもひなはめのまへにたにそ

むかさらなむ ふた夜とゝまり給しかとも御たいめんなか
りけり

一 宮はかほるをとふらひ給ふにいみしくあをみやせてかほ
がはりしたるもいときよけになまめかしさまざりたれば宮
は我が御心ならひに女の心あらんはおもひ つきぬへき
人かなとあやうくおほしてみやこへむかへてんとおほすに
あかしの中宮もかやうにかほるもなけき給へはたれもおろ
かならずおほすへき事なり二条の院のにしのたいへむかへ
とり申給へとゆるしきこえ給 いたうれしとおほして
人くわらはなともとめ給へと宇治へ御文ありけり
以上三十一首

36ウ

四 早 蕨

一 蕨 やぶしわかねは春の光をみたまふにも中君はあね君の御
事のみ涙のいとまくなけれ給ふ 京より人のきかよふ
たよりにきゝたまふに かほるもあたらしき年ともなく
いやめになりておはしますときゝ給にけにあさからぬ御心
なりけりといとおろかならず思きこえたまふ 京へむかへ

37オ

られ給ふ事かほるはきゝ給ふいとらやまし われこそ人
よりさきにあね君をわたしきこえんとおもひしをさらは又
この中の君をのたまひしまゝみたてまつらましかはいまは
おはせぬ御あとのにも一しほかたみにみたてまつりてまし
ととにかくにくやしき事やらんかたなし されどいろにも
いたし給はず その世の事はわすれにけりとおもふやうに
すぐ」よかにて京へ御わたりの人へくしやうそく又と
まる人へくしやうへかの弁もあまになりぬれば弁のあま君と
のゐ人などがたゝすまひまで我かみしやうそのわたりにお
ほければあづかりともにおほせあづけり

37ウ

一 むかいの寺のあしやりはりつしになりぬ そのかたより
中の君へせうそこ申たり つくくしわらひおかしきひけ
こに入てこれはわらはへのくやうして侍るはつをなりとて
うたはわざとかましく引へたてゝぞかきたる

律師 君にとてあまたの春をつみしかはおりをわすれぬは
つわらひ也 大事とおもひめぐらして」 よみいたしつ
らんとおほせは歌のさまもあはれにて

38オ

御返 この春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみ

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下) (今井)

ねのさはらひ

一 かほるはにほふ宮へしめやかなる夕暮にまいいり給へり
宮は御心よせなる梅のかほりをめでゝおはしますほとな
り かほるしつえをおし折てまいいり給えは

にはふ宮 おる人の心にかよふ花なれや色にはいてずしたに

にはへる 御返

かほる みる人にかことよせける花のえを心してこそおるへ
かりけれ あね君にうとくて過にし事なと又たれにかう

れへんとおほして宮にこまや」 かにかたりきこえ給 い

38ウ

でさりともうとくでははてじとのこりおほくとひなし給そ
わりなかりける されとうきもつらきも心にわきて人のう
への事にさへ御そももしほるはかりになりてかひくしく
そあひしらひ給ける ざと吹いるゝ風におほとなあふらも
きえつゝやみはあやなきたとくしさをなれどかたみにきゝ
さし給べきやうもなき御ものかたりをえはるけやり給はず
はるけやらぬとははれやらぬ心也

引歌 春の夜のやみはあやなしむめの花色こそみえねかや
はかくるゝと云心也

一 あね君の御ぶく過ぬれは御衣がへの御しやうそく」 中 39オ

の君へたてまつり給ふとて

かはる はかなしやかすみの衣たちしまに花のひもとくおり

もきにけり

一 きざらきのついたち比に宮より御むかへとあれはまちか

くなりぬるに中の君は花の木のともの色づくもなこりおし

くみねのかすみのたつをみすてん事もかなしくをのがとこ

よにたにあらぬすまゐにていかならんとおほす 二条の院はに
はふ宮の御い

へなれは中の君のためはをの あしたとく也
がとよにてはあるましき也

あさつてわたり給はんとてのつとめてかはる宇治へおはし

たり 中の君はうちみたまふまゝにいとゝ」 あね君の御 39ウ

事思いで給 かはる かたみにあはれにたまらうともたまひつる

事もなし うちながめておはします御まへのこうはいの色 る

つさわたりたるにほひもことなるをあね君のつれくのみま

きはらしにも世のうきつまにもてあそひ給し物をと御心

あまりて

中の君 みし人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の

かぞする いふともなくほのかなるを心につけてうち

しゆして

かはる 袖ふれしむめはかはらぬながめてねこめうつろふ

やどやことなるねなからの心也 ひきわかれて都へうつり給を也

まらうとの御にほひも橋ならねとむかしおもひいつる」

つま也 春やむかしのと心をまとはし給ふどちの御物かた

りに事もゆかすけふはこといみしてとてかはるたち給給 (ママ)

一 中の君はよろつにもよほさるゝ御涙の川にあすのわたり

もおほえたまはすさりけり かの弁のあまはあね君の御か

たなりしかはそれゆへにさまをもやつしたり たちよりか

ほるとふらひ給につけてなく事かきりなし

弁 さきにたつ泪の川に身をなけは人にをくれぬいのちな

らまし 御返

かはる 身をなけむ涙の川にしつみても恋しき」 せゝはわ

すれしもせじ 御ともにまいる人ゝは物そめいそく

わろきかたちをもつくるひてうしろではしらすかほにひた

いかみを引かけて色とりたり

弁の尼公 人はみないそきたちぬる袖のうらにひとりもしほ

をたるゝ海士かな うれへかけて申せはうちなきて

中の君 しほたるゝあまの衣にことなれやうきたる浪にぬ
るゝ我か袖 にほふより御むかへの人ゝいかめしう又
かほるよりもごぜんの人ゝ御車なとたてまつり給ふ御と
もにて御車に乗る

大輔の君 ありふれはうれしき瀬にもあひけるを身を宇治川
になげてましかは

いま一人 すきにしか恋しき事もわすれねど今日はたまづも
ゆく心かな 中の君は行す急いかならむとのみなかめら
れて 二月七日の夜也

中の君 なかむれはみねより出て行月も世にすみわひて山に
こそいれ かほるはにはほふみやの御車のもとに身つから
いてゝおろしきこえなへてならすもてなし給をきゝ給にも
うらやましくて

かほる しなてるやにほの水うみこく舟のまほならねともあ
ひみし物をとそいひくたさまほしかりける

以上十五首 又貞鳥とも云

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

41ウ

五宿 木

一 この比藤壺の女御ときこゆるは故左大臣の御むすめなり
いま^{今上}の御門また春宮ときこえし時人よりさきにまいり給に
しかとあかしの中宮にはこゝら宮たちおとなひ給へはおさ
れ給 女二の宮とてひめみや一人もち給へりしをこの比十
四になむおはしける 御かたちもいとめやかにうつくし
くおはすればみかともらうたき事におほしたり 御もぎの
事御はゝ女御いかさまにとおほしいそきて世になききよら
をとゝのへをかせ給しをはゝ女御夏ころはか なくかく
れ給にけり 女二の宮はおさなき御心にかきりなくおほし
なけく ^{今上}うへもあはれにおほしめして御四十九日すくれは
しのひてうちへまいらせたてまつり日こというへもわたら
せ給て御琴ならはしなんともてなしきこえ給 御はゝかた
もたのもしき人もなければさりぬへきからん人にあつけを
きてみかとも御位におはしますときさためむとおほしめく
らす

一 神無月時雨うちして物あはれなる夕もこのふちつほへ
御門わたらせ給て御暮なとうたせたまふ 御門人をめして

42オ

たゝいまでんしやうにたれくかと」とはせ給にこれかれ 42つ

又中納言みなもとのあそんざふらふとそうす けんしの御子と
系図あるゆへ源

の朝臣と也
かほる
中なごんの御事也

めしよせたり とりわきおほせ事あるし

るしにとをうよりかほれるにほひよりはしめ人にすくれ給

へり 御碁のかたきにめしよせて三番にかす一つみか

まげさせ給ぬ ねたきわさかなとてよきのり物はありぬへ

けれど のり物とはかけ物
也 女二の宮也 たはやすくはえひきいづましまも

の也けふはまづこの花一えたゆるすと御せむの菊をさして

おほせらるゝ御けしきをみしり奉て菊を一枝折てまいり

て」

43オ

かほる 世のつねのかきねにほふ花ならば心のまゝに折て

みましを とそうし給ようぬあさからすめてたし

御門
今上 霜にあへずかれにしそのゝ菊なれとのこりの色はあ

せずもあらなん かやうに人つてならすほのめかし給を

きくくゝなをむかしの事のわすられはこそあらめ宇治へ

時くわたりてみ給も中く心つくしなれはこのしんてん

をあしやりの寺のかたはらにみたうにつくらむとおほして

あしやりめしてみたういくつらうともそう坊いくつと書い

てさせ給へれば僧都いとありかたき御事也第一にこのしん

てんを」 御らんするたひにおほしいつるたいくしき御 退也 43つ

事也 むかしわかれをかなしみてかはねをつゝみてふくろ

に入てくひにかけてとし月をめぐりし人もほとけのはうへ

んによりてつるにかはねのふくろをすてゝまことの道にい

り侍りしとて物よくしりたるたくみ二三人を給ていそきて

つくらせんと申き

一 秋になりゆくまゝに物わすれせすかなし こそ秋まではあ
ね君おほせし事也

かれたるせんさいの中にあさかほのこれかれにはいまとは

れてはほひもことにかはれるをもらせ給てあくるまさきて

と口すさみ給」

かほる けさのまの色にやめてんをく露のきえぬにかゝる花

とみるく

一 すくに中の君のすみたまふ二条の院にまいり給へり

宮はおはしまさぬほとにてにしのたいにて御物かたりのほ にはふ
中の君

とにありつるあさかほをあふきにきて見給ふほともなく

あかみもてゆけは中く色あひおかしくみゆ やをら木張

のうちへさしいれて

44オ

かほる よそへてぞみるへかりけるしら露のちきりかをきし
あさかほの花 御返

中の君 きえぬまにかれぬる花のはかなさにをくるゝ露はな
ぞぞまされる おり／＼くやくしくあね君なりまさるよしをほ
44ツ

のめかし給ふ 中の君の御こゑけはひもふたりならひ給し
ほとはにたりともおほえ給はさりしをいまはあさましきま
てたゝそれかとおもふやうにに給へり これゆへにむかしにか
よふ中の君とけいつにあ
り 又宇治をはなれみやこへ出給しゆへ古郷はなるゝ中の君ともいへり い
つれも宇治に付合あり

一 夕霧は三条の上とこれみつのむすめ藤ないしの介とふた

りの御はらに男女の御子いかめしうおほくもたまへり 大
い君はあかしの中宮の御はらの春宮へまいり給ふ 二はん中の
君はやかて同御はらの二の宮へ北のかたになして六条の院
にすませ申給ふ そのほかか アマたおはする中に六の君
45オ
にあたるはかたちすくれたるをやかて御はらも同あかしの
中宮にておはすればには兵部卿の宮にむこどり申さんと
くはたて給へるを宮はしぶ／＼にて中の君に物おもはせん
事いとおしくてすまぬ給しかとこの八月十六日とさためて
にほふ宮を六条の院へおはしませせそめ給ふ にほふは一

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

条のゐんに中の君とうちかたらひておはする程也 夕霧の
大殿はこよひさへすごさん事は人わらはれなるへければ御
子の頭の中將してにほふ宮へ」

タきり 大空の月たにすめる我かやとに待よひすきてみえぬ

君かな とあれは宮はけにとこれも又いとおしくてしん

てんへわたり給て御しやうそくたてまつりかへていて給ふ

御さきのごゑのとをくなるまゝに 中の君は 御まくらもあ

まもつりするはかりにて心ほそくおもひみたれたまふ 宇

治のみ恋しくて

中の君 山里の松のかけにもかくはかり身にしむ秋の風はな

かりき 六の君の御かたちけにいみしくさかりに花やか

にておやにて心をまとはし給もことほりとみたまふ され

とらうたけなる事は中の君に」 まさるはあらしとけふは

心をとりたまふ かしこへこうてうの御文ありけり いつ

のまにいそきかき給けんとこなたのごたちはにくみきこゆ

御使ふみのゑいすぎにければはゝかるへき事もわすれて中の君の

おはするかたへ御返もてまいれり 世になきたまもかるか

づきうつもれたりとおるは御つかひのろく也 御返

457

まゝはゝの一条の宮の御手也 宮よりの歌はみえざるへし

御返 女郎花しほれぞまさるあさ露のいかにをきけるなこ

りなるらん こよひはとくいてたまふに日くらしの声を

中の君 大かたにきかまし物を日くらしのこゑうらめしき秋

のくれかな 三ヶ夜のもちひのぎし」 きなとよのつね

ならんやは わかき女房わらはへのしやうそくなともめつ

らしきはすぎてあまりひきたがへたるいてたちにもてなし

給へり 夕きりは我が方さまのさるへき人にはかほるをよ

ひたてまつり給て大みきいかめしうなん かほるは婦り給

て宮の御ともの人くゝゑいすゝみてよりふしぬらんかして

ひとりねもさひしくて御おもひ人のあぜちの君といふかた

へおはしてあかし給ふ 夜ふかくあまりいそぎ給へは

あせちの君 うちわたし世にゆるしなきせき川をみなれそめ

けん名こそおしけれ 返」

かほる ふかゝらずうへはみゆれとせき河のしたのかよひは

たゆる物かは

一 あるときかほるの中の君の御もとにて物かたりにもあね
君のわすれかたき事ヒのみの給ふ ゆつり給しまゝならは

まは中の君をかたみにもみるへかりける物をものぐるをし

くたはかりありき事のくやしきとかたり給ほとに夜もふ

けにけり 木張のうちにちかやかになれより給へはかほる

のうつりかはよのつねのたきものなどにはにずふかうしみ

とをるか也 そのときしるしのをひとほんにあるは中の君にはふのわか君
をほらみ給したをひ也 こししるしとも又しるしのをひ

とも付合あるへし」

又のあした中の君へ御文あり

かほる いたつらにわけつるみちの露しけみむかしおほゆる

秋の空かな 中の君はひとへの御ぞをもきかへなんとし

給しかともこの御うつりが心よりほかに身にしみたるをそ

のみちの人にて宮はとがめいて給へり 中の君はまことに

こそなれ給はねともあたりちかくはありしかはさのみはあ

らかひ給はぬをにはふ宮はいみしくねたくうらめしくおほ

す事かきりなし 心わけ給ふまてのほとやとて

にほふ宮 又人になれける袖のうつりかをわか身に」 しめ

てうらみつるかな 御返

中の君 みなれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけ
はなれなん にほふは心やましければかつはこしらへな

47オ

46ウ

47ウ

48オ

として三日おはするに夕露のおとゝうちよりのかへさに
御子ともおほく引ぐしてまいり給てやかて宮をも引くし申

給へは二条の院の人ノはやすげなき世やいかめしきおと

の御むかへにまいり給へるこそにくけれと申あへり か
やうにいかめしき御中に中の君は人ノのしやうそくなと

のなへばみたるをかたはらいたくおほしけり かほるは」
48ウ

いとよく心えてとりあへたるにしたかひてしろききぬあ
やなともしたにはいれかくしてきぬびつあまたかけ二条の
院へたてまつり給ふ 御れうのはことにてはかまのこしに
かほる むすひける契ことなるしたひもをたゝすちにうら

みやはする

一 かほるは宇治をひさしく見給はぬときはいとゝむかしと
をき心ちし給ておはしたり つくらるゝ寺も御らんしまい
りてほとけのかさりなどのたまふ 又弁の尼のかたへみま
はり給ふに日くれたれはとゝ まり給てよるもちかくふ
49オ
せてこそもんのかみの事もくはしくかたらせ給ふ あね君
のとし比の御ありさまよみ給し歌かたりなどもよしなから
すかたりきこゆ

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻（下）（今井）

かほる やとり木とおもひいてずはこのものとたひねもいか
にさひしからまし

弁の尼 あれはつるくちきのもとに宿木と思をきけるほとん
かなしさ 口伝 つたのもみちこたになとすこし引とらせ

てにはふの北のかたへとおほしてもたさせ給ふ このもみ
ちをまいらせてその御文に宇治の事を山さとなんと書て
寺になすよし申給ふ ことなる事なきを中の君は」 うれ
49ウ

しとおほすに宮はまるありとそきゝつらんと給もわつら
はし すこしはさやありけん 宮はひは引給ふ 中の君に
しやうの琴をひかせたてまつりていにしへ天人あまくたり
て琵琶の手をしへたりけん事にほふはのたまひてなに事も
あさくなりたる世はものうしやとて御琴をしやり

にはふ ほにいでぬ物おもふらししのすゝままねくたもとに
露しけくして 御返

中の君 秋はつるのへのけしきもしのすゝきほのめく風につ
けでこそしれ」

一 うはそくの宮には御むすめ三人とけいづあり 二人の御
うはさはかくのことしいまひとり三の君といふこの比は

50オ

たちはかりにて年比はは、君のひたちのかみか北のかたになりてくたりしに三の君もくしてひたちへ下てはたちはかりにてこの比京へのほりて御あねの中の君にもかくと申いれては、君もくしてまいりたり。かたち心はえもよくあね君にに給へれば中の君の御心にかほるのいにしへのみ恋かなしみてわれをかたみとのたまふもわつらはしきにかはかりおかしけにてにたる人なれば御心うつせ」かしとおほしてかほるに御たいめんのつゐてにかたり申給へり。あね君を人かたにもつくり

宇治の人かたなで物とも付合あるべし。つぐらぬ人かたなり。たゝ人かたみにつぐりてみんと也。

絵にもかきてみんとかほるのあさ夕ねがひ給へはこの三の君をたつね給へかしのたまふ

このときかねもとむるゑしとあるはわうせうくむは絵師にこがね

をあたへ給

つくるてらのほんぞんにもとかほるの給は三の

君の事也 この三の君に三ツ名付あり。六あつまやの巻のさはあつまやの君也。七うき舟の巻にはたちはなのこしまにてよみし歌

ゆへうき舟の君也。又身をなげしときこたまたにとられて宇治にすてられたりしをいつせの御ひきあはせによりてをのゝ尼君に。ひろはれひえのふもとの小野といふ所に住てまかへてむかしにかはらぬ事はすゝりにむかひて物かくのみとてあさ夕手習をせしかは巻をもひめ君をもてならひと名付たり

一 ありしきくをかけ物にて暮うち給し女二の宮を御門おもほしたちてこの巻にかほるをむことり給へり 此とき大将にまづなし給しをな

をし物と云。御かとの御むこに位あさき人はなるましき事也

しはしは藤つばへかよひまいり給しがのちにはかほるの御は、入道の宮のすみたまふ三条の宮へむかへとり申給ふ

そのとき御門女二の宮のすみ給ふふちつほにて藤の花のえむし給し也。その日の御門の御さかつきはかほるたまはり給ふ」

一 六条の院の御手つからきんのふを書給て入道の宮にまいらせられしもその日の御かざりに五よの枝に付てをかれたり。大きおとゝとりてそうし給ふ 夕きり

一 ゑもんのかみの夢につたふへきかたありといひて歌よみたりし笛もかほるの御かたへつたはりてけふぞかほるかきりなきねをふき給ける。いつたはりたるさはなし

その日からの歌詩つくられたる事也。やまと歌は御門の御かさしの藤折て参

薫石大将 すべらぎのかさしとにおると藤の花をよはぬ枝に袖かけてけり。うけばりたるとはわれはがほ也」

よみ入しらす。万代をかけてにはほん花なればけふをもあかぬ色とこそ見れ

大納言 よのつねの色ともみえず雲井までたちのほりける藤
なみの花

詠人不知 君かためたおれる枝はむらさきの雲におとらぬ藤
なみの花 ぶんだいのもとによりてをくほとはみなした
りかほ也

一 かくてその夜女二の宮を大将のかたへむかへとり申給ふ
きしきよのつねならず 御むかへのに御車十二両にほんし
ゆの人〳乗給 みな女房也 三条の宮よりかほるいだし給ふ

女二の宮はひさしの御車にたてまつりたり ひと さいしな 52ウ

きいとげの車三 たゞのびらうげ六 びりやうけとよむへ
し そのほかの車はかすをしらす かむたちめおほくつか
ふまつり給へり

一 かほるはかくしづまりて女二の宮をみたてまつり給ふに
御かたちしめやかにうつくしうみえ給へは我が身のしゆく
せのほともくちおしからすおほしげり けいっくにひきやうしや
(旁記「飛香舎」)の
藤のえんの日女二の宮の御かたちなへてならずみえ
給ふとあるはこれなり 飛香舎ふちつほのから名也

一 かくても宇治のあねみやの事はさらにわすねはかた心
にてはてらつくる事をいそきたまふ 夏に成て川つらすゝ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下)(今井)

しからんとて宇治へわたり給へるに」この三の宮はつせ きみ
にまうて、弁の尼公のもとへ中やとりしたり ひとちより

くしてのほりたるあづま男おほくこゑうちゆかみてこしに
物ゆひ付たり ひとちとのゝひめ君の御まいりといふをか はつせへ
ほるおいやきゝし人よとおほして車よりをるゝをこしもい

たきまでたちすくみてのそき給し也 けにうちみたまふに
やかてあね君の事もひいてらるゝやうにてぞにたりける
かほるはいまもはいよりてこの世におはしける物をといは こ

まほしくあはれなり くりやうの物くた物まいらせたれと
くるしけにて」そびふしてみもいれす 女房ともよしあ
るあまたそひていつみ川のふなわたりいとおそろしかりし

といへはいまひとりはおつまちのありきをおもへはなにか
おそろしからんといひけり あま君して
かほる かほ鳥のこゑも聞しにかよふやとしけみを分てけふ

ぞたつぬる とのたまへはうちにいりてつたへけるとな
ん

以上廿四首

はしひめよりやとり木まで五帖分この内にあり」

光源氏一部譚第十(外題)

宇治十帖之内

六 吾妻屋

七 浮船

八 蜻蛉

九 手習

十 夢浮橋(扉裏)

宇治之六 吾妻屋

一 つくは山をわけみまほしき御心かはるの事はありなからあなかちに

葉山のしげりまで思いらんも人きゝいかゝとおほすとはか

ほる大将の三のちはてならひの君の事をしあんしたまふ也 ひたちのかみ

がたよりにつくは山と引たり

引歌 つくは山葉山しげやましけゝれとおもひいるにもは

さはらざりけり と云歌の心也

一 三のちはてならひの君のまゝちゝのひたちのさきの守は人からはすぢも

いやしからぬ人なるをあつまのかたにひさしくすみなれて

物いふことはなともだみてやさしきかたはとをくてゆみをも

(表紙)

1ウ

なんよく引ける だみたるとはてうじ(旁記「調字」つかふ也)

一 ひたちのかみがむこの中将とけいづにあるはこの巻事

也 むかしの大将の子に中将といふ人あり ひたちのかみ

かどくにめてゝふけりて也 むこにならんといひたり 北の

かたとりよりて三の君にむこどらんとするにひたちのかみ

のまゝむすめときゝてかほ中将のいろそんじてもつはらかたち

よき女のこのみもなしたゝうしろみにあらまほしきと申う

どしていはせたり ひたちのかみあくまでひないなびたる人に

てさらはとて三の君とおなじはらのいもうとのかしかたる

めのわらははにむこどりたり かしかたるとは花 三の君にやく

そくしたればは はゝ君 いつしかかしらあらはせなとしてみるに

よのつねのてん上人にぐせん事はおしくあたらしき三の君

なるにかゝる事いできたればすむへきかたなともせばくて

こゝかしてほとりばみたる所に三の君をすません事はいと

ゝむねいたくねたければ三の君をくそくして中の君にわひ

事申てしはしのほど御あねのかたにあづけ申たり そのと

き中の君の御もとにひたち三の君のはゝの北のかたゐてにほふみやをも

かほる大将をものそきてみたり けたかくうつくしげにて

2オ

我かまゝこひたちのちやくしなどは御あたりへもより」

3 オ

つかず ましてむこの中将は御ともにあるをみるも人かす

ならず はゝきみおもふやうかほる大將をにけなき事とお

もひしかとも心はたかふつかふへき物也 ひこぼしはかり

にてもかゝらん人の御あたりにこそあらめ我かひめ君はか

やうのめてたき人にさしならびたりともみくるしくはあら

じなとゝ心おごりしけり

一 かゝるほとにほふの宮はよのつねならすいろめかしき

人にておはしませはいままいりなともわつらはしく心しつ

かならねはその御心を中の君心え給てこの三の君の御かた

をは人みぬ所にこしらへてすませたまふ 宮の」 おはし

まさぬひまには夜るも御そばにふせてこうばそくの御あり

さまなとこまかにかたり給 かたちも心はえもにくみ所な

ければなつかしくもてなし給へり

一 中の君にいせんのとりのきの巻に二月一日にわかきみを

うみ給へり にほふみやのおとなひたまへるはしめなれは

今上の御門もあかしの中宮も御うふやしなひいかめしく御

はかしもまいりたり

一 大將の君はこの御うふやしなひも人にすくれてこもちの

おまへのつかさね卅 こもちの御前と
は中の君の事也 ちこの御ぞ五つかさ

ねとはいまむまれたまふわか君の事也」 御むつきとはい

まのひたしといふ物也 きぬあやなどにてあるへし

いろくにはあるへからすしろき一色なるへし

一 五十日 いかのもちゐの御いそきはかほる大將し給 まいりぞめ也

いかは五十日もゝかは百日也

一 にほふ宮にもぶすくまいらせ給ふとあり ぶじゆくと
よむべし口伝

一 いまむまれたる子をはほんにむつかしき程とあり この

わか君にかきらすいづれも同やとりのきの巻の事也

六 あつまや (細字旁注)

一 御ゆするとはゆあひ給ふ事也 中の君のゆするのまにわ

か君もね給へれはにほふ宮つれくにてかなたこなたたゝ

ずみありき給ほとに三の君のかくれてゐ給へるを見つけ給

へり ひやうふのうちへはい」 入てなのりをきかすはか

へらじとて日のくるゝまでいで給はねは三の君のめめとは

いとおそまほしき人にてがまのさうをいたしてまはりたて

まつれはいとにくくおほしてにほふ宮はこのめのとの手を
いたくつみ給 なをくしき人のけしやうずるににたりとほんにわらひ
たり なをくしきはさがりめの事也 すぐくしき同
かやうにて宮はこの三の君のけはひかたち御心にしてみてい
かなるあやまちもあるへかりしをあかしの中宮にはかにむ
ねをやみ給ふよしうちより人まいりたればそれにさはきて
事なる事なかりき

一 中の君はにほふの御心のけしからずにおはします事」
くるしく心あらん人はわれをさへうとみぬへきかなとて心
うつくしくその夜も三の君にゑなとりいてくみせてま
つり給へり されどめのときはきてひたち殿へゆきて北の
かたにこのよしつげたり 北のかた心ならひにおとろきて
よその人にこそよしともあしともおもはれぬあなおそろし
やとてくるまいてまうできて心あはたくしくして行ぬ 中
の君いとあへなしとおほしめせともえとくめ給はず
一 その比かほる大将のおはしたるに三の君このあたりにあ
るよしかたり給へは」

かほる みし人のかたしろならば身にそへて恋しきせくのな
て物にせん 川のせになかすはらへのもの事也

5 ヲ

中の君 みそぎがは瀬にいださんなで物を身にそふかけと
たれかたのまん

宇治のなで物といふはあつまやの君に付へし 又なで物にもあつまや付へ
し おなし事ながら手ならひなどはとほかるへし

一 この三の君をはくきみくしてゆきて三条わたりにされば
みたるこいゑもちたるにすゑたり とりわきたる事なき
をざればみたる也 この
いへにはなくきみにみるへきせんさいもなし あらくし
くさひしかりけり

一 北のかたもめのともこのむこの中将ゆへこそかくる」
心くるしき事もあれとにくむにあるとき心しつかにむすめ
のかたにるたれば

北のかた しめゆいし小萩かうへもまよはぬにかなる露に
うつるした葉ぞ けにといとおしくはつかしくてむこの

中将 みやきの小萩かもとしらませは露も心をわかす
ぞあらまし いかにつれくにおはすらんとて三の君へ

返しに
はく北のかたより御文あり つれくはなにかはとて

三の君 ひたふるにうれしからまし世の中にあらぬところと
おもはましかは とあれはけにいとをおしくこの御身一

6 オ

つをもてわつらふ事よとかなしくて 御返

北のかた 世の中にあらぬ所をもとめても君がさかへをみる

よしもかな といひなくさむ

一 かほる秋のはしめはいとゝ心ほそくて宇治へおはした

り もとのしんでんをはてらになしいま又あたらししくしん

てんをたて給へり とかくみめぐりやり水などあらためて

かほる たえはてぬし水になとかなき人のおも影をたにとゝ

めざりけん 弁の尼公をかたらひて三の君のすみ給所へ

かほるさきさまつかはし給へり 三の君はうはそくにはみ

えぬ御むすめなれはそなたさま ゆかしきにむかしかた

りもしつへき人のきたれはうれしくてよひいれたり

一 秋 吾妻屋 あつまやといふ事この三条のこいへよりいできた

りとなのりてかほる大将おはしたり いかにせんなんとう

ちにははつかしくいひしろふほとに雨ふりいでたりさゝの

のわたりと

引歌 くるしくもふりくる雨やみわかさきさゝののゝわた

りにいへもあらなくに と云心也 こゝの殿の人にはひた

松平文庫本『光源氏一部謡』翻刻(下) (今井)

6ウ

ちよりのほりたるあづまおとこおほくてかほるのめしたる

御車をたつみのすみのくづれあやうし かほる この人のみゝくる

まいるへくは引いれてみかどさしてよかゝる人のとも人

こそ心はうたてあれといふみなあづまこゑにてゆがみたり

かほる さしとむるむくらやしけきあつまやのあまりほと

ふるあまそゝきかな この歌ゆへにこの巻をあつま

と名付 大かたちいさき家を吾妻屋といふとみゆ これゆ

へに三の君をあつまやの君といへり その夜あつまやの君

にかほるはあひなれ給へり あかつき車にうちのせてしゝ

うの君といふ女房一人くしてあま君のりそひてかほる宇治

へおはします みちのほと弁のあま君はあやしやこあね君

の御ともにこそかやうにてもまいらんとおもひしにと」お

もふにいとかなしくてそゝるになければともなる女房いとみ

くるしくめてたきみちにかゝるむつかしき事そひたるとう

るさくおもひけり いたかき所はくるしからんとておこ

し給へり あま君のはなすゝりをきゝ給にもけにみる人は

にくからねと

かほる かたみそとみるにつけてもあさ露の所せきまてぬ

7ウ

る、袖かな おはしつきてはずこしたちのきてあはれな
き玉あねぎみの事やあまかけりてもこんれいのいか、み給らんとあはれ
なり くれぬれば月あかうさしいでたり あま君のかたよ
りくた物まいらせたる」すりのふたにしきたるかみに
物ふとなるをふつゝかと云ふつゝかにかきたるもの月かけにふとみえたり かほるめと、め
給へはくひ物いそぎにそみえける

弁の尼 やとりきは色かはりぬる秋なれどむかしおほえてす
める月かな 心はつかしくて

かほる大將 里の色もむかしなからにみし人のおもかはりせ
るねやの月影 とあるをしゝういりてかたりけるとそ
以上十一首

七 浮 船

- 一 にはふ宮なをかゆするのまに三の君み給し事也のほのかになりし夕をおほしわする、時
なく事くしききはにはあるまじげなりしを人からのまめ
やかにおかしうもありし」かなとわすれかたくおほしい9オ
つ 中の君にもはかなき事にかく物にくみし給ふとのたま
ふ おりくはありのまかほるの宇治にすゑ給ふ事也にやきこえいでましとおほせど

かりそめなれともかほるの心と、めてかくしすゑ給へる人
をくちかろく申いで、宮の御心は又き、給てもさておはす
へき人ならすいつくまてもたつねめぐらし給はんときは人
き、もあさはかなるへしとおほしねんして大かた物ねたみ
したる人になりてそおほしける

- 一 としかへりぬ 正月二日也 む月のついたちすきたる比宮は中の二条の院
におはしてわか君のとしまさり給をうつ」くしみ給ふに
ひるつかた五よりの松に付たる大きなつゝみふみにたて

いまのことくはふうせうへを色くのかみにつゝむ也
ふみをとりそへてちいさきうへ童あぶなくはしりまいりて
おんな君に奉る 宮それはいつくよりそととひ給ふにこの
子宇治よりとてたちわらひ侍しをおまへにこそとてとりて
侍る このひげこはこかねをいるどりたるこなり松もよく
にてつくりたる物そよとゑみていひつゝくれは宮もわらひ
給いでわれももてはやさんとてめしよす 中の君なにか
おんなどちの中にかきかはしたるふみをみくるし御らんせ
んとのたまふ御かほ」あかみたれば宮の御心にもしかほ
るのもとよりさりけなくしなしたるふみにやあるらん宇治
よりといふなりのもいふかしくおほしてもしそれならん時
10オ

とおほすにあやうければとみにもみ給はずうり也又ふりに山たちはなつくりてやま橋とはやまかうじ也 つらぬきそへたり いとわかやかなる女の手にて

まだふりぬ物にはあれど君がためふかき心にまつとしらなん とあり この歌の心はまたしき物なれと君かため

にまつたてまつると云心かとみゆ これはあつまやの君の宇治にかほる大將にすゑをかれてあねの中の君へとしのはしめたてまつり」 給へるせうそこなり 中の君はたれと

もあかし給はねは宮は我か御かたにおはしてつく／＼とおんしてほのかにみし人のかたよりにやとおほしよせつ

一 このふみにそひたるたてふみにはうづらわか君の御かたへまいらせ給ふとあり口伝 にはふ宮はこのふみをみ給し

より宇治のあんないきかまほしくて御殿人に大大内記なきといふはふみの道よりいてたる殿上人也この物かほるの御うし

ろみ申ものゝむこなれはこれをめしてくはしくとひ給ふにこそその秋より宇治にかほるは女をすゑ給へりとかたり申す されはこそと御心つきて」 この大なきをみちしる11オへにてかほる大將けふあすうちへはおはしますまじきひま

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻（下）（今井）

をうかゝひて御にほふむまにておはしたり あしがきをすこしこ

ほちて内にもいりてあたらしきしんでんなれはいよすもざら／＼となりてあやうけれとすこしひまあるによりての

そき給へはひともして女房とも物ぬいてよそへわたり給へきよしをくち／＼にいひあへり いとよるうへわらはのか

ほもほのかなりし夕くれにみしかほ也 あつまやの君はかいなをまくらにてそひふしたるかみのかゝりひたいつきこまかにうつくしけ也 いかほとん」 したしきにか中の君

にもよくにたり おろかにてたに月ころゆかしきとおほしける人をそれとみてはいたつらに帰給へきみやの御心には

あらぬをましてこまかにみ給ふにいかにしてかこれをわがものにはなすへきと心もあくかれてまほり給ふに物ぬふも

のをはうこんの君といふぬいさしたるものともうちかけてねふたしといふ あつまやの君もすこしおくにいらいてふし

ぬ みなしつまりぬれは宮は又せんやうもなければこのかうしを忍やかにたゝき給へはうこんあてなるしけたかきをとない也はふきと

きゝりておきて出たり」 かほるのおはしましたるとおけたかきおとない也もひて夜はふけて侍らんをと申せはまつこゝあけよとのた12オ

まふ御こゑかほるにもとよりすこしにたる御こゑをつくりにせての給へはおもひもよらすかうしをかるはなつかきかねはな

宮の御ことはにみちにていみじき事にあひたればみくるしからんそのともし火とりかくせわれきたりとて人おとろかすなどの給へはうこんあないみしやとてひを

はとりやりつ われもたちかくれてみだてまつればいとほ

そやかに木帳のうちへなれかほにいら給ふ にほふもかほ

るもわかぬちきりとは是也 いせん又あけまきの巻に中の君の御も

とへもかほるとおもへはかほるの御は

からひにほふをやりきこえ給し事あり わかぬ契二たひあるへし

一 かほるの御ふすまをたてまつれば御しやうそくぬきてう

ちふし給ぬ おんな君もごたちもかほるそとおもへり さ

てのちこそあつまやはわれなりとのたまひしか物をいふ

へきやうもなければかほるそとおもひしごたちもしりそき

てふしたれはめしよせんもかひなし いとあさましくゆめ

のやう也 御ともの人／＼はかほるのさせんをもちには

しらねは同事也 女も我か身のうさをおもふにたゝなきに

なく 宮もたまさかにたちまきれ給へき 御身ならねは

なき給事かきりなし 御ともの人きてこはつくるをうこん

13オ

はかほるの御ともとおもへり 宮はうこんをめしよせてわれなりとなりのたまふ うこんいとあさましけれともなみ／＼の人におはせねはいか申さん けふはとまるへしよろつの事いけるためにこそあれたゝいまおきてゆかはんはまことにしぬへくおほさるれば御めのとこの時かたといふをみやこにかへりて人のとはんには山寺へいてたるとこたへよとうこんしておはせつたり 二夜とまり給へはた

どしへなくなかき春の日にみれとも／＼」 あかぬ心ちし

てちきりかたらひ給ふ 時のまもみすはしぬへしとおほし

こかるゝ御ありさまを心さしふかしとはかゝる事にやと

おもひしる あやしとはおもひなからも女おもひなひきた

り 御すゝりめしを宮おかしくかきすさひ給ておとこと女

ともろ友なるゑをかき給てつねにかくてあらはやとのたま

ふにも涙おちぬ

にほふ宮 なかき世をたのめても又かなしきはたゝあすしらぬ

いのちなりけり

女 心をはなげかさらしいのちのみさためなき世とおも

はましかは かはらんをはうらめしと」 おもふへかり

14オ

13ウ

けりと見給もらうたし うらみてもなきてもけふは婦給へ
ければ袖のなかにそとゝめ給らんかし つまとのもとにも
る友にいておはしてえいでやり給はず 御どもの人こはつ
くる

宮 世にしらすまとふへきかなさきにたつ泪もみちをかき

くらしつゝ あつまやの事也

女 涙をもほとなき袖にせきかねていかてわかれをとゝむ

へき身ぞ 御むまにものり給ふましきけしきなるを人

くいとたはふれにくしとおもひてひたいそかしにいそか

したてまつればわれにもあらで「二条の院におはしましぬ

14ウ

中の君のかほる大将とひとつになりてかくし給へるもう
らめしくて契のあさからてたつねいでたるそかしとおほせ
さるゝにもむねのみふたかる つくゝとあるもいとゝお
もひまされば中の君のかたへおはしたれはいときよけにて
めつらしきかたちしてめつらしうみし人よりもこれは又け
たかくみゆるにに。るを見給もいとかなし ^{かはる} そのゝち御心
ちれいならずしてあをみおとろへ給へはいみしき御なけき
にてあめか下まつりはらへと御いのりともゝしる ^{あつまや} 女も

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下) (今井)

ゆめの心ちしてわすれかたきに宮のわれは」 いにしへみ
しかたくをもみなわすれぬへき心ちするとの給しがけに
そのゝち御なやみとて世にさばくもあさからすおもほゆ
へ

15オ

一 きさらきのはしめつかた大やけのいそかしさすきてかほ
る宇治へおはしたり 女はいかてみえたてまつらんとそら
はつかしくおそろしくおほゆるにさやかにめもとりあはせ
られす これはゑほうしなをしにてかりそめなれとみた
れたる所なく日ころのつもりをも心のとかにの給 ことに
いてゝ恋しかなしといはんよりも中くまさりて人の心を
も」しめつへきさまし給へり 身のうきふるまひきゝつけ
ておもひうとみ給はん世にいかてかなからへんとはつかし
京へむかへ給はんとしてつくらせ給ふ所の事もこまやかに
たり給てこゝよりもけちかき水に花も見たまひつへしとか
ほるのおはし。三条のみやちかければをのつからおほつか
なくもあらしなとのたまふにもきのふも宮よりの御文にぬ
すみてわたすへきところをまうけたりとのたまひおこした
りし事よきりともそなたへなひくへき事にはあらずかしと
おもふからおもかけわすれかたくて」 ともすれはなみた

16オ

のいでたつをかほるはひさしきとたえをうらむると心くる
しくてこしらへわび給へり

かほる 宇治はしのなかき契はくちせしをあやぶむかたに心
さはくな いまみ給てんとたまふ おとこは過にし
たの事をおもひ女はいまよりそひにたる身のうきさをなけ
きくはへてかたみに物おもはし

吾妻屋 たえまのみ世にはあやうきうちはしをくちせぬ物と
なをたのめとや ついたち比の夕月よにはしちかふても

ろ友になかめたまふにれいの柴つむ舟の行かふさますさ
きにたてるかさゝきの」 さむけなるすかたも所からのあ
はれ也 みるたひことにかほるはそのかみのみ恋しかりけ
り 一つよりもみすてかたくてとく京へむかへて心やすく
とおほせは京へかへり給てもいそきしやうしはらすへき事
なと御殿人の中に糸をもかゝせられけり はゝ北のかたも
めのともしうれしくおもひて物そめいまゝいりもとめてさふ
らはせなんとするをみるにもみやのぬすみとらんとのたま
ふ事おそろし

一 きさらき十日あまりのほどに御門人くめしあつめてふ

みつくら。せ給 にはかに雪ふりあれて風も」 はけしけ
れは御あそひとくやめて人くは宮の御とのる所にあつま
り給へり かほるもとまり給ふ ふし給とてのくちすさみ
にころもかたしきこよひもやとの給へり 事しもこそあれ
にほふみや御むねさはぐへし
引歌 さむしろに衣かたしきこよひもやわれを待らん宇治
のはしひめと云歌の心也 宮はこのくちすさみをおほし
めぐらすにあつまやのかたしく袖をわれのみおもひやる心
ちしつるにおなし心なるはあはれなれどくるしうもあるか
なかりおもふもとつ人をくきて我身による女の心さし
は」 いかばかりの事にてなひかすへかるらんとおほすに
行ゑもなく大空にみちぬる心ちし給へはこのくちすさみに
よりて又宇治へおはします か心のしりの大内記にはほふ
宮にみちしるへ申せはしきふのせうにあらぬ 御めのと
このときかたと此せうと又むつまじき人く四五人はかり
めしぐしたり 一つよりもまれのほそ道をわけ給ふみちの
ほと御と。の人くはなきぬはかりかなしうおそろし み
やこには友まつはかりきえのこりたる雪も山ふかくいる

まゝにいとふかくふりつみたり 宇治にはひるの御文にお
はせんとありし」 かとかゝる雪にはいかてかとうちとけ

18オ

たるに夜ふけてうこんにせうそこしたり 女君もいとあは
れとおもふへし うこんはいかになりはて給へきにかとお
もへどこよひはよろつわすれたり 川宇治よりをちにさきさま

人をつかはしていなばのかみといふ人のかりそめにつくり
たるいへにはふは二夜とやとをからせ給へり あつまや
をもくしてこのやとに心やすくひるもうちとけてそはんと
なるへし うこんはねをきたる心ちもわなゝかれてわらは
へのゆきあそひしたるけはいのやうにふるまひあかりたり
とかくもいはせ給」 はすかきいできて給へはうこ
んはこれのうしろみにとまりつゝいまひとりじゝうとて心

18ウ

かろからぬわかき人のあるをかたらひて御ともにはしゝう
をまいらせたり 女きみはあさ夕はかなしと見いたす舟に
もるともにのりてさしわたすほとあらぬせかいにきたらん
心ちしておそろしければ宮につといだかれたてまつりたる
をらうたしとおほさる 在明の月すみのほりて水のおもて
くもりなきにこれなんたちはなのこしまとて御舟しはしさ

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下)(今井)

しとゝめたるをみ給へは大きな岩のさましてされたと
きは木のかけし」 げれり 宮の御ことはにかれ見たまへ
三ちとせもふべきみとりのふかさをとのたまひて

19オ

にはふ宮 としふともかはらん物かたちはなのこしまがさき
のにちきる心は めつらしき心ちし

ヒ

あつまや たちはなのこじまの色はかはらじをこのうき舟ぞ
行急しられぬ この歌ゆへ巻をうき舟といへり 又あつまやともうき
舟の君と名付 あつまやうき舟てならひ同人也

舟よりやとまでも宮はみつからいたきて人にたすけられて
そいり給ふ 御ともの人にはなに人をかくもてなし給らんと
おもひけり 宮もなよゝかなる御しやうそくかろらかにめ
したり 女にもみなぬきすべし給しかは」 ぬきすべしとはす
べらかしたる事也

19ウ

日たかくおほとのもりをきて今日は女もみたれたるか
みすこしけづりくだしうこんがもとよりとかくたばかりて
御ぞともおせされたはこうはいのうす色なとあはいおかし
くきかへてゐたり ともなるしゝうもあやしきし口伝びらきたり
しをあざやぎたれはしゝうがもをとりて女君にきせてには
ふ宮の御てうづかけさせられたり いとうつくしけなるか
たちをみやこにてあまたの人をみれともかはかりなるはな

しと御らんず かたはなるまでうちとけてあそひたはふれ
てくらしたまふ あやしきすゝり」 めしいてゝ手習し給
ふ わるきすゝりなればあやしきと也 このいへに又あ
しろびやうぶあり いかさまよきすまゐにはたゝぬ物也
付舎心え給へし

宮 峯の雪みきはのこほりふみ分て君にぞまどふ道はまど

はず まよはずとも

女 ふりみたれみきはにこほる雪よりも中空にてぞわれは

けぬへき きえぬ
へき也

見やり給へは 宇治の宮
の事也 山はかゝみをかけたらんやうにき

らゝとしてそこはかとなく心ほそくみゆるに宮はよべわ
けこし道のわりなきなんと」 あはれおほくそへてかたら
ひ給ふ うらみてもなきてもけふは帰給へれば夜ふかくれ
いの舟にてこえ給ふ 宇治の宮の
つまとくちまてをくりいれてこれよ

りやかてわかれてみやこにかへり給ぬ

一 雨ふりやまで日ころになるころにはふ宮はいとゝ山路お

ほしたへてとは うち
の事 おやのかうこはくるしき物なりとお

ほさるゝもかたしけなし かの子のまゆの事也
さきにたましましければかたしけなしと

云こと葉そいたり

引歌 たらちめねのおやのかう子のまゆこもりくるしくも
あるかないもにあはずと云心 にはふ宮よりとかほる
よりと一どに御文あり

宮より なかめやるそなたの雲もみえぬまで空さへくるゝこ
ろのわひしさ きあひたり」

かほるより 水まさるをちのさと人いかならんはれぬなかめ

にかきくらすころとあり されかれとみるもうたてあれ

はなをことおほかりつるをみつゝふし給へりとは宮の御文也

うこんと侍従とみあはせてなをうつりにけり。といはぬや

うにていへり 侍従ことはりそかしとのゝ御ありさまをた

くひあらしとおもひきこゆれど宮は又すくれてきよらにこ

そおはしませかはかりおもひきこえ給へる御心さしを

みるゝはまろならましかはきさいのみやにまいりてもあ

らましなんどいへはうこんうしろめたの御心やいかはかり

の人か殿の」 御ありさまををしきこえ給はん御けはいな

とをはさらにもいはじ御心もちふよこの宮の御事はいとあ

やしきなりいかゝなりはて給はんとおもふこそなんとふた

りしていひるたり 女君は宮の御返りをけふはえきこゆま

しとはぢらひて手ならひに

うき舟 里の名を我か身にしれは山しろの宇治のわたりぞい

とゝすみうき 宮のかき給し糸を時／＼とりいてゝみて
なかれけり なからへてあるましき事そとときまかうさま

におもへどかき給しさまのたまひし事なとのおもひいださ
れていさゝかまところめは「ゆめにみえ給つゝうたであるま
22オ

ておほえたまふ まづ人みぬさきに宮の御返り。と申せば
うき舟 かきくらしはれせぬみねのあま雲にうきて世をふる

身をもなさはや とまこえたるを宮は御らんしてよゝと
なかれたまふ さりとも恋しとおもふらんかしとおほしや

るに物おもひてゐたらんさまおも影におほえたまふ かほ
るへの御返り

うき舟 つれ／＼と身をしる雨のをやまねは袖さへいとゝみ

かさまざりて とあるをまめ人^{かほろ}はしつかにみ給ていと恋

し 宮はしけく御文^{かほろ}をつかはし給ふ」ほとに又一日二日
22ウ

はかりありて御文つかはしたれば雨ふりし日の使とも宇治
にて行あひたり かほるのみずいじんかしこきものにてま
真人^{まこと}とふきてまうと也
うとはなにかしにこゝにはしけうまいるそとがめたり

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下)(今井)

にはふの御使はいますこし心もしらぬげすにてふかうも
たどらすとかう事かへてあらかひければすいじんめしぐし

たるしも人を^{ひと}にはふの御使にそへてかへりまいる所を
見^{ヒビ}あらはしけんこそくちおしけれ 宮へのうき舟の御返り

のふみはくれなゐのしきし也 その日かほるも御一所にお
はしければにはふのあかきかみのふみを」心にいれてよ
23オ

み給ふをかほる見給し也 すいしんの申すにすこしもちか
はねはまことゝかほるはもちる給ておほしめくらすにいと

あさまし にはふのこの比なやみ給ふもこの事をおもひ給
ふなりけり 見給てはさやうにおほすへき女なり われも

御門の御むすめをもちたてまつりたる身なれどたえてみず
は恋しかるへし とのゐ人をもそへてとくむかへとらん

とおもひ給ふはにくゝはあらぬ也 いかゝいふと心みにかほ
るより女の御かたへ御文あり

かほる なみこゆるころともしらすの松まつらんとのみ

おもひけるかな 人とわらはせ給ふなとかき給へり」
23ウ

うきふねこの御文をみるにおもてさとあかみぬ 物のきこ
えのあるにやとおもへど御返りを心えかほるに申さんもか

たはらいたければ御文をもとのやうにしてかきそへたるやう人たかへのやうにみえ給へは御文は返したてまつるくはしくはなやましくてきこえぬとかきたり 大将御らんしてさすかにいたくもしたるかなとにくみ所なくほをゑまれ給宇治の返しふみとと うこんかへし給ふ文を道にてあけてみたり 云は是也 春也 そのうちみしやうのとねりをめしよせてかほるいままてて宇治のとゐにすゑ給へり このよしいきりきていふをきくにふくろうのなかん」 よりもおそろし

24オ

一 うき舟の心にけにたゝいまあしくなるへき身なめり かのほの京へむかへとり給はん事かのつくば山もからうしてねがひかなふと ひたちの北のかたなれは よろこひ給にほふの御心は八たといゑたつ山にこもるともかならずたつね給てわれも人もいたつらになる事あるへしこの川のちかきさをたりにて身をなげんとおもひたつ さすかにおさなくよりいなかかりてひろき事をもみきゝならはぬまゝふつゝかにおそましき事を思よるなるへし みくるしきふみなと火にやき水に」 なけいれさせなと一たひに事ゝしくはせね給とやうゝ心におもひさたむ おやもしはしこそなけき給

24ウ

はめ子ともあれはなくさみ給はんからへてうき事あらんよりはかほるもあはれとおほしなんとおもふ さるほとに宮よりの御文にも御返りも申さねはおほしわひていかにおもひうつるふにかとこけのみたるゝわりなさをのたまふはぬすみてとらんと也 引歌 君にあはんその日をいつとまつ

の木のかけのみたれて物をこそおもへと云歌の心也

一 あをりかたしくといふはこのときの事也 宮はかやうにきびしからんともおほしもよらすつねのやうに」 御馬にておはしたれはれいならず宇治の宮のあしかきのかた人のをとしてあはれたそと事ゝしくとがめたり たちのきて人をいれてうこんにあひたれと大将殿よりとのゐをすゑ給ころにてわつらはしければこよひはふよう也 時のまもこゝにいたてまつらん事はあるましきといひきりたればさらはいかゝせん女房一人まいる給てこのよし申給へと御めのとこの時かたよひいりきてさそへはしゝうまいる かみわさきよりかひこしてやうだひいおかしき人なり 時かたがくつをはかせて時かたはともなるものゝあやしき物をはきて」 きぬのすそをとりてたちそひてゆく 宮はとをく御

25ウ

むまにてたち給へるにさとびたるいぬのいできて人／＼を
おいのけたり
ひさげなんとするもわつらはし 御ともの人／＼もいかさ

まなる物もはしりきたらん時とおもふにしづ心なし この
物とがめするいぬのをとなひたえず し／＼の君まいりた

れはこの人に事の上とひ給はんとするもおろしたてまつ
るへき所なければ山かつのをどろむくらのかきのもとにあ
をりといふ物をしきておろしたてまつる 宮はかゝるみち

にそこなはれてはか／＼しくはあるまじき身なめりとおほ
さるゝに」なき給事かきりなし 此宮をはや／＼もせはくらゐにもつ
けたてまつらんと御門もきさきも
おほしめしたるみやなれはかゝる道にはか／＼しかるまじきとはおほしめす
也 つちをふみたる人くらゐにはつかぬゆへ也 ふみたまはねとちかき事也

又あをりにもその心あり

一 し／＼うはまして物もきこえやらすかほるよりからくのた
まふさまかたれは一かたにうらみ給へまやうもなくてむな
しく帰給ふ さらははやとてこの人を帰し給ふさままめ
かしく夜ふかき露にぬれしめりたまへるかのかうはしきた
とへんかたなし

にほふ宮 いくつにか身をはずてんとしら雲のかゝれる山も
なく／＼ぞ行 宮は帰給へは侍従はうちに」 いらきた

26ウ

りおんな君にありつる御ありさまをかたるにもかくも
いらへ給はねどやう／＼まくらのうきぬへきをこの人のみ
るらんもはしたなし あけぬれどあやしからんまみをおも
へはむこにふしたり むことはぬるともなく又ねたりあ
やしからんまみとはなきたるめ也 いと／＼こ
の事によりて身をなげんとおもふ かほるにもいまはのけ
しき申をかまほしくてゆくゑもしらすなりなはいかゝき、
給はんとはつかしければかき付てをく

うき舟 なけきわひ身をはずつともなきあとにうき名ながさ
ん事をこそおもへ 宮より御文こまやかなれはいま一こ
ともよべきこえさりしはかなしくて御返に

うき舟 からをたにうき世の中にとゝめずはいつくをはかと
君はうらみん はゝひたちの北のかたより御文あり」
ゆめにあしくみえ給つるとてあしやりの寺へいのりの事い
ひてきたり かきりとおもふ身をしらてのたまふもあはれ
なり 御返事に

うき舟 のちに又あひみん事をおもはなんこの世のやみに心
まとはで 巻数 いのりしたるくわんしゆのをゝこせたるえた
に 寺のかねを聞て

27オ

うき舟 かねのこゑのたゆるひゝきにねをそへて我か世つき

ぬと君につたへよ はかなけにかけをひして経よみてお
やにさきたちなんつみほろほし給へといのりつゝなへたる

きぬをかほにをしあてゝふしたりとそ かやうにいひてこの巻は
過ぬ身なげたる所はな

しの中に「ならひ」のまきにみえたるやうはかく書きて人しつまりてつ
まをあげていたればやよひすゑなれはくらくて行へきかたもおほえす

27ウ

すのこよりあしをさしおろしてゐるに川のをどは物おそろしうひゞけばた
しかにおちいらん事おそろしくていかなるおににてもわれをくひてうしなひ
てよとなきいりてありしに大きな木のもとより男のきよげなるがきていぎ
給へをのれがすむ所へとてくして行てしらぬ所におれをはずゑをきてこのお
とこはかきけちてうせたるとおもひしとのおもひ出てうき舟小野にて人
にかたりしよし九てならひのまきにみえたり これこたまなり かやうにう
き舟の君のおもいたつ事やよひのすゑなり

以上廿二首

宇治之八 蜻蛉

一 宇治 かしこにはうき舟おはせぬをもとめさはげとかひなし

雨のいたくふるまきれにはゝ君もおはしたり めのとな

きまとふ事かきりなし はゝ君めのとは」 にほふ宮のみ 28オ

たれありけん事もしらねは身なげたるとも思よらすおにや
くひつらんきつねやうの物やとりつらんとうたかひ又かほ

るの北のかたより心おそろしきめのとなんともありて京へ

むかへ給へきをにくみて取たるやらんなんといまゝいりを

もうたがひけり かゝるまきれにはほふ宮より御使きたれ

御使いそきかへりてこのよし申せは宮御身のかはりにときかたを遣たまふ
はこゝになきなげくをときこゆめめのとのこゑにて我か君

をとりたてまつらんおにゝまれ人にまれたしにかへせ人

のおしむをほたいしやくもかへし給ふおわれにいま一どこ

ゑきかせ給へからをたにとゝめすうちすてゝ」 いつかた 28ウ

へおはしぬらんとこゑをしまぬを時かた にはふのめ
のとこ世 あやし

くて侍従をたつねてあひてくはしくの給へ宮の御身のかは

りにまいたりたるとなくくいふ しゝうもつゐにかくれあ

るましき事とおもへはかほるよりははしたなくのたまふ又

にはふはこなたへとらん事をのたまひしに御心みたれてわ

れと身をうしなひ給へるさまなりとかたりたり これをき

ゝ給ふ宮の御心たとへんかたなし 二三日はなき人のやう

にておはしけり やうくゝなみたつくし給てそありしさま

は恋しくおほしける

一 かほるは御はゝ入道の宮なやみ給へはいし山にこもり給

て」 さはき給ふころにてはかゝしくも申とゞくる人 29オ

なし

一 ふたりのうこんと侍従とこそ心の中に身をなげ給つるかとおもひよりけれ ざるほどには、北のかたこのよしをかたりて人きゝをもつくるはんといひあはせてはしめよりの事をかたるにきく人もきえいりかたる人もなみたにおほれたり さてはこのあらまじき水になかれうせ給へるよと川のかたを見やりてさても行急をたつねてなきからをもみんとの給へとも大うみの原へこそおはしけめいつこをはかりにたつねん中へ人きゝおぞましくとていひこしらへけり 人のなくなり」 たるありさまにまなひてよるの御ふすまさなからぬきをきたまへる御しやうそくちかくつかひ給し御でうどなどをくるまにつみてむかひの山きはへやりてたきあげさせたり たうときらうそうをかたらひてよそより心をもしらぬ大とこをあたりへもよせずしてとかくしたてまつる 御とのみなりし物ともまいりてかほる大将へこのよし申たればわかればとてもかくてもある事也なとかかりのさまの事をはわれにいひあはせずしてかるゝしくしなして山かつのそしりもあるへしとおほしなげく事か

29ウ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

きりなし いかなるさとの」 ちきりにてかくうき事をみるらんとむかしいまとりあつめておほざる にほふは身な

けたる事をしり給へり かほるはたゝかくれてはかなくなりぬとはかり心え給へり にほふの御かたへ御けしきもゆかしくてたちはなを折て

かほる しのひねや君もなくらんはかまなきしてのたをさにか心かよはゝ 宮はけしきあるふみかなとおほして御返宮 たちはなのかほるあたりはほとゝきす心してこそ嗚へ

かりけれ 宇治といふなもかほるはきかじと心うくおほしてよみ給

われも又うき古里をあればはたれやとりきのかけをしのはん 中へかほるはにほふのなけき」 給ふをきゝみるにこかるゝむねもすこしさむる心ちしてよそなからの事にはあらさりけりとおほす

30ウ

一 いみも過かたになりてさてもいかなる事をわつらひてうせにけるもきかまほしくてかほる宇治へおはしましてさらにまことしからぬよしうこんをめしいてゝたつね給しにかねてはといはんかく申さんとおもひしかともうるはしき人にさしむかひてはそれことも申あへずして身なけたるさま

30オ

をくはしく申たり かほるいま一しほあさましく心うくて
さては我があやまちにてうしなひたる人なりけりは、君の
おもひのいとおしくかなしくてねん仏の」 ぞうをもそへ
31オ

給ふ のちくゝのわさいかめしうとふらはせたまふ つ
くくゝとおほしつゝくるに宮をめぐらしとみたてまつりて
もわれをおろかにはおもはさりしほとに物のけしきみしり
かほにてとのゐなんとすゑたりしにおとろきてもとよりけ
たかくおほふしたてざりし人なれはものゝことほりをくは
しくもおもひとかずしてかゝる事を思たちけりなんといま
ぞまことにあはれもまさりたまふ は、君のかたへも御文
つかはし給 ひとりのこにわかれておもふらんなくさみに
のこりの子ともはみなかほるの御さたにて大やけへもつか
さなし」 たてんとの給へり ひたちのかみもこの御文を
うち返してみてめでたきさいわひをすてゝうせ給へる人か
なとていまそうちなきける これをみるにもは、君はふし
まろひてそなき給ふ かほるよりの御使は大蔵の大夫仲信
といふおとなしき人なれはは、きみたいめんしてうき舟の
ためにまうけたりけるよきはんさいのをびだちをとりい
31ウ

て、これはうせ給し人の御かたみなりとて出たり かほる
に御らんせきすればそゝろなる事かなとおほしけり はん
さいのたち 口伝

一 かやうの事きこえあれはあかしの一ほんの宮の女房に」
こさいしやうの君といふはかほるの御おもひ人なり かほ
るへとふらひに御文あり

小宰相 あはれしる心は人にをくれねと数ならぬ身にきえ
つゝぞふる 御返

かほる つねなしとこゝら世をしるうき身たに人のしるまで
なげきやはする 巨等 見

一 うき舟ののちのわざのときにはふ宮よりうこんかもとへ
しのひてしろかねのつほにこかねいれてつかはし給へはう
こんか心さしにてくはへたりけり

一 夏ころ六条の院にていかめしき御八講あり 夕きり」
の御さたなるへし はしめの日は源氏の御ためつきの日む
らさきの御れうなり そのとき女はうのつほねくもみな
とりはらはれたりしにかほる大将一品の宮を あかしの中宮の
女一の宮 にはふより御あね也 ほのかに見給しときこほりを御手
32ウ

にもちていなもたらじしつくむつかしとのたまひし御とゑ
ほのかにきこえてうれしくおほしけり かきりなくにほひ
てあたりなる人はつちかともゆるまでうつくしう人にすく
れ給しなり かほるいつしかあくかれて我か御北のかたは
一品の御いもうとなれはに給へるかとゆかしくてきのふみ
しことくしろきうす物にくれなる」 のはかまを女二のみ
やにめさせてこほりすこしわりてもたせ奉て御らんしけれ
ともとりくゝなる事にやに給さりけり 恋しき人を絵にか
きてみる事たにありこれはまさしき御いもうとなれはとお
ほしけり そのゝちゑのつゐてに一品の宮の御てをみて心
の中に思つゝけたまふ

かほる 萩の葉に露吹むすふ秋風もゆふへぞわきて身にはし
みける とおほしつゝけたり そのゝちせめてゆかしさ
にその御かたの女房あまたある所へ行て

かほる 女郎花みたるゝ野辺にましますとも露のあだ名を我に
かけめや 御そばのにうしろむきたる」 女房にみせ給
へはうちみじろきなんともせすいとくよしある手にてか
きてさし出たり

松平文庫本『光源氏一部詞』翻刻(下) (今井)

無名也 花といへはなこそあだなれ女郎花なへての露にみた
れやはする 又おとなしき女房おきなことにくしとて
大夫の君 たひねしてなを心みやをみなへしさかりの色にう
つりうつらず 御返

かほる 宿かさは一よはねなん大かたの花にうつらぬ心なり
とも かゝる事をいひてもさてもうき舟のあさましくはかな
き心のほとをなけき給 かけろふをみて

かほる ありとみて手にはとられすはかなくて行ゑもしらす
きえしかけろふ あるかなきかのと」 ひとりこち給
ふは 引歌 かつみてもはかなき物はかけろふのあるかな
きかの世にこそありけれ と云歌の心也

以上十一首

宇治之九 手習

一 その比よ川になにかしの僧都とていとたうとき人ありけり
り 八そちあまりのはゝいそちあまりのいもうとありけり
泊瀬にまうてければ僧都は山こもりにてざとにいてじと
おもひければでしの大とこそをそへてはつせにて経ほとけな

との事くやうせさせけり

一 ならざかすくるほとにこのはゝのおま君わつらへはよ川へせうそこしたり おいたるおやのみちの空にて」 なく 34ウ

やならんとていそきてよ川よりそうつおり給へり やとぬし うちのをや みたけしやうじんすれはいたくおいたまへる とぬし也

人のもしかくれ給はゝいみあるへしとわふればそうつけにて宇治の院といふ所しゆしやくゐんの御りやうなるにやとりかへたり いまのひやうとうゐんの事也

一 うき舟の君をこたまとりてゆきて此宇治の院のうしろなる大木のもとにすてをきたり 夜にிரりてかゝる事をおもひよらす 大とこたちうしろへいてゝこの木のもとにしろくひろごりたるものを見付たり しそくをさしよせてかほをみると」 するにこゑをたてゝなきてみせず むかし 35オ

ありけんめはなまきめおにゝやといふせくおもふ そうつきゝ給て六十にあまりぬれといまたきつねの人にへんじたるみたる事なしとてわざとおりてわたり給 雨いみしくふりけり しろきあやのきぬにくれなるうき舟つせたるその夜也のはかまきてかみはなかくかうはしき事かきりなし 僧都うたかひなくこれ

は人なりいのちおはらんとするをみつゝ雨にうちころさせん事あさましき事也 いけにおよくいを山にはしるけた物もかやうのきはにはほとけのすくい給へき時也」 とて弟子ともにいたき入させてをき給へるをそうつの

きゝてわれこのたひ泊瀬にまうつる事はひとりもちたりしむすめにをくれてあまりかなしければそのなくさむ心付て給とてまいりたり はつせの寺にてふしきのゆめをみたりしかは観音のたひ給ふ人なりとてゆきてみるに身にきずもなし たゝなくはかりにて物もいはねはひろいとりてあま

君のすみかはひえぎかもとの小野なりければ車二一にははゝの尼公をのせて人をそへ一にはこのひろいたる人をのせてあま君のりそひてゆきてこれをやういくするにたゝ」 おなしさまにて三月のすゑより四月五月もすきぬ しぬ

ましき事なればこそいまゝてもあれとてあにのよ川のそうつのもとへさりとはあがほとけふもとにおりてこの人たすけ給へといひのほせたり あがほとけとは我がそうつと云心也 僧都けにもとて弟子の大とこあまたくして下て大とこにけしやく口伝事せさせなとしていのりかぢす そうつもさしのそき給てよくでうしてとへと いのる事

の給 うきふね その時女につきたりける物小わらはにうつりてたく
 したり われは宇治山にすむこたまなり 山びこ おなじ もとはほ
 うしなりけるがいさゝかなる事にしうをとどめてかやう」
 の物になれり かたちある女のすみしところに住つきて
 かたへはとりころしたり うはそくの宮の御への事也 この女房はわれいかてしなんと
 ねがひ給しほとりたりしかともはつせの観音の御ひか
 へつよかりしかは木のもとにすてたるをこゝにひろひ給へ
 りいまは僧都にまけたてまつりてまかりなんといひけり
 そのうちうき舟の君心ちいてきてみめぐらせはしらぬ人の
 見もならはぬなれはまことにしらぬせかいへむまれたるに
 やとおもふ したいゝにおもひいだして恋しき事おほけ
 れともかたるへき人もなければすゝりにむかひて物をかき
 つくる」 よりほかにむかしにたかはぬ事なし そのゆへ
 に巻をもうき舟の君をも手習とは名付たる也
 手習の君 身をなけし涙の川のふかき瀬にしからみかけてた
 れかとどめし
 又 われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらん月
 のみやこに とかきたり

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下) (今井)

一 このあま君はひとりむすめにをくれたる人也 ふるむこ
 ありけり 中将とて時々京より小野へ来たり あるとき
 来て手ならひの君のうしろすかたをみてつくもがみおほき
 所にうちみたれかみのみえつるはゆかきしといひてくはし
 くとひきゝて」
 中将 あたし野の風になひく女郎花われしめゆわんみち
 とをくとも といひ入たり てならひの君はかやうの事
 はおそろしき物とおもひこりにしかはきゝもいれず あま
 りなさけなしとて
 尼 うつしうへておもひみたれぬをみなへしうき世をいと
 ぶ京のいほりに ほとへてこの事ゆへに小鷹かりにかこ
 付て小野へきたりて手ならひのかたへ をのゝたかゝり是也 ことなる事なし
 中将 松むしのこゑをたつねてこしかとも又荻原の露にま
 とひぬ 返し
 尼 秋の野の露わけきたるかり衣むくらしけれる宿にかこ
 つな」
 尼公 ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山のはちかき宿に
 とまらぬ 返し

中將 山のはにゐるまで月をななめみんねやのいたまもし
るしありやと 中將はあさはかならずいひかゝるを手習
の君は世の中はむつかしきならひなりけりくち木のやうに
人にもしらすしていのちのほとはあらんとおもふにことに
都のかたの人は心うしとおもふ いにしへの事をもかた
りて

中將ふみに わすられぬ昔の事もふへ竹のつらきふしにもね
そなかけける 返し

尼公 笛の音にむかしの事もしのはれてかへりし」 ほとも

袖ぞぬれにし あま君はむすめの事なくさめかたきにく
はんおんいますこしうつくしき人を給りたりとてかへり申
しの心にはつせへまうてけり てならひの君をさそへとも
まいらす れいの

手習に はかなくて世にふる川のうきせにはたつねもゆかじ
二もとのすき と書たり あま君みて二もとはまたもた
つねんとおもふ人もち給へりやとて

御返 尼 二もとの杉の木たちはしらね共すきにし人によそ
へてぞみる とて侍従こもきとてわかき人のあるをひめ

38ウ

君によくそひたてまつれとてまゐり給ぬ あやしけれとも
たのもしくおもふ人の」 物まうてし給へれば心ほそくい
とゝおもひつゝけられてなかめたまふ れいの

手習 心には秋の夕をわかねともなかむる袖に露そこほ
るゝ あま君おはしまさすときゝてみやこより中將おは
したり とまり給て月おもしろきに手習へ

中將 山里の秋の夜ふかきあはれをも物思ふ人はおもひこ
そしれ 返すへき人なくて

手習 うき物とおもひもしらてすくる身を物おもふ人と人
はいひけり

一 手習の君は中將のとまりたまへるも物おそろしうて」
かのやそちあまりの大あま君のかたへ行てふし給へり
きゝもならはぬいびきといふ物おとろくしうまへにふし
たる人ふたりありておとらしといびきあはせたり こもき
をともにいておはしけれといろめきたるおとこの月めで
する所へゆきてかへらねはこよひ此としよりたちになくは
れんすらんとおもへはおしからぬいのちなれともかなしき
に夜なかくるほとに大あま君おきあがりてしわふきもえ

39ウ

39オ

たへぬさまにてかしらはしるきにくるき物をいたゞきてい
たちといふ物のさるわざするひたいに」 手をあてゞこゝ

40オ

なる人はたそとて見をこせたるさらたゞいまくはれなん
ずとおほゆるにやうゞ夜あけぬ このおい人たしいとと
くおきてかゆなといそきてこの君にもすゞむれどまかなひ
めさましくてあなたへわたりなんとし給によかはよりまろ
がしらのほうし原おほくきてけふよ川のそうつくり給へ
し京よりあかしの一品の宮の御なやみに山の座すみしゆほ
う仕給へともしるしなしてなを僧都まいり給へとあかし
の中宮の御文をもちて四タキリの子也のせうしやうよへおはしました
り心ちよけにいへはてならひ」 の君の心にあま君の泊瀬

40ウ

まうてのひまにてさまたぐる人もあるましきにあまになし
てよと申さんによきおりとおもひてこの大あま君にも僧都
に申給へといひあつてわか方に帰てかみときくたす い
ときよらにてすこしおちほそらずあはれにてかゞれとしてし
もとなてゐたり 引歌 たらちねはかゞれとしてしもうは玉
の我かくろかみをなですもありけんめイと云歌の心也

一 僧都下てはゞ大尼公のかたにて物かたりし給にはれゞ

松平文庫本『光源氏一部譚』翻刻(下) (今井)

しけれど手習の君の事あまにならんと」 のそみ給ふなり
とかたられたり 僧都手習のすみ給かたへこゝにおはしま
すらんとて木帳のもとについる給へり 手習いさりよりて
はつかしけれとなをなからへかたきありさまなればしはし
のほにてあまになりて心見侍らんとおもふなりとな
くゞ申給へはほうし心にげにうつし人にてはあるまじか
りし人ぞかすとあはれにて弟子の大とこよひよせて御ぐし
おるせといふ ひとつれしくてはさみとりてくしのはこの
ふたにをきて木帳のほころびよりかみをかきいたし給へる
が六しやくはかりにてこちたくおほき事きよら」 なるをみて大と
こたちもはさみをもちわつらひたり ひといを僧都そぎ
給とてかゝる御かたちやつしてくい給ふなとたうとき事共
いひきかせ給ふをすゞしくおほす おやのかたおがみ給へ
との給ふにいつかたとしらぬほとなんあはれにてなかれ給
るてん三界中ヒにとのたまふにもたちばてゞし物をとあはれ
なり かくてそうつは京へいて給ぬ あま君のるすなる人
ゞもあさましかりおぞましくいふにいとたておほゆれ
はくらくしなしてゐ給へり さすかにむねつづれて」

42オ

41ウ

41オ

手習 なき物と身をも人をもおもひつゝすてゝし世をぞざらにすてつる

又 かきりそと思なりにしよの中を返々もそむきぬるか
な あまに成給ぬよしきゝてみやこより御文あり

中將 きしとをくこきはなるらん海士舟にのりをくれじと
いそかるゝかな いまはくるしからぬ身とおもへはこの
ふみのはしに

手習 心こそうき世のきしをはなるれど行ゑもしらぬあま
のうき木を

一 尼公はつせより帰てふしまろひおしみてなき給ふを見る
もまことのおやのからもなくなして」 なけき給けん事思⁴²
やらる 京より中將又おはしたれば

尼公 木から^しの吹にし山のふもとにはたちかくるへきか
けたにそなき 御返

中將 まつ人もあらしとおもふ山里のこすゑをみつゝなを
そすきうき てならひの君のあまになりたるかたちを人
をかたらひて中將のそきたり じゆずをは木帳にうちかけ
て経を心に入てよみる給へり しろくあてにみじかきかみ

のかゝれるかほのにほひけしやうをいみしくしたらん人よ
りもうつくしければ心ならずなみたもとどめかたくてなく
けしきもきこえつへければたちさりぬ あま君のかたへい
ふやう」 あまなりともたゝもたらんわれにゆつりをき給
へといひけり てならひの御かたへ又

中將 大かたの世をそむきける君なれどいとふによせて身
こそつらけれ とありけれどさのみはうるさしとて返し
はなし

一 冬になりぬれはいと心ほそくて

手習 かきくらす野山の雪をなかめてもふりにし事そけふ
もかなしき あま君のかたへわかなを人のおこせたる手
習へたてまつりてよみ給へり

尼公 山さとの雪まのわかなつみはやしなをおいさきのた
のまるゝかなとあり 御返」

手習 雪ふかき野へのわかなもいまよりは君かためにそと
しもつむへき 仏にたてまつる花をわかきあま君におら
するにのきはちかきこうはいのかことかましくにはひくれ
はこと花よりもこれに心よせのあるはあかざりしむかしの

人のなこりとまれる心にやとあはれなりといふはかほるの御事也

手習 袖ふれし人こそみえね花のかのそれかとにほふ春の

あけほの

一 としもかへりぬ みやこにはうき舟の一めぐりのいと

みかほるはいかめしうし給 ぞのゝあま君のまことに

のかみといふはかほるの御殿人なり うき舟の一めぐりの きの

一くたりかほるへでうしてまいらすへきををのにてそめう

たせなとしげり これをみるにてならいの君はゆめの心ち

しけり かほるの宇治へおはしまして宇治川をのぞきてう

へなるはしらにかき給

かほる みし人は影もとまらぬ水のうへに落そふなみた

とゝせきあへす かゝる事をもこのきのかみをのにてく

はしくかたる てならひのあま君はいまたわすれ給はぬよ

とおもふもあはれなり

一 あまになり給てのちはあま君たちにもたはふれ事いひて

又 〇基なともうちてよのつねめきてもてなし給けり」 をのに 秋は

おんなとものか田のいねかるとてひた引ならし物まねひしてうたひな

とするをきくもみしあづまぢの心ちするとはひたちに住し事也

松平文庫本『光源氏一部詩』翻刻(下)(今井)

このそうのふせの花やかなるしやうそくでうしいだしてて
ならひの君にはかゝる色をこそゝめさすへけれすみそめは
心うしといへは

手習 あま衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけ

てしのはん

以上廿八首

をのにはまきるゝ事なくあをほの山をなかめ
たまふとは大かたのしけり也 名所にあらず

一 僧都一ほんの宮の御いのり申給へはやかて御なやみおこ

たり給にけり あかしの中宮の御よろこひかきり」 なく

て夜ゐるのはと御まへにさふらはせ給て御ものかたりあるつ

ゐてにものゝげんでうの事によりて僧都こそ春はつせま

うてのたよりに宇治の院といふ所にとゝまりてけうの事を

見侍りしとて けうの事とは
まれなる事也 うき舟の君をひろいたりし時の

事こたまたの事又もとの人になりてこのたひさまかへたる事

まてくはしくかたり申たり あかしの中宮きこしめすにそ

のころ宇治にてきえうせしうき舟の行ゑときゝなし給てか

ほる大将に人してつげさせ給ふ かほる一めぐりすきての

事なればゆめかと思給ふにそうつは山へのほりぬればよか

はへおはして事のよし」 くはしく僧都にたつねんとおほほ
して卯月八日をまち給ふ 45ッ

宇治之十 夢の浮橋

一 かほる 山におはしてれいの八日にもせさせ給ほとけのきやうく
やうし給て又の日横川にわたり給へり 僧都かろくし
らぬ殿のかくおはしましたる事とかしこまり申給て御ゆづ
けなと所につけたるみあるしの事あり すこししつまりて
かほる小野のわたりの事とひたまふ 手習の君の御でしに
なりていむことうけたるよしきゝ侍れは心やすく侍れど
はゝなる人のわひなけき侍れはなからへてあるよし」 た
しかに返事なともみせたく侍れは僧都に小野へおり給へと
の給へともそうつされはよたゞ人とみえざりし人をほうし
といひなからなきけなくたちまちにかたちをやつさせてげ
るとおもふにむねつふれてとみに御いらへもなかりけり
かほる事のよしをちかごとをしてくるしからぬよし申給へ
はさらはとててならひのかたへそうつ御文あり うはかき
には入道の。君姫へとかき給へり このふみにかほる大将御

46オ

文をそへ給へり かみに かきりなき御心のつらさをは僧都につみ
ゆるしきこえていまはいかて身つからよろつきこえさせん
といそかるゝ心の我なからもとかしくとて」

46ッ

かほる大将 法の師とたつぬるみちをしるへにておもはぬ山
にふみまよふかなとくはしくかき給て手ならひのおとう
とのちこをつかひにやり給へれとも手習の君あさましくは
つかしくおもひて弟との童にもたいめんせすかほるの御ふ
みもさやうのふみあるへき人もおほえずとて見もせずして
あま君のかたへさしやりたり まして御ふみの返事も申さ
ねは御使のわらはくちおしくおもひて帰りまいりてこのよ
しかほるに申せはいとおもひの外にまちかね給しをとつれ
のかひなくおほつかなければもし人のかくし」 すゑたる
にやと我か御心のぬるくて宇治におとしをき給しならひに
うたかはしくおほしけるとぞ

以上一首

47オ

享徳貳年林鐘後十日 祐倫
此本書写于時天正十四年九月廿三日也」

47ッ

〔附記〕

本稿は、三回に亘つて分載発表したが、その中、第二・三回には、原稿作成に当つて、左記の方々の協力を得た。いずれも昭和四十一・二年度に九州大学文学部国語国文学科を卒業された方々である。

秋吉（旧姓龍頭）昌子・木原（赤尾）千鶴子・奥江（太田）ふみ子・白山法子・高山典子・羽坂（大高）叡美・神矢鈴子・五所美子・寺内美代子・浜田勝子・柳原繚子。

また、金原理・後藤昭雄の両君からも、校正について援助を受けた。共に記して、感謝の意を表したい。